富田川河床遺跡発掘調査報告書

— Ⅲ —

1983年3月

育委員会

富田川河床遺跡発掘調査報告書

— Ⅲ —

1983年3月

島根県教育委員会

序

このたび、飯梨川改修工事に伴う富田川河床遺跡の昭和56年度発掘調査報告書を発刊するはこびとなりました。この遺跡の調査は当初から数えて第7次でありますが、皆様の終始変らぬご理解により多大の成果を挙げております。

この調査は、富田橋と新宮橋との間、ちょうど史跡富田城跡の前面部分の2000㎡を対象としました。その結果、遺構では上層で南北に走る幹線道路に沿う町屋を、下層で埋甕施設を伴う工房跡等を検出し、また、出土品では寛永の年号を記載する木札も認められるなど富田の町並みやその具体的年代を知る資料を多く得ることができました。こうした本遺跡における成果が、近年、広瀬町教育委員会の手によって進められています史跡富田城跡およびその周辺部の調査と相まって、城跡と城下町の形成、発展を解明する手懸りになれば幸いです。

最後になりましたが、ご指導、ご協力頂きました関係者各位および地元の皆様に衷心から感謝の意を表し、発刊のごあいさつと致します。

昭和58年3月

島根県教育委員会

教育長　水津卓夫

例　　言

1. 本書は、島根県教育委員会が島根県土木部から委託を受けて実施した飯梨川河川改修工事に伴う富田川河床遺跡発掘調査の概要である。現地調査は昭和56年度に、報告書作成は昭和57年度にそれぞれ行なった。
2. 調査は以下のような組織で、島根県教育庁文化課が実施した。(敬称略)

調査指導者　山本清（島根県文化財保護審議会委員、島根大学名誉教授)、小島清兵衛（島根県文化財保護審議会委員)、熊野栄助(島根県文化財保護審議会委員・島根県立出雲工業高等学校校長)、住田勇（日立金属和鋼記念館館長)、蓮岡法暲（木次町立木次中学校教諭)、井上治夫（有限会社井上松影堂役員)

調　査　員　石井悠（文化課埋蔵文化財第二係長)、村上勇（島根県立博物館学芸員)、西尾克己（文化課主事、調査担当)、丹羽野裕（文化課兼主事)、柳浦俊一（八雲立つ風土記の丘資料館職員)、広江耕史（同)

調査補助員　赤木研二、赤沢秀則、浅沼政誌、稲田信、角田徳幸、千賀康弘、高島日出男、橘弘章、秦誠司、松井静二（以上島根大学学生)、井出良彦、岩崎仁志、北浦弘人（以上山口大学学生)

事　務　局　武田友秀（課長、昭和56年度)、福田治夫（課長、昭和57年度)、藤間亨（主査)、長谷川行雄（課長補佐)、岩崎況一朗（文化振興係長)、吉井良夫（主事)、田根裕美子（嘱託)

3. 遺物の整理、報告書の作成には調査員、調査補助員および三宅博士（八雲立つ風土記の丘資料館職員)、足立節子、阿部隆恭、石倉登、井上寛光、小原明美、盛山よう子、竹内信枝、竹田豊、手銭弘明、藤原哲也、村田弘子、森本節子、吉村真治が携った。木製品の下駄については日本はきもの博物館の潮田鉄雄氏に教示を得た。
4. 本書の報筆は石井、西尾、三宅（木製品)、村上（陶磁器等）が当り、編集は石井と西尾が行った。
5. 図面の作製、トレース、写真撮影は調査員、調査補助員および井上洋子、吉木巧による。なお、空撮写真とその図面については、アジア航測株式会社の作成にかかるものである。
6. 本文中使用する遺構記号は次のとおりである。

ＳＢ（掘立柱建物跡)、Ｐ（柱穴)、ＳＤ（溝)、ＳＫ（土壙)、ＳＥ（井戸)、ＳＨ(空地)

7. 本文中の掲載図面に示した方位は磁北を示す。
8. 調査実施にあたっては、島根県土木部、広瀬町教育委員会をはじめ地元各位及び関係諸機関から多大の協力を得た。記して謝意を表する。

目　　次

序
Ⅰ　はじめに …… 1
Ⅱ　地理的環境と歴史的経緯 …… 3
　1．地理的環境 …… 3
　2．歴史的経緯 …… 4
Ⅲ　既往の調査 …… 7
Ⅳ　第7次調査の概要 …… 9
　1．第1遺構面の概要 …… 10
　　ＩＰ・ＩＱ区の概要
　　ＨＱ・ＨＲ・ＧＲ区の概要
　　ＧＳ区の概要
　　ＦＵ・ＦＴ区の概要
　2．第2遺構面の概要 …… 60
　　（ＩＰ区）
　3．第3遺構面の概要 …… 77
　　（ＦＵ区）
　4．第4遺構面の概要 …… 84
　　（ＦＴ区）
　5．第5遺構面の概要 …… 94
　　（ＦＴ・ＧＳ区）
Ⅴ　小　　結 …… 98

附　　論
Ⅰ　富田川河床遺跡の町割について …… 1
Ⅱ　富田川河床遺跡の漆器について …… 9
Ⅲ　富田川河床遺跡の金属製品について …… 11
Ⅳ　富田川河床遺跡の陶磁器について …… 15
Ⅴ　第7次調査で検出した柱痕の木材鑑定 …… 19

Ⅰ はじめに

富田川（とだがわ）河床遺跡は、国指定史跡富田城跡（能義（のぎ）郡広瀬町）の西麓を流れる飯梨（いいなし）川（古名を富田川）の河床に存在する。飯梨川は古くから流域一帯に利便と大きな富をもたらしてきたが、一方では度重なる氾濫によって大きな被害をも与えてきた。次章で述べるように、記録に残る江戸時代の大きな氾濫は11回に及んでいる。特に、寛文6年（1666）の大洪水は中世～近世の城下町として栄えてきた町並を一瞬のうちに呑みこんで、そのまま流れを変えてしまったということである。

ところが、昭和35年に富田橋の下流80mの地点で床止めの堰堤が築かれ、それと相前後して上流では布部（ふべ）ダムの建設が、下流では採砂が行なわれた。そのため河床をおおっていた砂は下流へ運ばれ、ダムや床止めにより上流からの砂が流れなくなったので、遺跡があらわれ始めたのである。こうした現象は昭和40年以降、特に顕著なものとなった。多量の陶磁器類をはじめとする遺物の採集、また、数少ない中世～近世の遺跡としての重要性など世間の注目を浴びるようになってきた。

昭和42年と45年に山本清氏（当時県文化財専門委員）は現地を踏査し、遺跡の概要を報告するとともに、その重要性と調査の緊急性を説いた。山本氏の報告によると、昭和40年以降観察された遺構は次のとおりである。(1) 列石――上流から下流へ少なくとも500mばかりの範囲に露呈し、大小あわせて10～20ヶ所あらわれている。① 長方形に並び宅地の周囲を区画するもの、② 道路沿いのもので町並を思わせるもの、③ 溝状に並ぶもの等がある。(2) 井戸状配石遺構――東西両岸に数基ずつあり、下流のC区にも一種井戸状の遺構がある。(3) 鍛冶工房様遺構――A区の中にあり、多量の灰、焼土、ふいごの羽口・鉄滓等が採集された。(4) 掘立柱建築遺構――A区では掘立柱が直立したままで露呈している。こうした遺構は出水のたびに流失、あるいは土砂におおわれて様相が変化し、河床はさらに低下を続ける状況にあったため、放置しておけば遺跡は崩壊してしまうと判断した山本氏は、報告の最後に「とりあえず、大至急実施を要すると思われることは、① 遺跡を中心とした堤防を含む地形図の作製、② 現在露出の遺跡面、その他の重要部分の発掘調査、早急にこれを実施し、その結果をもとに、より組織的な発掘調査がなさるべきものと考える。」と記している。

昭和48年夏の異常旱ばつで飯梨川の流水が減少し、新宮橋下流500mの河床に広範囲にわたり建物跡、石積井戸跡などが露出したので、広瀬町教育委員会では露出した遺構につ

いての緊急調査を実施し、写真撮影と実測等による記録保存を行なった。しかし、遺構が飯梨川の河床にあるため、堆砂による遺構面の保護ができなくなり流水によって崩壊消失してしまう恐れがあった。そのため広瀬町教育委員会は国と県の補助金を得て昭和49～51年度にかけて遺構確認の緊急発掘調査を実施し、併せて周辺一帯の1000分の１の地形実測図を作成した。富田川河床遺跡発掘調査の始まりである。今回の調査に至るまでの概要は「既往の調査」の項で述べることにする。

その後、新宮橋架け替え工事、飯梨川河川改修工事が島根県土木部で計画されたため、島根県教育委員会及び広瀬町教育委員会は県土木部と協議のうえ、工事施工部分については事前に発掘調査を実施することとなった。今回報告する調査は、河川改修工事に伴うもので、県土木部から委託を受けて県教育委員会が、昭和56年６月22日～昭和57年１月22日までの間、富田橋下流地点の総延長180m、幅11mの範囲で行なったものである。

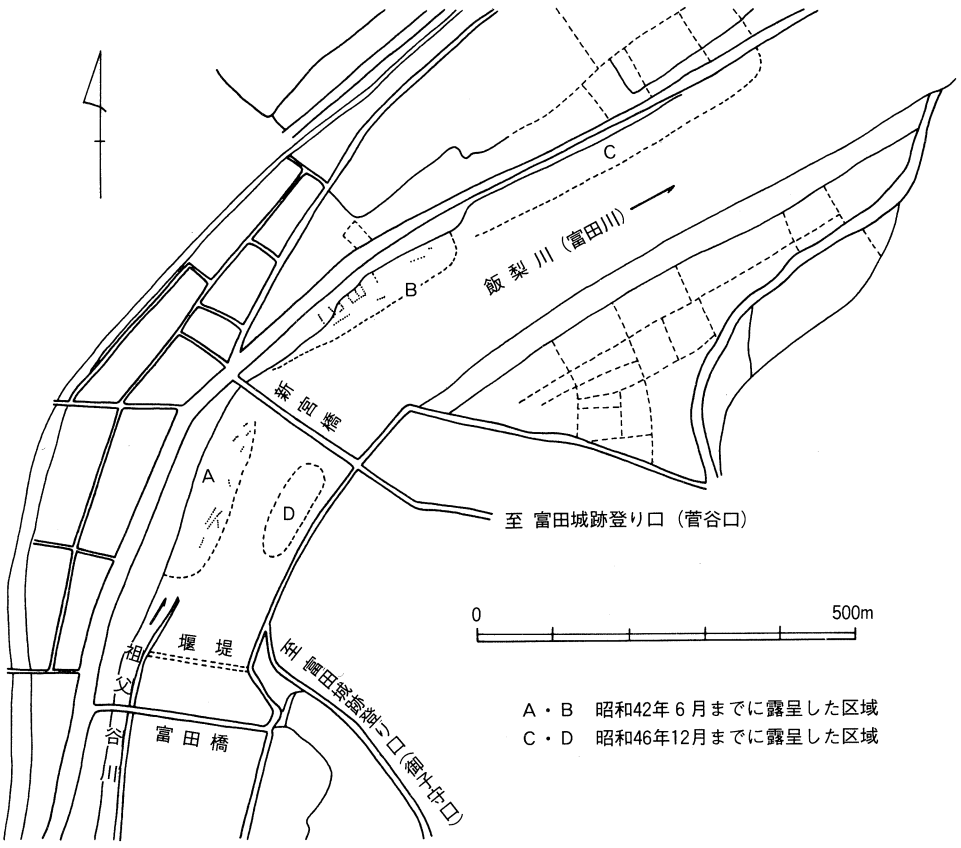


図１　富田川河床遺跡露呈位置略図

（山本清氏報告『島根県能義郡広瀬町富田川河床遺跡の概要』から、一部修正）

Ⅱ　地理的環境と歴史的経緯

1. 地理的環境

前述したごとく、富田川河床遺跡は国指定史跡富田城跡の位置する月山の西麓を流れる飯梨川の川床に所在する。

飯梨川は源を広瀬町の奥部に発し、安来(やすぎ)平野をほぼ北方に貫流して中海に注ぐ総延長39.9㎞の能義郡最大の河川である。その流路は過去幾度かの氾濫で、主要なものでも5回にわたり河道が変遷している。

飯梨川の上流域一帯は花崗岩類の地質で、風化が進行しており、ぜい弱で雨水、流水により崩壊しやすい土質である。また、この地域は良質の真砂砂鉄を産し、古くより流水による「鉄穴流(かんなながし)し」がおこなわれ、盛んに山が切り崩されて、大量の砂が川に流されてきた。

これらのことがあいまって、飯梨川は下流域に砂質の安来平野を形成したが反面堆砂により河床が上昇して、県下有数の天井川となった。

このため過去幾度か大洪水を引きおこし、流域に甚大な被害をもたらした。江戸時代の記録に残っている大きなものだけでも寛永12年（1635）をはじめとして寛文6年(1666)、延宝2年（1674)、元禄11年（1698)、同15年（1702)、同16年（1703)、享保6年(1721)、同14年（1729)、宝暦11年（1761)、明和5年（1768)、文政9年(1826）と11回におよぶ。

伝えによると、その中で富田川河床遺跡に直接関係するのは寛文6年（1666）の洪水であるといわれる。

能義郡伯太町、西村家の記録によると

寛文六丙午八月四日ノ晩ヨリ大雨大水出田畑捨リ母里富田不残流レ富田母里町共替ル人多ク死ス

とあり、富田八幡宮付近の東側堤防が決壊し、濁流は月山麓の城下町を呑みこみ、富田川は町並を厚い砂の下に埋め込んだまま川違いをしてしまったという。

また、その悲劇の寛文6年新設された広瀬藩の第一代藩主松平近栄は廃墟の中から新しい町づくりに着手しなければならなかったのであるが、幕府へ提出した次の文書によってその洪水の事実を知ることができる。

一、川向富田去午の秋洪水にて満水残の町五町程御座候此の古町を居屋敷広瀬の方へ

引越申度奉存候　以上

寛文七丁未二月廿一日

松平上野介

寛文６年の洪水における当時の記録は多くないが、以上１、２の資料でその事実を知ることができる。(『富田川河床遺跡―発掘調査報告―』広瀬町教育委員会・富田川河床遺跡調査団、1977年より抜粋、一部修正)

2. 歴史的経緯

富田城の創築された時期は、平安時代末期という伝説もあるが明らかでない。そもそも富田城は能義郡富田庄に築かれた山城であり、それが所在する富田庄の名が初めて文献にあらわれるのは、永暦元年（1160）である。その後、文永８年（1271）富田庄の地頭として初めて出雲国守護佐々木泰清が確認される。そして、富田氏は泰清から富田庄地頭職を譲られたその子の義泰から始まる（注１）。

富田城の初見は『明徳記』（注２）であるが、富田城を拠点とした動きが文献上にあらわれてくるのは京極氏の出雲守護代尼子持久の頃からで、応仁年間（1467～69）出雲守護代尼子清定の時期からその動きが明瞭になってくる。

尼子氏は、清定の子経久が文明年間（1469～86）の頃から守護と離反して独立し、急速に戦国大名として成長し、その末年から天文年間には、晴久は毛利氏本拠の郡山城（広島県）を襲撃した。しかし、それに対し大内・毛利勢は富田城を攻撃し、西は石見・安芸、東は但馬・播磨にまで追攻するようになる。

このように富田城を中心とした尼子氏の発展と共に、付近に集落が新たに形成されたと考えられる。また、南は富田川上流の福頼(ふくより)から北は下流の安来市赤江(あかえ)方面まで町ができていたという口碑があるが、これは多少の誇張はあるにしても、当時の状況を少なからず反映したものと思われる。

一方、経久の二男国久は新宮谷にその子の豊久・誠久・敬久などの一族と共に屋敷を構えたので、新宮党と呼ばれた。新宮党は世に勇猛をもってきこえ、軍事の際は中核となって活躍した。そこで、毛利元就はこの新宮党の力を殺すため、奇計を巡らし新宮党に逆心ありとのデマを流し、この計略に乗せられた晴久は、天文23年（1554）新宮党を討滅してしまったという。

その新宮党の屋敷跡は富田城北東の新宮谷中ほどの太夫成(たゆうなり)と呼ばれる平坦地にある。この屋敷跡は昭和53年に発掘調査がおこなわれ、礎石をもつ建物跡や数々の遺物が出土し、その輪郭が明らかになった（注３）。

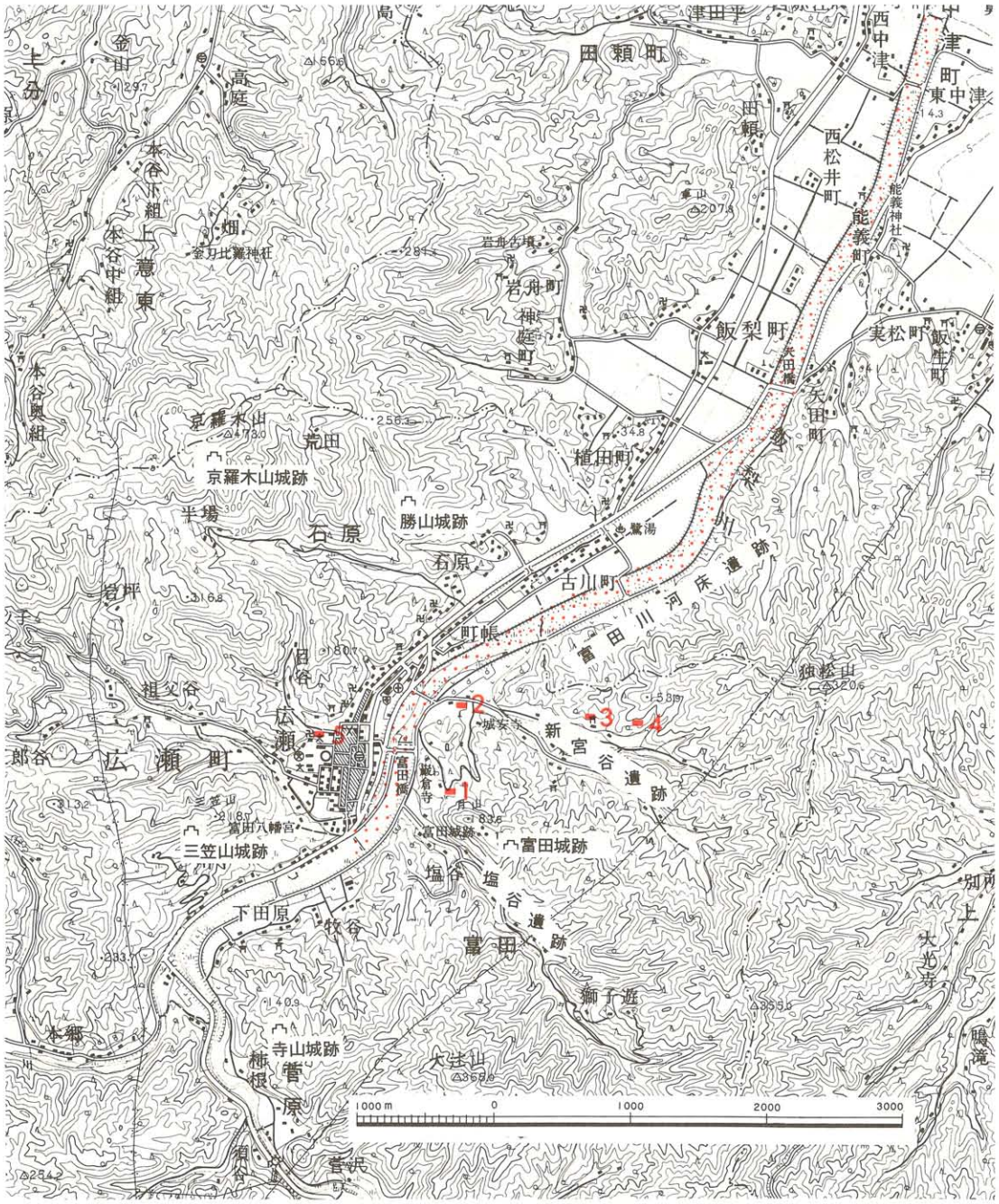


図２　富田川河床遺跡と周辺の主要遺跡

1．山中御殿跡　　2．里御殿跡　　3．新宮党居館跡
4．三太良遺跡　　5．広瀬藩邸跡

その後、尼子氏は義久が永禄9年（1566）毛利氏に屈し、毛利氏は富田城に天野隆重を置いて出雲国を支配した。しかし、関ケ原戦後、時の富田城主吉川広家は周防に退き、替って慶長5年（1600）浜松から堀尾吉晴が出雲・隠岐の大守として移封され、富田城に入った。しかし、新しい領主吉晴は、富田が位置的にも規模的にも、領国支配のための近代的体制づくりに欠陥ありと判断し、その代替地に松江を選び、慶長12年（1607）松江城構築に着手し、同16年（1611）に移城した。

松江城建築に際しては、解体した富田城の木材等を利用したといわれ、家臣団は勿論であるが、寺院等も新しい城下町づくりの必要からその多くが移住させられた。

ここにおいて富田は尼子経久以来二百数十年にわたる出雲における中枢的地位を失い、俚謡にもあるように「思いがけない松江ができて、富田は野となる山となる」の凋落を余儀なくされ、衰微していったのである。

その後、堀尾氏は断絶し、京極氏が後を襲ったが同氏も断絶、寛永15年（1638）、松平直政が出雲・隠岐の領主として信州松本城から転封され、松江城に入った。そして運命の寛文6年には直政が没し、綱隆襲封に際して、4月に第2子松平近栄が3万石の広瀬藩主として分封されたのである。

このとき富田は、松江城移築の慶長16年から54年を経過しており、山間の一集落に衰微していたが、寛文7年の松平近栄の文書によれば、寛文6年の秋の洪水でその城下町は5町ほどを残し、富田川の川底に封じ込められたのである。しかし、発掘調査の結果では、寛文6年以前にも城下町全体に潰滅的被害を与えたり、あるいは部分的に甚大な損害をもたらした洪水が何回かあったことが判明した。

富田川河床遺跡はこのような経緯の、17世紀中葉を下限とする城下町の遺跡である。

注 1. 松尾慶三・西尾克己「出雲・富田城とその城下町の調査」（『日本歴史』第415号、1982年12月）
松尾慶三「尼子氏以前の富田庄 一城下町成立の 歴史的前提一」（『季刊文化財』第45号、1982年3月）

2. 『明徳記』下に2か所にわたり「富田ノ城」という語がみえる.

3. 前島己基「尼子氏、新宮党の居館」（『季刊文化財』第38号、1980年3月）
広瀬町教育委員会『新宮谷遺跡発掘調査報告書』（1983年3月）

Ⅲ 既往の調査

富田川河床遺跡の発掘調査は、通算すると今回で第7次の調査となる。以下、これまでの調査で判明した遺跡の概要を年次を追って略述する。

第1～3次調査（昭和49～51年度）

3年次にわたり、広瀬町教育委員会が実施したもので、検出された遺構は、建物跡15、井戸跡15、道路跡5、鍛冶工房跡2、木桶9、その他がある。町のなかをはしる幅約6mの幹線道路跡が検出され、道路を軸にした城下の町並構成の一部を知ることができた。建物跡の多くは石列状の遺構をめぐらした長方形の区画をもち、なかには掘立柱の柱根や礎石（根石）を残しているものもみられた。第3次調査区では、第1層の遺構面より下を一部掘り下げたところ、第2層目の遺構も検出された。第1層は江戸時代初期、第2層は安土桃山時代まで遡るものであることが判明した。

第4次調査（昭和51年度）

広瀬町教育委員会が実施した、新宮橋架け替えに伴う事前調査である。検出された遺構としては第1グリットで石列1、第2グリット上層で土壙2、下層で建物跡1、土壙5、井戸1がある。また、遺構面については3面以上が確実に存在することが認められた。

第5次調査（昭和53年度）

第5次調査以降は、島根県教育委員会が飯梨川河川改修事業の事前調査として実施した。第5次調査で検出した遺構には、外壁基部1、石積遺構2、柵列1、溝2、大溝1、土壙4、その他ピット多数がある。このうち、外壁基部は全長40m以上におよび幅2mの間に礫が雑然とつめこまれていた。

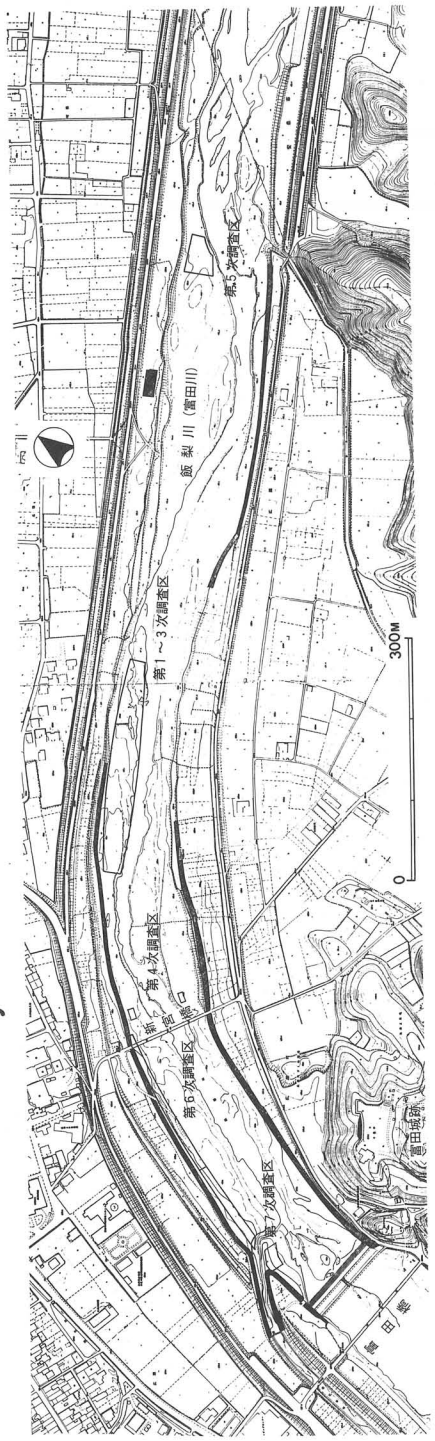


図3　既往の調査地点

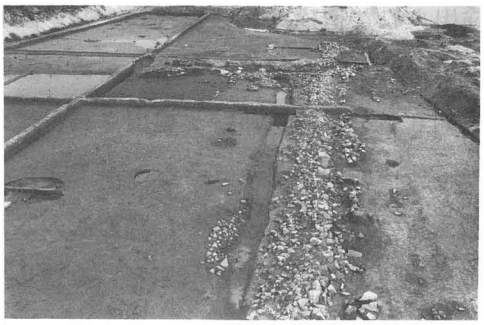
第６次調査（昭和55年度）

第６次調査で検出した遺構は、第１層で井戸跡１、石積溝２、第２層で焼土を埋めた土壙、人骨を伴う土壙、建物礎石、石積溝が検出された。第１層の溝は建物の雨落溝で、その一辺は第２層の溝と並行することが判明した。第１層は江戸時代初期、第２層は桃山時代まで遡るものである。

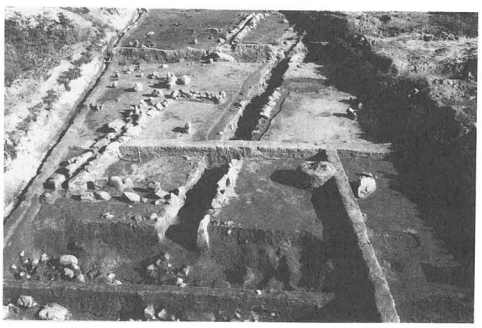
富田川河床遺跡の発掘調査中にも富田川（現在の飯梨川）の別の地点で新しい遺跡の発見があった。昭和55年６月に下流の太平寺（たいへいじ）橋付近（安来市古川町）の川底から江戸時代頃の風呂跡発見というニュースは話題を呼んだ。当該地は温泉地帯で、川底を深くボーリングすれば今日でも熱湯が湧き出る所である。

こうした一連の調査や遺跡の発見により富田川河床遺跡の範囲が拡大し、少なくとも前出の太平寺橋付近まで町並が存在するのではないかと考えられるようになってきた。また、発掘調査の結果では幅約６*m*の幹線道路を中心に町並が広がっていることが確認されている。江戸時代の中期以降に描かれた絵図をそのまま信用することはできないが、現代に伝えられた城下町絵図のなかには、現在の広瀬町から下流の中海に至る部分まで描かれているものがあり、太平寺橋付近と考えられるあたりよりさらに下流まで町並が描かれていることも考慮すべきであろう。富田城跡を中心とした中世～近世の考古学的研究はようやく緒についたばかりである。

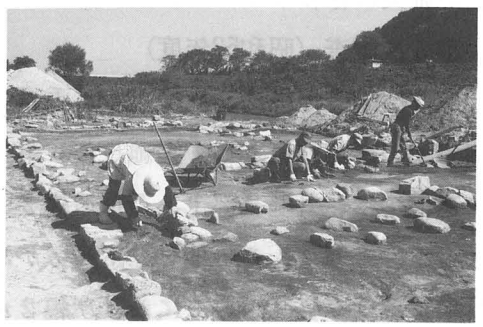
昭和49～51年度調査区



昭和53年度調査区



昭和55年度調査区



昭和56年度調査区

Ⅳ 第７次調査の概要

昭和56年度調査は、広瀬町教育委員会が49年から新宮橋下流部において実施した第１次調査から数えて７回目にあたる（Ⅲ.既往の調査参照)。調査主体は島根県教育委員会であり、現場調査は昭和56年６月から翌57年１月まで約７か月を要した。

調査対象地は、史跡富田城跡の西麓を北流する飯梨川の西堤防下で、第６次調査の南側に位置する。面積は約2000m^2で、堤防の一部に設けられた連結ブロック部分の幅11m、長さ180mが調査範囲となり、大地区表示（注１）はＦＵ・ＦＴ・ＧＳ・ＧＲ・ＨＲ・ＨＱ・ＩＱ・ＩＰの各区にまたがる。なお、ＩＰ・ＩＱ両地区については祖父谷（おじだに）川へ合流する地点であり、東西20×南北30mと調査区を拡大している。

調査方法としては、河床に堆積する厚さ２～３mの土砂をまず重機により排除し、その後、下層に存在する遺物包含層と遺構面は手掘りとした。また、本次も調査面積が広い等の理由で空撮写真による遺構の図化（注２）を行った。

検出された遺構は富田城関連の城下町跡である。時期は、従来から確認されているように、江戸時代初期の1666年の洪水で埋没した町並が最も新しく、その下層に戦国時代（最も古い面は第６次調査時に発見した16世紀中葉のもの）から江戸時代にかけての数面が認められた。本次の調査において、16世紀後半に属するものは下流部において存在したのみであり、多くは江戸時代に属している。遺構の種別と数量は、建物跡（ＳＢ)14、道路跡（ＳＳ）３、井戸跡（ＳＥ)7、石垣（ＳＸ)1、埋設桶（ＳＸ)6、土壙（ＳＫ)89、空地（ＳＨ）８であった。これに伴う遺物としては、瓦類や土器・陶磁器等の焼物、古銭や工具等の金属製品、臼や硯等の石製品、下駄をはじめとする木製品および貝類や木の実等の自然遺物が出土しており、その量はコンテナー200箱近くに達する。そして、その多くは木製品と焼物で占めている。

以下、第１遺構面から各面別に遺構、遺物の概要を記述する。

注1. 富田川河床遺跡をはじめ富田城関連遺跡群の大表示は、本遺跡の第１次調査～第３次調査報告書（『富田川河床遺跡発掘調査報告』、広瀬町教育委員会・富田川河床遺跡調査団、1977年３月）に記載のものを踏襲しており、一辺30mの方眼で、アルファベットで表わしている。

2. 各調査区の遺構実測図のうち、第１遺構面については空撮写真からの図面を使用している。なお、各遺構実測図は手書きである。

1. 第1遺構面の概要

第1遺構面は調査区全域にわたって良好に遺存していた。検出された主なものには、道路跡3、建物跡11、井戸跡4、溝5、埋設木桶3、石積遺構2などのほか多くの立ち木痕がある。この町並を概観すると、幅6mの道路に沿って東側に間口6.3間1棟、3間3棟の建物跡が認められた。また、北側にはは建物跡に伴う石列が幾条も検出され、間口3.3間1棟、6.15間2棟以上、6.3間2棟以上の建物跡が推定された。これら西側建物跡の背後には、井戸跡や埋設木桶が点在し、さらに立ち木等が茂る空地が存在した。町割については、道路は谷の方向に走り、北から東へ35°ほど振っている。しかし、第3次に行われた新宮橋下流における調査では、道路の方向は北から東へ約40°振っている。第3次調査で検出された道路とかなりの距離をへだてているが、ほぼ平行していることが判明した。道路に面しない建物跡や石列についても各調査区でかなりの違いが認められ、調査した南北600mの範囲内では、町割が一様でないことが知られる。

この遺跡面の時期は出土品等により17世紀中頃で、実年代としては江戸時代初めの寛永21年（1644）から洪水で潰滅じた寛文6年（1666）のものと推定される。

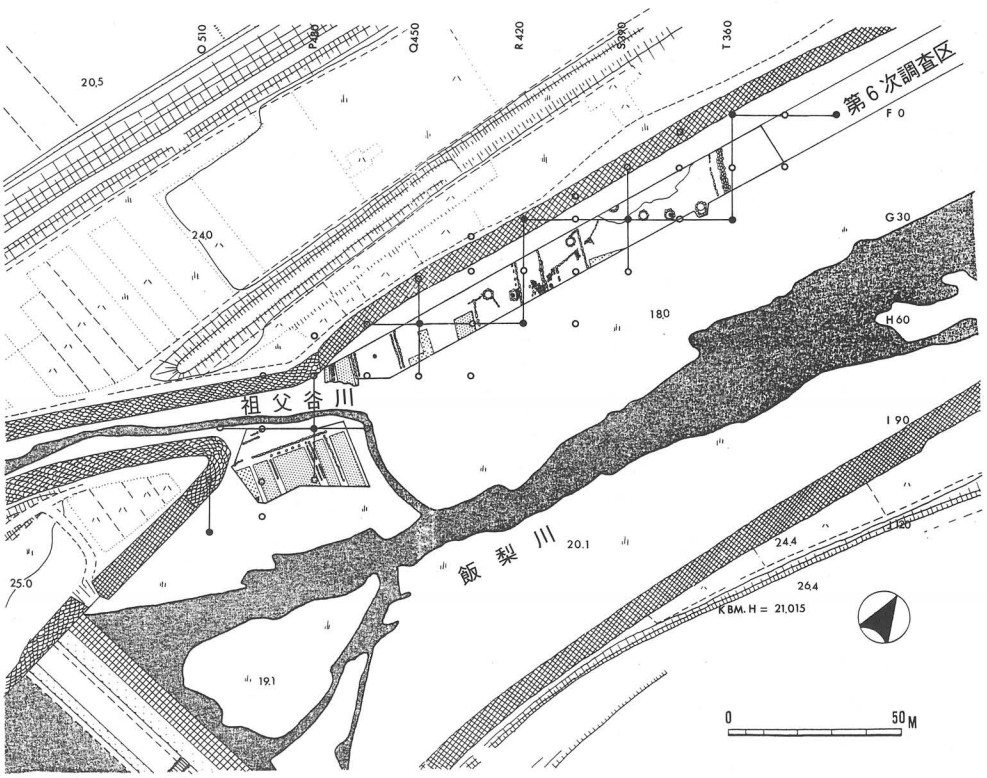


図4 調査区割と遺構概略図

IP・IQ区の概要

富田城跡の御子守口(おこもりくち)正面に位置し、飯梨川と祖父谷川および堤防とに挟まれた東西20m、南北35mの範囲が本調査区である。昭和30年代の祖父谷川改修工事のため、この地区の西側と北側の遺構は破壊されている。

この地区は、川床の砂が1mしか堆積していなかったにもかかわらず二次的攪乱を受けていなく、残存状態は極めて良い。遺構としては、南北に走る幅6mの道路とそれに面する形で東側に建物跡5棟を検出した。西側のそれは祖父谷川改修工事のため破壊されている。道路は長さ30m程確認できたが、南端に堤防があるためそれ以南の発掘はできなかった。

遺構の標高は、最も高い道路に面して並ぶ石列が標高19mである。また、建物跡の床面と道路の落差は20cmで、道路面が低い。

道路跡（SS004）

建物跡群を南北に貫く幹線道路である。幅は6mで、西側には幅90cmの素掘りの側溝をもつ。東側の端には、建物群に伴う石列が存在し、中央部が10cm程度高くなる。路面は固くしまり、トレンチによる断面を観察すると、厚さ10cm程度の層が幾重も存在した。同様のものとしては第3次調査で検出されたSS003があり、規模・方向も同一である。

建物跡（SB018）

調査区の最南端に位置する掘立柱建物跡である。それは建物跡の一部分であったため間口、奥行等の規模については確認していない。遺構としては雨落石、柱穴、土壙、埋設桶を検出した。

雨落石は人頭大の自然石で、一段に2m並ぶ。柱穴は径70～100cm大のものが7個、40cm大のものが2個検出された。後者の2穴には柱痕も残り、その柱間は2.2mを測る。土壙（SK171）は柱穴列に接しており、60×110cmの長方形プランで、深さは40～50cmある。内部から唐津、伊万里(いまり)、備前の破片が出土している。埋設桶（SX027）は建物跡の奥部に存在する。掘り方は径45cmで、径40cmの桶を据え付けたもので、底板4枚と側板の下部を僅かに残す。タガ等の上部は欠損しているが、内部より植物の種子が数粒出土している。このことから、これは貯蔵用のものではないかと考えられる。

出土した遺物は極めて少ない。土壙から漆器椀の破片や唐津、伊万里、備前が少量出土している程度である。

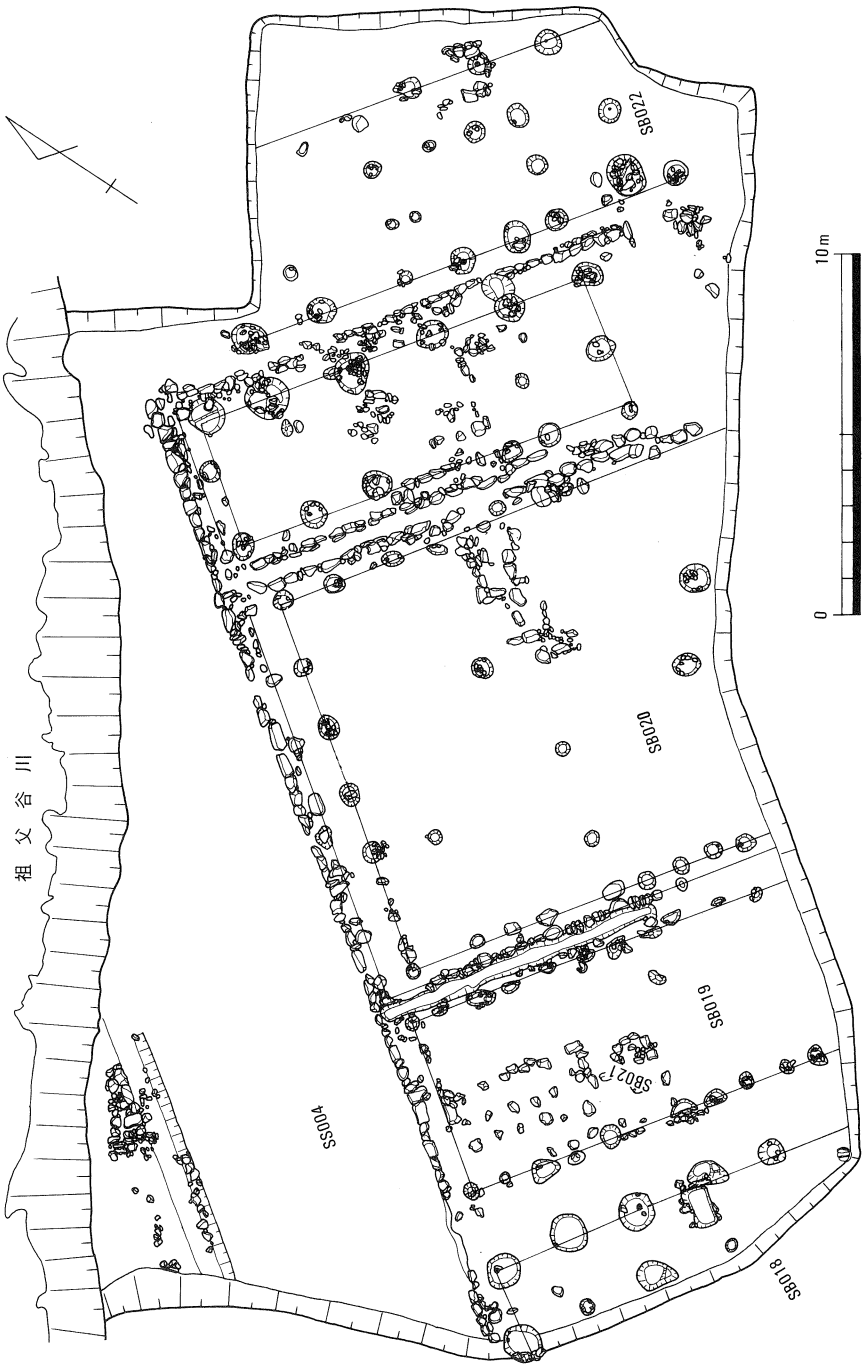


図5　第1遺構面IP・IQ区遺構実測図

建物跡（ＳＢ019）

ＳＢ018とＳＢ020に挟まれた妻入り構造の細長い掘立柱建物跡である。間口３間、梁間２間（総梁長5.0*m*）、桁行５間（総桁行10.5*m*）以上を測る。

前面には雨落石が一段に置かれ、戸口は１間幅で北西隅に付く。戸口を入ると固く敲きしめられた土間（通りにわ）となり、奥へつながる。土間の南側には、幅2.7*m*（1.5間）、奥行3.6*m*（２間）の居間がある。これは、人頭大の河石を20数個・４列に置き、根太を桁行方向に架けたものと考えられる。居間の奥には、河石が径1.5*m*の範囲で円形に並んでいる。性格は不明である。また、東北隅には河石30数個からなる縦1.2*m*・横0.6*m*・深さ0.3*m*の方形状の土壙（ＳＫ172）がある。この性格も不明であるが、東側に石列の溝が雨落溝につながっていたので、それに関係するものかもしれない。内部より唐津、伊万里片が出土している。また、同形態の土壙（ＳＫ173）が、本建物跡の南東隅の戸外にあり、

図６　建物跡（ＳＢ018・019）実測図

本土壙と平行して存在する。縦2.5m・横0.8m・深さ0.2mの規模である。柱穴は桁側に10個と11個あり、径50cm大の大きな柱穴が1間おきに並び、その中間にはそれより小さい柱穴が存在する。大きな柱穴の柱間寸法は2.0mである。また、柱穴列に沿って20～30cm大の石列が部分的に認められる。

（遺物）陶磁器、金属製品、竹製品、木製品、石製品が多量に出土している。

備前・土師質を除くと、皿、碗類に占める中国製品の割合は8パーセントであるが、その他大部分は肥前陶磁器である唐津と伊万里が76パーセントを占めている。その内容は唐津碗が8片2.7パーセント、伊万里碗83片27.9パーセント、唐津皿76片25.6パーセント、伊万里皿31片10.4パーセントである。この関係は碗と皿についていえば、伊万里と唐津が補完作用を保持しているようであって注意される。図7－(1)は唐津皿で砂の目跡を有している。(3)は伊万里碗で呉須の色合は黒ずんでいて良好ではなく、素地もやや灰色を帯びている。(4)は伊万里の花文様を施す皿である。釉はずぶ被けで、高台の畳付の面は研磨が行なわれている。

金属製品には、柄鏡1、水滴1、耳かき1、鉄鏃1、角釘1、銭4（熙寧元宝1、元豊通宝1）、煙管7（雁首3、吸い口4）、鉄滓等がある。柄鏡(6)は、鏡面の径10.8cm・厚さ0.2～0.4cm、柄の長さ9.6cm・幅1.9cm・厚さ0.4cmの銅製品である。紐及び紐座が既に消失したタイプのもので、鏡背には建物、松等を配した山水文様が鋳出され、〝天下一〟の文字がみえる。水滴(12)は、底面4.8cm×3.2cm、高さ1.4～2.3cmの銅製品で、上面中央には長方形の受け口が、上面の一角には小さな注ぎ口がある。煙管(13)は雁首の大きく拡がるもので、吸い口部も同様に一枚の銅板を曲げて作っている。

竹製品として小形の柄杓(7)がある。合は径35cm、深さ33cmで、小竹の節部を利用している。外面は縦方向に表皮を削ぎおろし、底部と側面との境は入念な面取りが施されている。柄は先端部のみ残存し、装着角度は25°となる。

木製品では、石臼の柄1、鍬台木1、漆椀3片及び木片がある。石臼の柄(8)は、石臼の着挿孔にはまり込んだ形で検出されたもので、多角錐体を示す。残存長5.6cmを測り、径は最も太い箇所で残存径3.2cmであるが、本来は4cm前後あったものと推定される。鍬台木(9)は、樫製とみられる逆台形を示し、長さ19.5cm、幅12.5～8.5cm、厚さは頭の部分で4cmを測り、先端部はやや薄く削り出されている。この部分に鉄製の鍬先が着装されたものと考えられる。台木の中央には4.5×4cmを測る不整形な柄の挿入孔が貫通しており、着装角度は70°となる。全体に磨滅が著しく、加工痕等は不明である。

その他のものとしては、二枚貝の破片と瓦類が出土している。

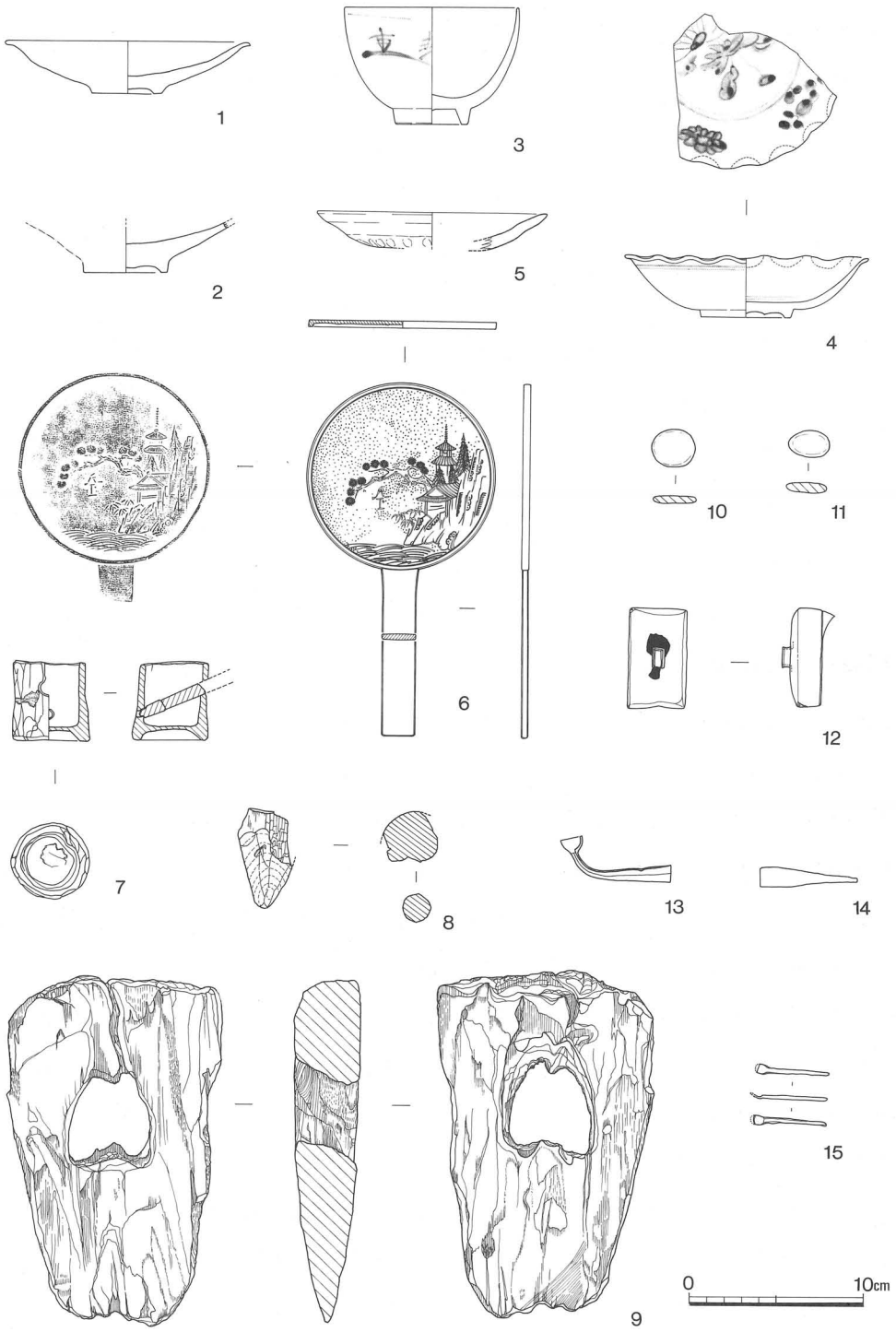


図７　建物跡（ＳＢ019）出土遺物実測図

表1　建物跡（SB019）出土陶磁器等数量表

名　称（器種）	破片数	名　称（器種）	破片数	名　称（器種）	破片数
青　磁　（碗）	2	南蛮系　（壷）		備　前　（壷）	6
（皿）		（鉢）		（甕）	6
（鉢）		（その他）		（鉢）	
（盤）			計	（擂鉢）	2
（香炉）		灰　釉　（皿）		（その他）	4
（その他）		（鉢）			計　18
	計　2	（香炉）		唐　津　（碗）	8
白　磁　（碗）		（その他）		（皿）	76
（皿）	5		計	（鉢）	5
（坏）	1	鉄　釉　（碗）	1	（香炉）	
（その他）	1	（壷）		（その他）	19
	計　7	（皿）			計　108
染　付　（碗）	6	（その他）		伊万里　（碗）	83
（皿）	5		計　1	（皿）	31
（鉢）	3	土師質　（皿）	11	（鉢）	1
（坏）		（土釜）		（その他）	6
（その他）	1	（その他）			計　121
	計　15		計　11	その他の陶磁器	14
				総　計	297

建物跡（SB020）

SB019とSB021とに挟まれた大規模な掘立柱建物跡である。間口は6.3間で、梁間5間（総梁行11.9*m*）、総桁行12*m*以上を測る。

建物跡の前面には雨落石が一段に置かれ、両脇には幅30*cm*、深さ10*cm*で、東西の落差が20*cm*の雨落溝が付く。雨落石に沿って、人頭大の平たい河石が1.8*m*おきに7個並び、庇が存在したと考えられる。戸口は幅3*m*で、南西隅に設けられている。内部には北西の隅に7×4.5*m*（幅4間、奥行3間）の固く敲きしめられた土間（にわ）が付く。また、この奥には、2×1*m*の規模で大小の自然石からなる長方形の石組がある。性格は不明である。柱穴は径30～50*cm*大で、建物跡の三方に16個、内部に6個存在する。柱間の寸法は1.8*m*。なお、南側の柱列に沿って、大小20数個の河石よりなる狭間があり、そのなかに1.0*m*の間隔で大小の礎石が置かれている点が注目される。

（遺物）陶磁器、金属製品、木製品、石製品などが多く出土している。

陶磁器では唐津の他は伊万里と中国製の白磁青花（染付）が多く出土した。ここでは、伊万里の碗がSB019に比較して少ないのに対し、白磁青花のそれが多いことが注意される。しかし、中国製の青磁・白磁及び瀬戸・美濃の皿・碗、備前の壺・甕等の在り方はSB019に類似している。図9－(7)は伊万里碗で素地は均一で平滑でなく、呉須もやや黒ず

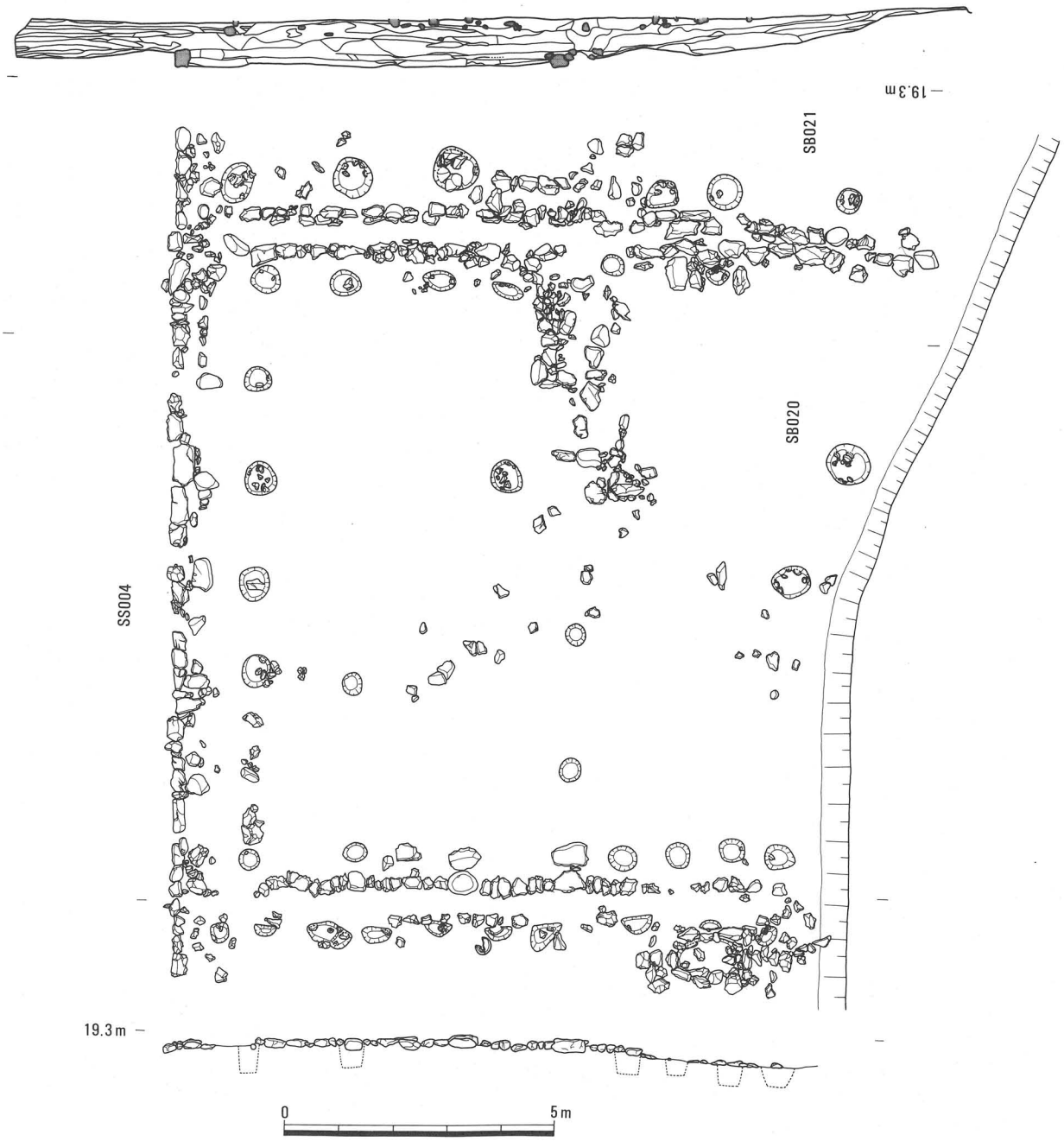


図8　建物跡（SB020）実測図

んでおり、鳥の図様が描いてある。

金属製品には小柄身１、刀子１、刀破片１、煙管（吸い口１、雁首1)、覆輪１、掛け金１、U字状鉄製品１、匙状製品１、パイプ状製品１、古銭３（景祐元宝１)、鉄滓等が出土している。小柄(13)は銅製で、火を受けたらしく変形している。七宝で飾られ優美なものであったと考えられるが、枠のみ残存している。U字状鉄製品(16)は両端が折り返しのあるもので、用途は不明である。

木製品としては、櫛１、漆塗椀４、下駄の歯１等がある。櫛(18)は長さ8.0cm、丈1.0cm、厚さ0.8cm、歯の長は最長で3.5cmを測り、歯の数は一部欠損のため復原推定すると35本になる。漆塗椀の蓋(20)は口径10.3cmと器高3.0cmである。外面黒色漆、内面赤色漆塗仕上げをする。体部はゆるやかに内湾するもので、高台は径5.0cm、高さ0.4cm、内刳りの深さは0.4cmを測る。体部外面には二方に、大和絵風の流水に桜花が描かれ、葉と流水が古代緑色漆、桜花が赤色漆で描かれている。他のもの(22)も同形で、体部外面には三方に丸に稲穂状の紋が古代緑色漆で表現されている。

石製品には硯片１、砥石１、石臼１がある。石臼(24)は径30cmで、高さ７cmを測る。上臼である臼面には６本以上の単位の溝が残っている。石材は軽石である。

その他の遺物としては、瓦類少量と炭片およびサザエのふたと巻貝の破片が各１ある。

表２　建物跡（ＳＢ020）出土陶磁器等数量表

名称（器種）	破片数	名称（器種）	破片数	名称（器種）	破片数
青磁（碗）	1	南蛮系（壷）		備前（壷）	7
（皿）	1	（鉢）		（甕）	9
（鉢）		（その他）		（鉢）	
（盤）		計		（擂鉢）	2
（香炉）		灰釉（皿）	1	（その他）	
（その他）		（鉢）		計	18
計	2	（香炉）		唐津（碗）	8
白磁（碗）		（その他）		（皿）	37
（皿）	6	計	1	（鉢）	8
（坏）		鉄釉（碗）		（香炉）	
（その他）	1	（壷）		（その他）	9
計	7	（皿）		計	62
染付（碗）	27	（その他）		伊万里（碗）	22
（皿）	13	計		（皿）	20
（鉢）		土師質（皿）	35	（鉢）	
（坏）		（土釜）	1	（その他）	
（その他）	1	（その他）	1	計	42
計	41	計	37	その他の陶磁器	4
				総計	214

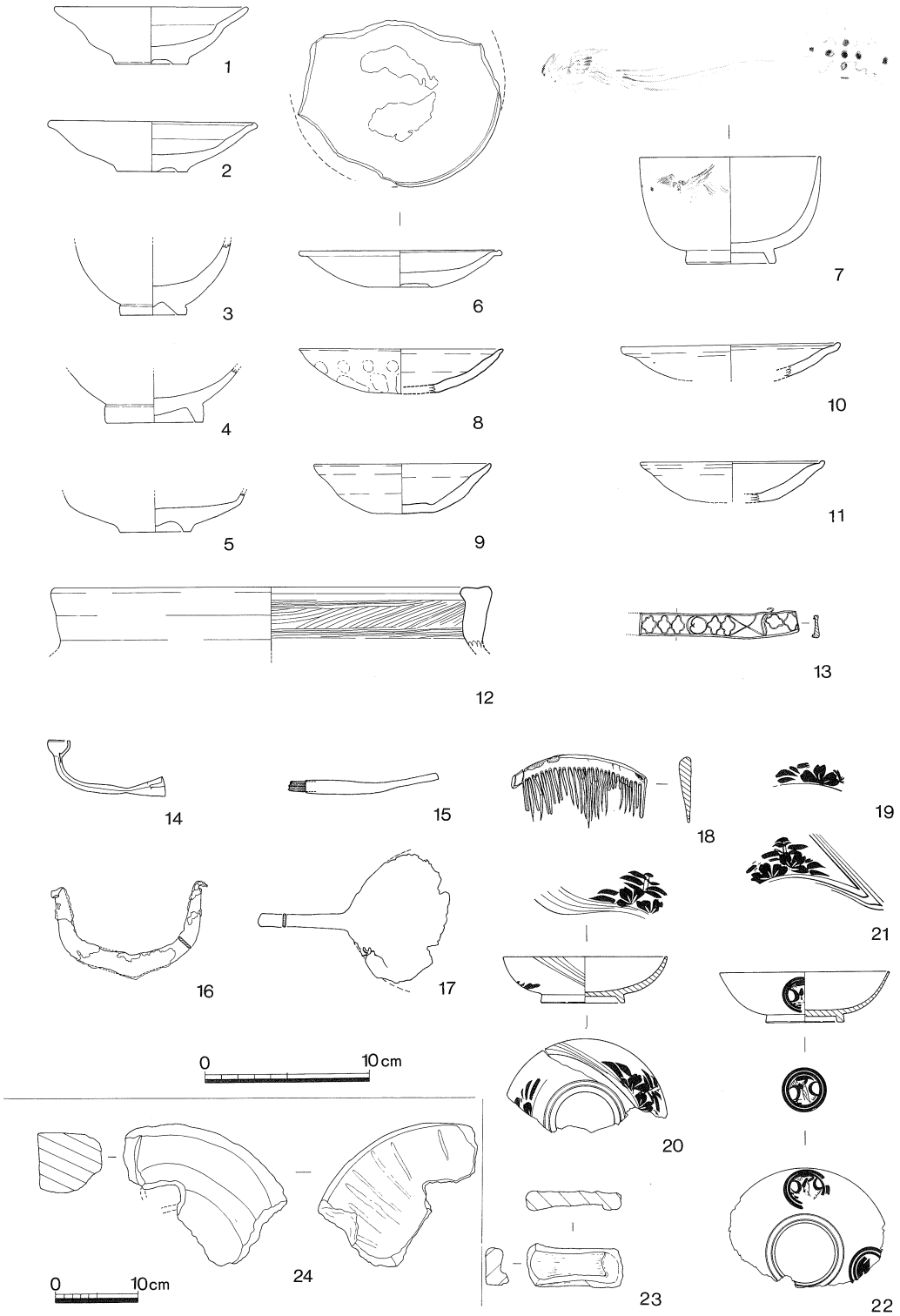


図9　建物跡（SB020）出土遺物実測図

建物跡（ＳＢ021）

ＳＢ020の北に隣接する妻入構造の細長い掘立柱建物跡である。間口は３間、奥行7.5間で、梁間は２間（総梁間4.4*m*）、桁行５間（総桁行11*m*）を測る。

前面には雨落石が一段に置かれ、南北には石列が存在する。戸口は１間幅で、南西隅に付き、２個礎石が置かれており、上方には庇が推定される。柱穴は40～100*cm*で、15個存在する。柱間2.2*m*、内部には集石１と列石１が認められる。性格は不明である。

（遺物）陶磁器・金属製品・石製品・木製品などがある。

ここでは美濃の皿・碗が8.8パーセントを占めており、第１遺構面中ではその割合が高いことが注意される。灰釉はすべて皿であり、鉄釉は碗が多い。この関係は出土例の多少にかかわらず共通である。勿論、白磁・白磁青花・備前・瀬戸・美濃・唐津・伊万里、土師質土器の割合は変化するが、その組合せに異同がない点は第１遺構面の建物群の時期幅の短いことの証しであろう。図11－(1)は伊万里の坏、(2)は白磁青花の碗で高台の高いものであるが、呉須で描かれた文様が鮮明でないのは素地に起因している。（３～６）は唐津皿。(7)は伊万里の皿。楚々とした柳文を配した絵画的な図で、口縁に鉄釉が施されている。（８～10）は唐津皿、（12～15）は瀬戸・美濃の碗・皿、(16)は唐津皿、(17～19)は唐津の碗である。

金属製品には古銭３（寛永通宝２）、釘２、煙管１（吸い口）、鉄滓が出土している。石

表３　建物跡（ＳＢ021）出土陶磁器数量表

名称（器種）	破片数	名称（器種）	破片数	名称（器種）	破片数
青磁（碗）		南蛮系（壷）		備前（壷）	15
（皿）		（鉢）		（甕）	9
（鉢）		（その他）		（鉢）	
（盤）		計		（擂鉢）	1
（香炉）		灰釉（皿）	18	（その他）	
（その他）		（鉢）		計	25
計		（香炉）		唐津（碗）	9
白磁（碗）		（その他）		（皿）	45
（皿）	8	計	18	（鉢）	6
（坏）	1	鉄釉（碗）	4	（香炉）	
（その他）	3	（壷）		（その他）	4
計	12	（皿）		計	64
染付（碗）	13	（その他）	2	伊万里（碗）	45
（皿）	7	計	6	（皿）	29
（鉢）		土師質（皿）	17	（鉢）	2
（坏）	1	（土釜）	1	（その他）	19
（その他）	2	（その他）	1	計	95
計	23	計	19	その他の陶磁器	9
				総計	271

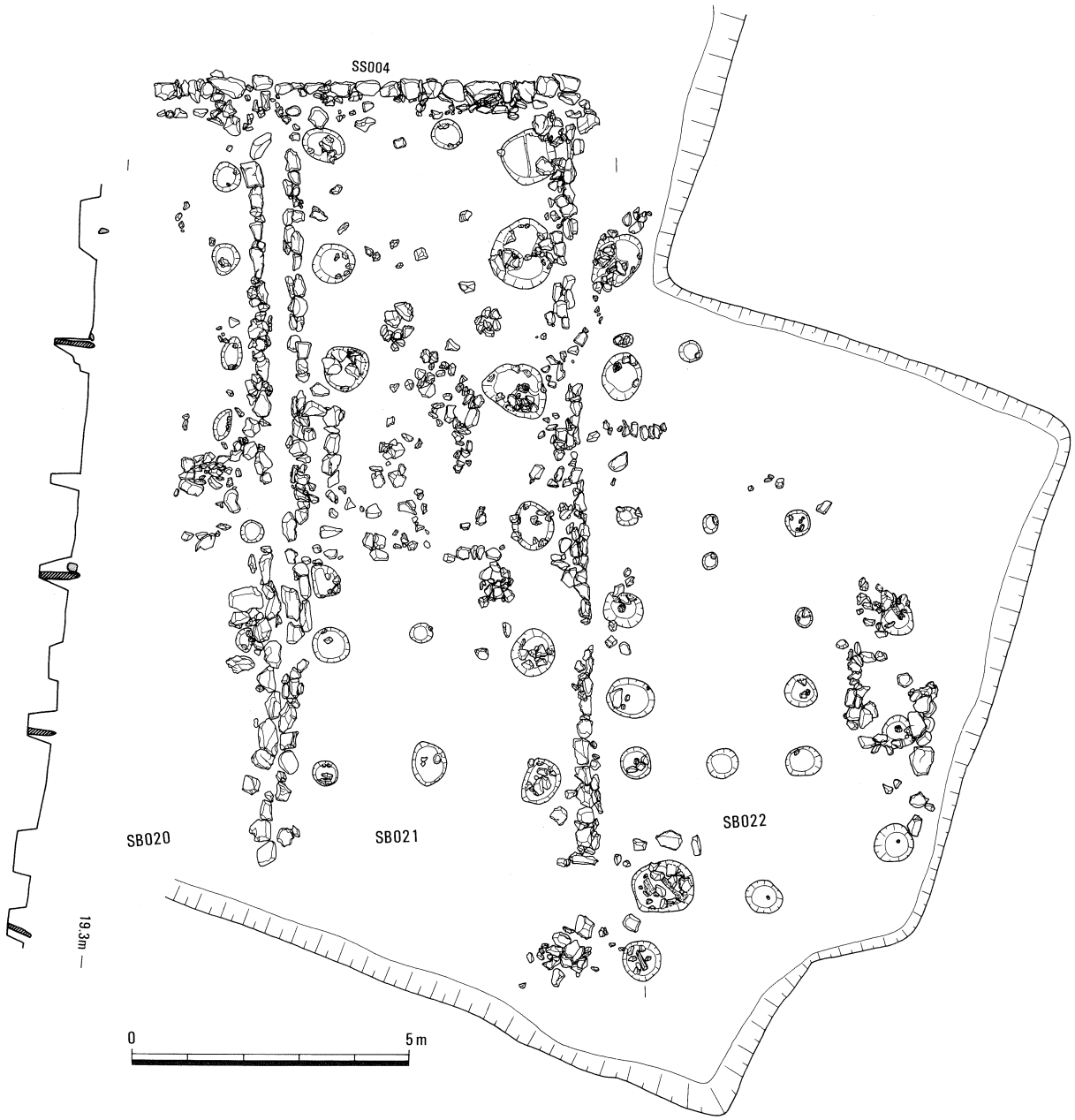


図10　建物跡（ＳＢ021・022）実測図

製品には砂岩で方形をなす容器(26、27)である。周囲には幅２*cm*、高さ2.5*cm*の縁が付き、裏面の四隅には一辺2.5*cm*の低い脚が付く。２片とも小片で、全体の大きさは不明である。

木製品には、漆塗椀１と下駄の歯１がある。椀(25)には丸と枝が赤漆で、葉は生黄で、葉脈は方射状に３条のひっかきで表わす銀杏の葉を描いている。

その他の遺物としては、アワビの破片１と瓦類が若干ある。

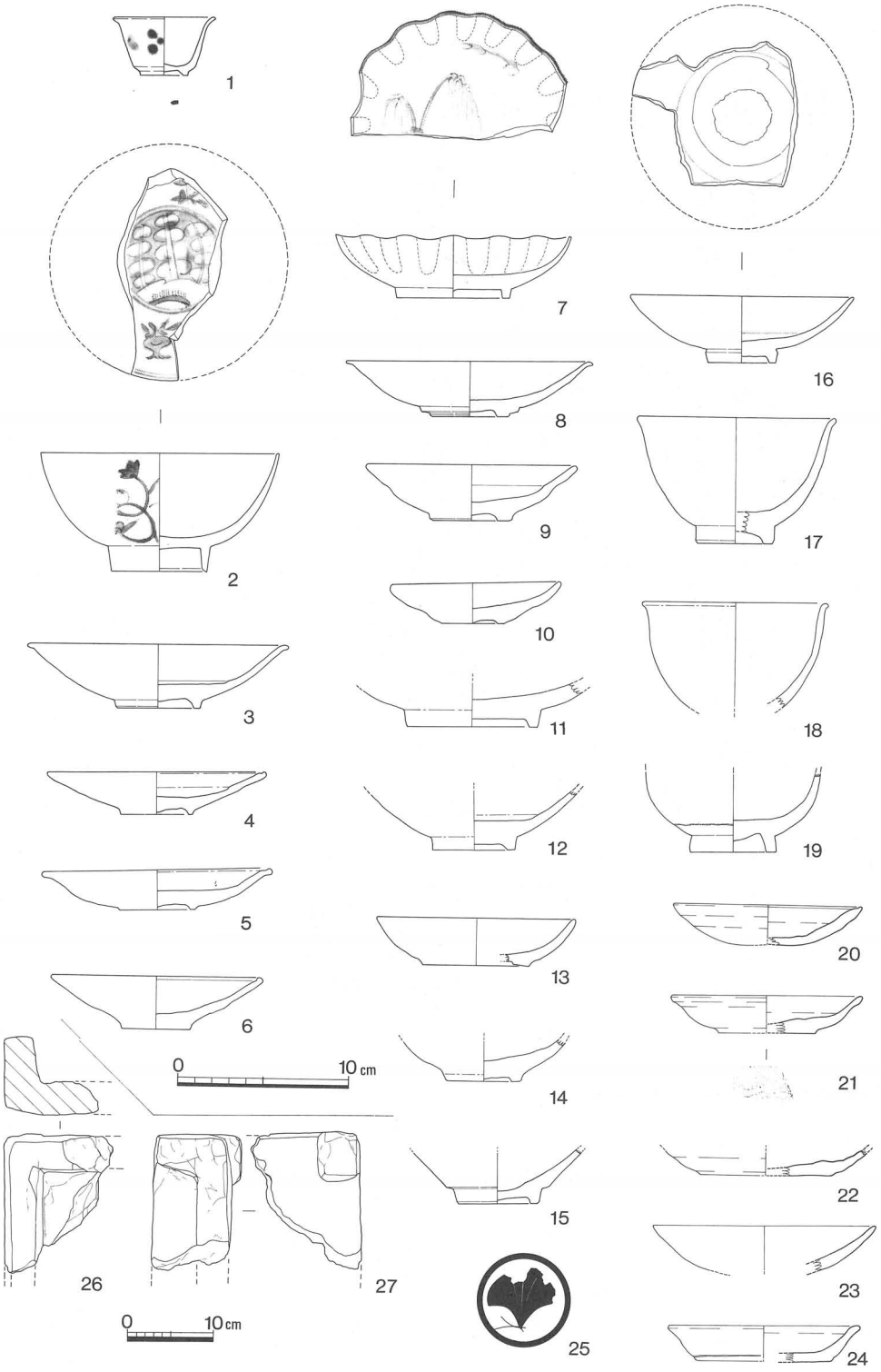


図11　建物跡（SB021）出土遺物実測図

建物跡（ＳＢ022）

ＳＢ021の北側に隣接する妻入構造の細長い掘立柱建物跡である。この部分は洪水時に流路となったとみられ、北部を中心にかなり破壊され、規模については不明である。総梁行5.0*m*、桁行８間を測る。

西側には前述の建物跡とは異なり、雨落石は伴なわない。柱穴の径は30～100*cm*で、20個存在する。柱痕の残る大形の柱穴より、柱間の寸法は2.2*m*である。

（遺物）出土品としては、陶磁器・金属器・石製品・木製品等がある。

陶磁器の組合せ、割合では他の建物跡出土のものと大きな差異はない。図12—(11・12)は伊万里の皿と碗で、(11)の素地はやや黒ずんで堅い感をいだかせる。(12)は６つに区画された内面胴部に花文、また見込みにも一つの花文を配したもので、高台畳付が磨いてある釉ずぶ被けの皿である。（３・４）は口縁部が屈曲しない式のもので、このような形式のものも唐津の中に含まれている。

金属製品には煙管（吸い口１、雁首１）、小柄１、掛け金１、古銭（寛永通宝）１、鉄滓、不明品が出土している。小柄(17)は残存長8.9*cm*、幅1.5*cm*、厚さ0.5*cm*のもので、波打ち際に兎の遊ぶ図が配され、籠彫文字が刻まれている。文字は判然としないが、「明浪□浮月」と読める。文字と波打ち際の文様には金象嵌が施され、兎は貼付されたものである。

表４　建物跡（ＳＢ022）出土陶磁器等数量表

名称（器種）	破片数	名称（器種）	破片数	名称（器種）	破片数
青磁（碗）		南蛮系（壷）		備前（壷）	
（皿）		（鉢）		（甕）	6
（鉢）		（その他）		（鉢）	
（盤）		計		（擂鉢）	1
（香炉）		灰釉（皿）		（その他）	1
（その他）		（鉢）		計	8
計		（香炉）		唐津（碗）	16
白磁（碗）		（その他）		（皿）	13
（皿）	3	計		（鉢）	3
（坏）		鉄釉（碗）	1	（香炉）	
（その他）		（壷）		（その他）	
計	3	（皿）		計	32
染付（碗）	1	（その他）		伊万里（碗）	5
（皿）		計	1	（皿）	24
（鉢）		土師質（皿）	8	（鉢）	
（坏）		（土釜）	2	（その他）	1
（その他）		（その他）		計	30
計	1	計	10	その他の陶磁器	7
				総計	92

文様と文字は横位置に配されているのが特徴的である。以上の様に、この小柄は極めて優品といえる。掛け金(18)は、針金状のものの両端を折り曲げたものである。

石製品には砥石１と碁石状の石４がある。砥石(19)は荒砥で、幅5.2cm、厚さ1.4cmの大きさである。断面は四角形を呈し、３面には使用痕が残る。

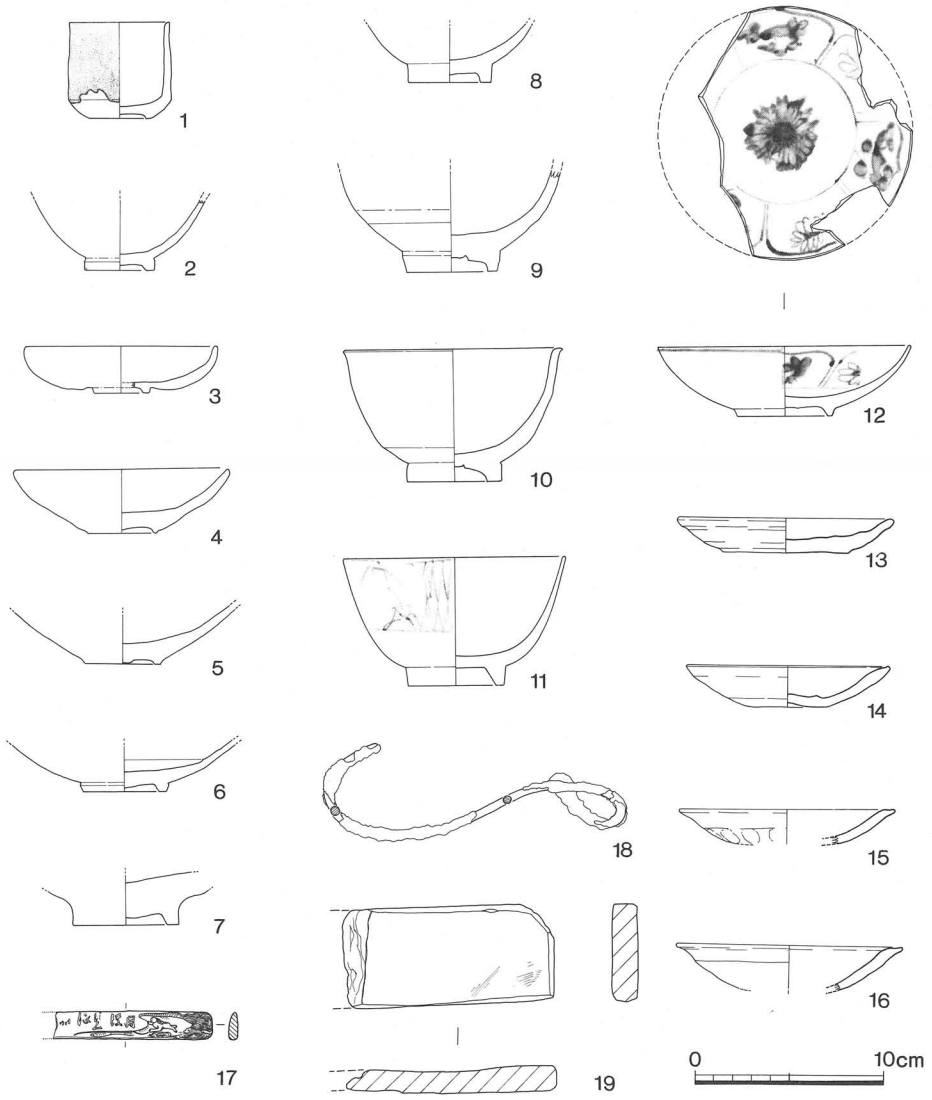


図12　建物跡（ＳＢ022）出土遺物実測図

HQ・HR・GR区の概要

HQ・HR・GRの各区は、飯梨川の堤防下に設けた調査区の南端に当たる。流砂が2～3mの厚さで堆積していたため、遺構の保存状態は良く、幅11m、長さ60mの調査範囲内に建物跡5、埋設桶2、井戸跡1および立木を伴う空地等多くのものを検出した。

これらの遺構は建物の奥部とその裏側にある空地で構成され、調査区の東側には前述の幹線道路（SS004）が南北に走っていると推定される。建物跡と石組溝の方向は北から西へ55°であり、これはIP区の建物跡のそれと一致し、道路を挟んで向い合っている。遺構面の標高は18.5m前後で、ほぼ平坦である。

建物跡（SB023）

堤防下に設けた調査区の最南端に位置する掘立柱建物跡である。規模は不明であるが、遺構としては祖父谷川と堤防に挟まれた狭い範囲内に柱穴4個と雨落溝1列を検出した。柱穴は大小2種類あり、大形は径60～80cmで3個、小形は径40cmで1個存在する。柱間寸法は柱痕より2.1mを測る。遺物としては土師質土器皿が数個出土している。

建物跡（SB024）

SB023の北側に隣接する間口3.3間の細長い掘立柱建物跡である。祖父谷川と堤防に挟まれ、建物跡の一部を検出したに過ぎず、全体の規模は不明である。

遺構としては、柱穴10個と野石と河石からなる雨落溝2列（SD031、032）を検出した。柱穴は径約1mのものが大部分であり、柱間寸法は2.0mを測る。雨落溝は人頭大の河石が一段に並べられ、幅30cm、深さ10cmである。溝は西へ僅かに傾斜しており、雨水はIP区とは逆に西側へ流れていたと思われる。

（遺物）陶磁器、金属製品、木製品、石製品、自然遺物が出土している。

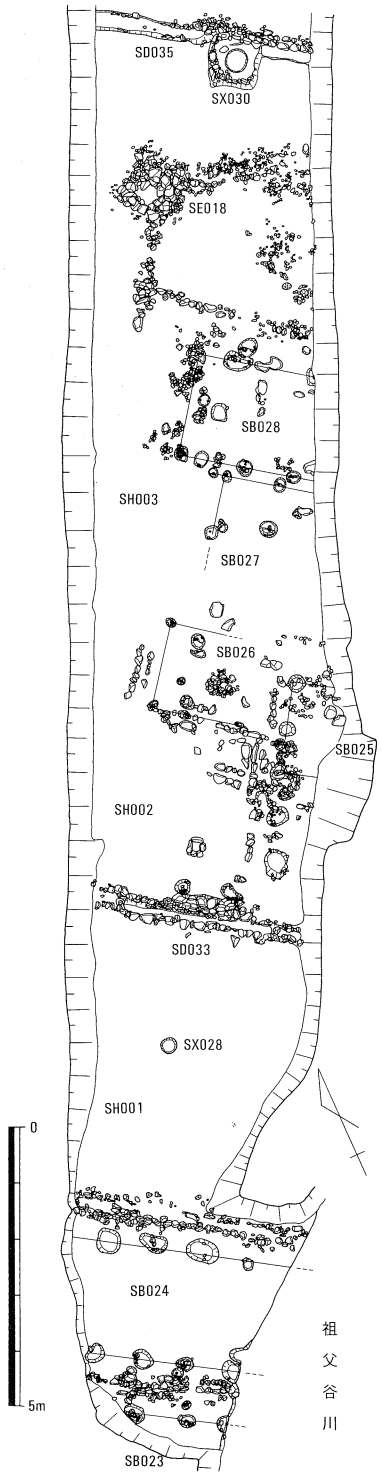
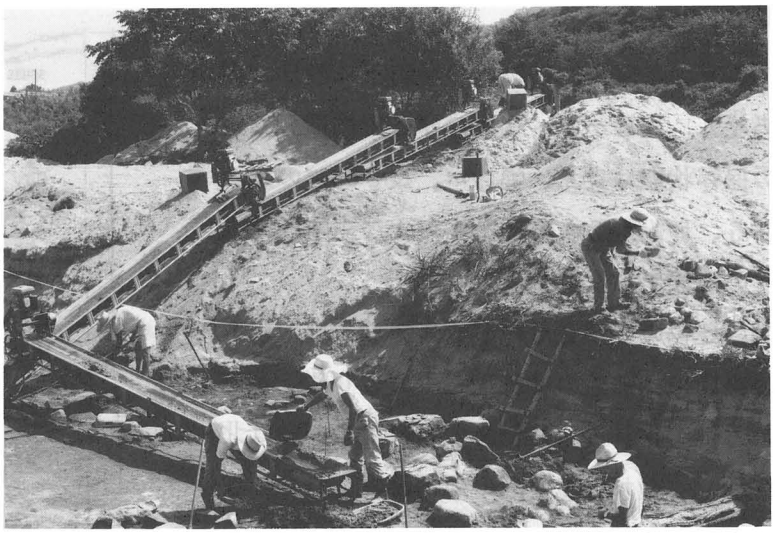


図13　第1遺構面
HQ・HR・GR区遺構実測図



発　掘　風　景（HQ区）

図14　建物跡（SB023・024）実測図

この区画の出土陶磁器の組合せの中では、唐津の占める割合が小さく、土師質土器の占める比率が大きいのが特徴である。また、中国陶磁器と伊万里の割合はほぼ同様であるが、全体に占める割合はやや大きい。なお、それぞれの関係を推測すると唐津の皿の比率が小さいのを土師質の皿が補なっているようにみえる。伊万里はここでは碗の破片が多く、中国製の白磁ではやはり皿が主体である。中国製のものでは白磁がこの区画ではやや多いが、白磁青花を凌いではいない。瀬戸、美濃では灰釉皿と鉄釉碗の組合せが確認される。

図15の（1～4）は唐津で、（4）の坏を除いては碗である。

金属製品には錘1、小柄2、小刀1、鋤先1、鋤付属品（ヘラ）3、刀子1、古銭（寛永通宝2）が出土している。錘（5）は厘秤に用いられたものと考えられる。1.2cm×1.2cm×2.25cmの角形の錘で、上部には紐をつけたつまみがある。全体の体積は3.29cm³、重量は28.81g、密度は8.75g/cm³となる。このことから、この錘は黄銅と10%程度の亜鉛との合金であろうと推定される。錘の相対する二面には、それぞれ「慶長」、「卯年」の年号（1603年）が籠彫りで刻まれ、他の一面には「雲搓」と読める刻印が打たれている。錘の表面は重量調整のため、ヤスリがけしてある。小柄（6）は銅製で、全長9.6cm、幅1.5cmの表面片側に草花風の文様を施こす。小刀（8）は、全長29cm、刃長22cm、棟の厚さ3mmである。反りはほとんどなく、目釘穴や鎬などもみられない。鋤先（11）は一部破損して

表5　建物跡（SB024）出土陶磁器等数量表

名称（器種）	破片数	名称（器種）	破片数	名称（器種）	破片数
青磁（碗）	2	南蛮系（壷）		備前（壷）	3
（皿）		（鉢）	1	（瓶）	7
（鉢）		（その他）	1	（鉢）	3
（盤）		計	2	（擂鉢）	1
（香炉）		灰釉（皿）	2	（その他）	2
（その他）		（鉢）		計	16
計	2	（香炉）		唐津（碗）	28
白磁（碗）	3	（その他）		（皿）	27
（皿）	13	計	2	（鉢）	1
（坏）		鉄釉（碗）	8	（香炉）	
（その他）		（壷）		（その他）	6
計	16	（皿）		計	62
染付（碗）	9	（その他）		伊万里（碗）	25
（皿）	10	計	8	（皿）	7
（鉢）	1	土師質（皿）	40	（鉢）	
（坏）		（土釜）	3	（その他）	4
（その他）	1	（その他）		計	36
計	21	計	43	その他の陶磁器	4
				総計	212

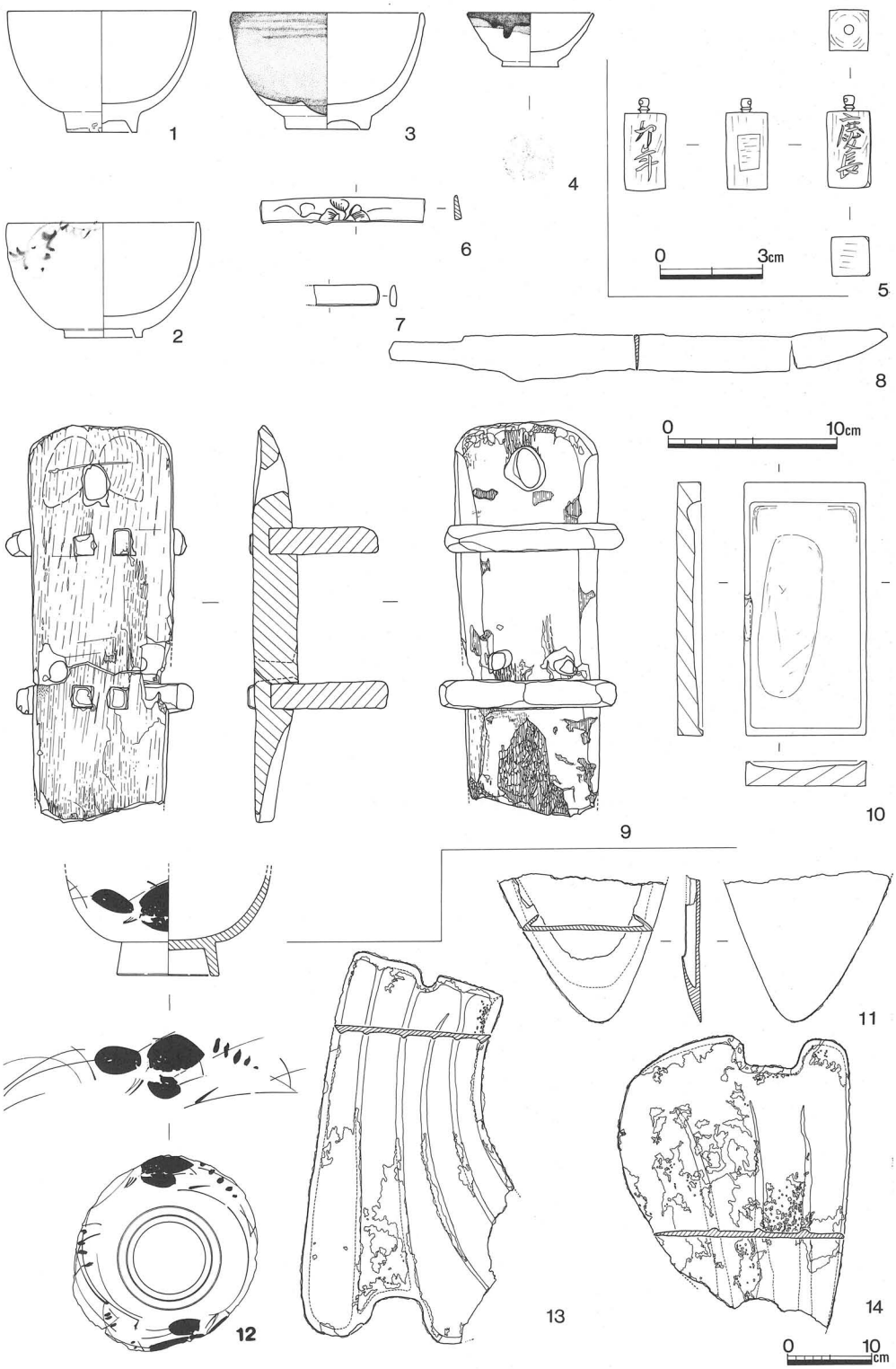


図15　建物跡（ＳＢ024）出土遺物実測図

おり、残存部の最大幅79.5cm、長さ16.7cmを測る鋳製品である。これは牛に引かせる鋤に用いたものと考えられ、土を起しやすくするため、若干の反りがみられる。鋤の付属品であるヘラ（13・14）は板状の鋳造品である。排土のためか数条の凸帯が鋳出されている。

木製品には下駄2と椀2および少量の木片がある。下駄（9）は長さ24cm（8寸）、幅9cm（3寸）物で、成人男子が普段履いたものである。歯は差し歯で、柄は2本つく。

石製品には硯2がある。（10）は頁岩製で、縦15cm、幅7.2cmの長方形を呈す。完形品であるが、陸部の中央は長期に使用されたため楕円形の凹地ができている。

空地（SH001）

SB024の北側に隣接して空地がある。この空地は両側から石組の溝に挟まれており、その距離は13.0mを測り、屋敷割の6.15間と一致する。

遺構としては、空地の中央部に埋設桶（SX028）が存在する。これは直径60cm、深さ40cmで、底から33cmと40cmのところにタガを有す。側板は26枚以上、底板は4枚（3枚板目、1枚柾目）からなるが、底板の一部は新しい材で補修されている。また、この桶の近くには、小さな落葉樹1株と径3～5cmの杭3本が認められた。なお、この桶と北側の石組溝の間は、洪水時に流路となったため遺構面がえぐられ凹地となっている。

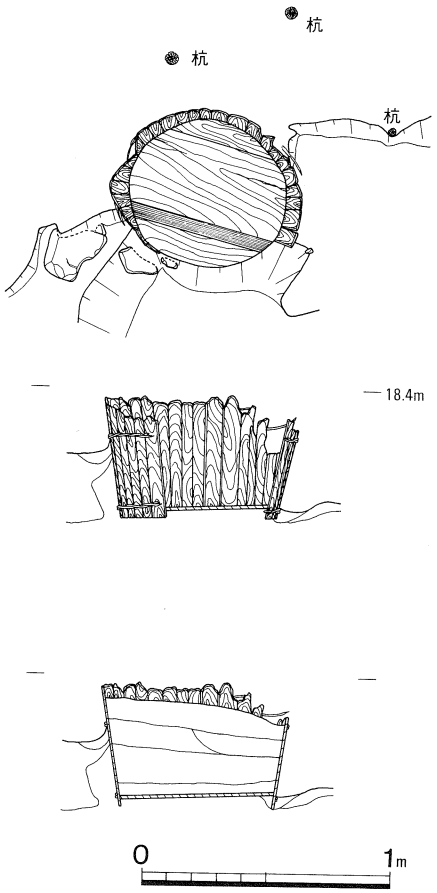


図16　埋設桶（SX028）実測図

（遺物）陶磁器、石製品、金属製品、竹製品、木製品、自然遺物が出土している。陶磁器は総破片数596点で、唐津の占める割合はここでも大きく、中国製の白磁、白磁青花と伊万里の比率は同様である。この区画では土師質土器皿の出土例などに比して、備前の占める割合が少なくなっている。その他の陶磁器の中には、信楽壺、朝鮮製・志野皿が1点含まれる。

図17の（1）は瀬戸、美濃の灰釉皿、（2、3）は伊万里坏、（4）は白磁青花の碗、（5）は伊万里の皿、（6、7）は唐津碗、（8）は鉄釉碗、（9～16）は唐津で、（9）は糸切底の皿、（13～

表6　空地（SH001）出土陶磁器等数量表

名称（器種）	破片数
青磁（碗）	
（皿）	1
（鉢）	
（盤）	
（香炉）	1
（その他）	
計	2
白磁（碗）	
（皿）	13
（坏）	
（その他）	
計	13
染付（碗）	19
（皿）	21
（鉢）	
（坏）	1
（その他）	
計	41
南蛮系（壷）	1
（鉢）	
（その他）	
計	1
灰釉（皿）	7
（鉢）	
（香炉）	
（その他）	
計	7
鉄釉（碗）	2
（壷）	
（皿）	
（その他）	
計	2
土師質（皿）	128
（土釜）	
（その他）	2
計	130
備前（壷）	19
（瓶）	5
（鉢）	
（擂鉢）	3
（その他）	10
計	37
唐津（碗）	45
（皿）	167
（鉢）	12
（香炉）	
（その他）	35
計	259
伊万里（碗）	23
（皿）	28
（鉢）	
（その他）	
計	51
その他の陶磁器	53
総計	596

14）は絵唐津の壷、（15～16）は唐津碗、（17）は唐津皿である。

瓦類は少量出土している。軒丸瓦（18）は径13.8cmで、外面内区に三巴文をもつ。

石製品としては、石塔、茶臼、碁石状のものが各1ある。五輪塔の火輪（19）は笠状を呈し、底辺は15.5cm、高さ9cmを測る。稜線は直線で、下面部はやや丸味がある。石材は凝灰岩質で、ノミ痕がよく残る。この石材は雨落石に転用されていた。茶臼（20）は下臼で、受鉢部を欠いている。臼面の径は11cm、高さ3cmで、上面には10～12本単位の細かな溝と一辺1cmの方形の心孔が存在する。石材は安山岩である。

金属製品には鏡1、鈴1、火ばし1、鉈1、煙管2、鏃1、古銭3（元豊通宝1、寛永通宝1）がある。鏡（図18－1）は砂層との境から出土したもので、径10.8cm、厚さ0.4～1.4cmの直角式厚縁を有する和鏡である。鏡背には松・鶴等を配している。鉈（2）は全長47.2cm（刃部24cm）、刃部幅2.9cm、刃部最大の厚さ0.7cmを測る。茎尻は一部欠損しているため、目釘穴の存在は不明である。茎と刃の背部はほぼ直線となっている。火ばし（5）は銅製で、全長20.5cm、最大径3.5mmを測る。頭部には4mmの幅で、径3mmと細くしてある。

竹製品には小型の柄杓（6）が出土している。高さ5.2cm、径4.3cmの合で、形態はSB019出土のものと同じである。ところで柄を挿入した大きい方の孔を手前に向けて観察

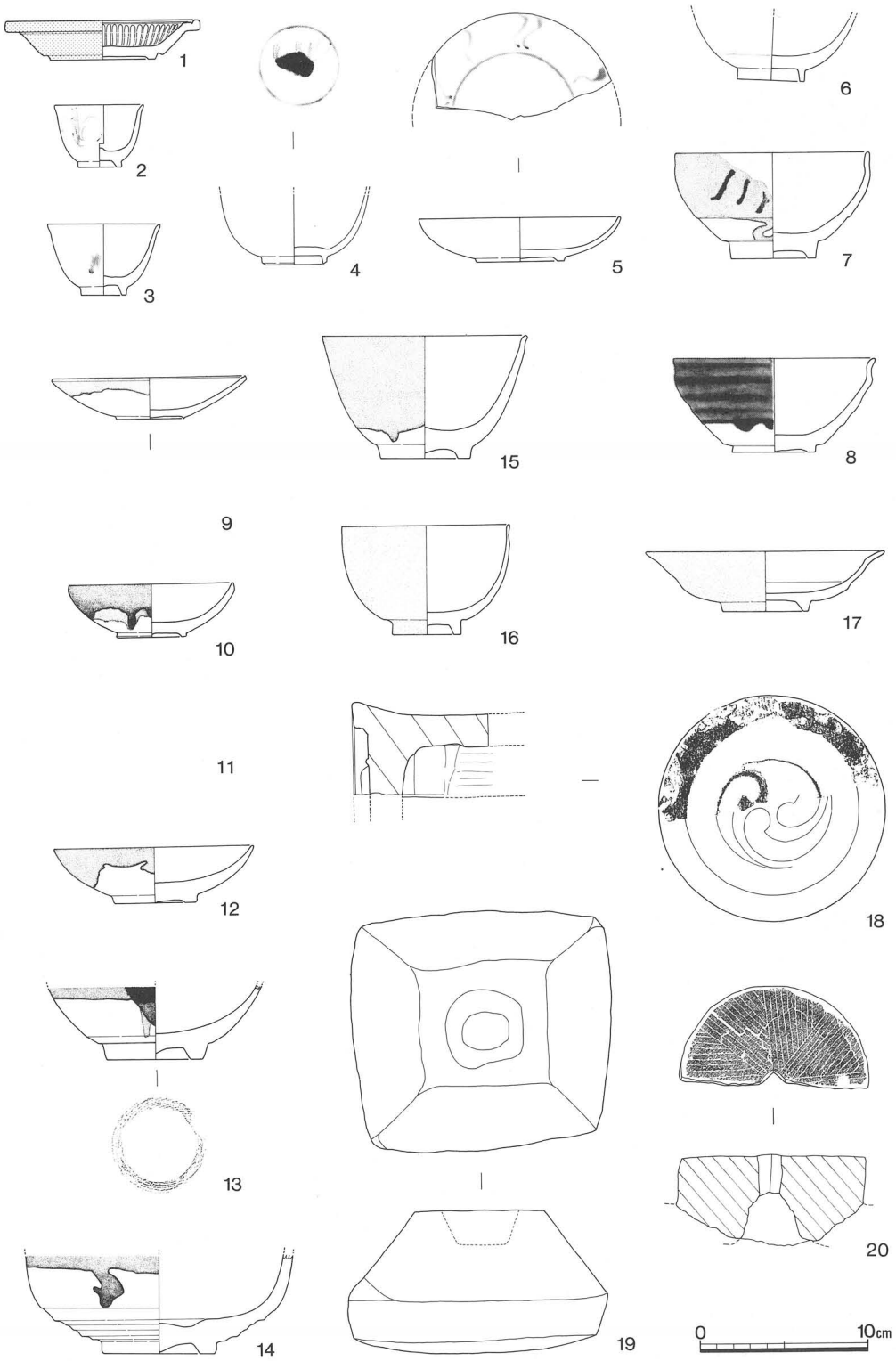


図17　空地（SH001）出土遺物実測図（Ⅰ）

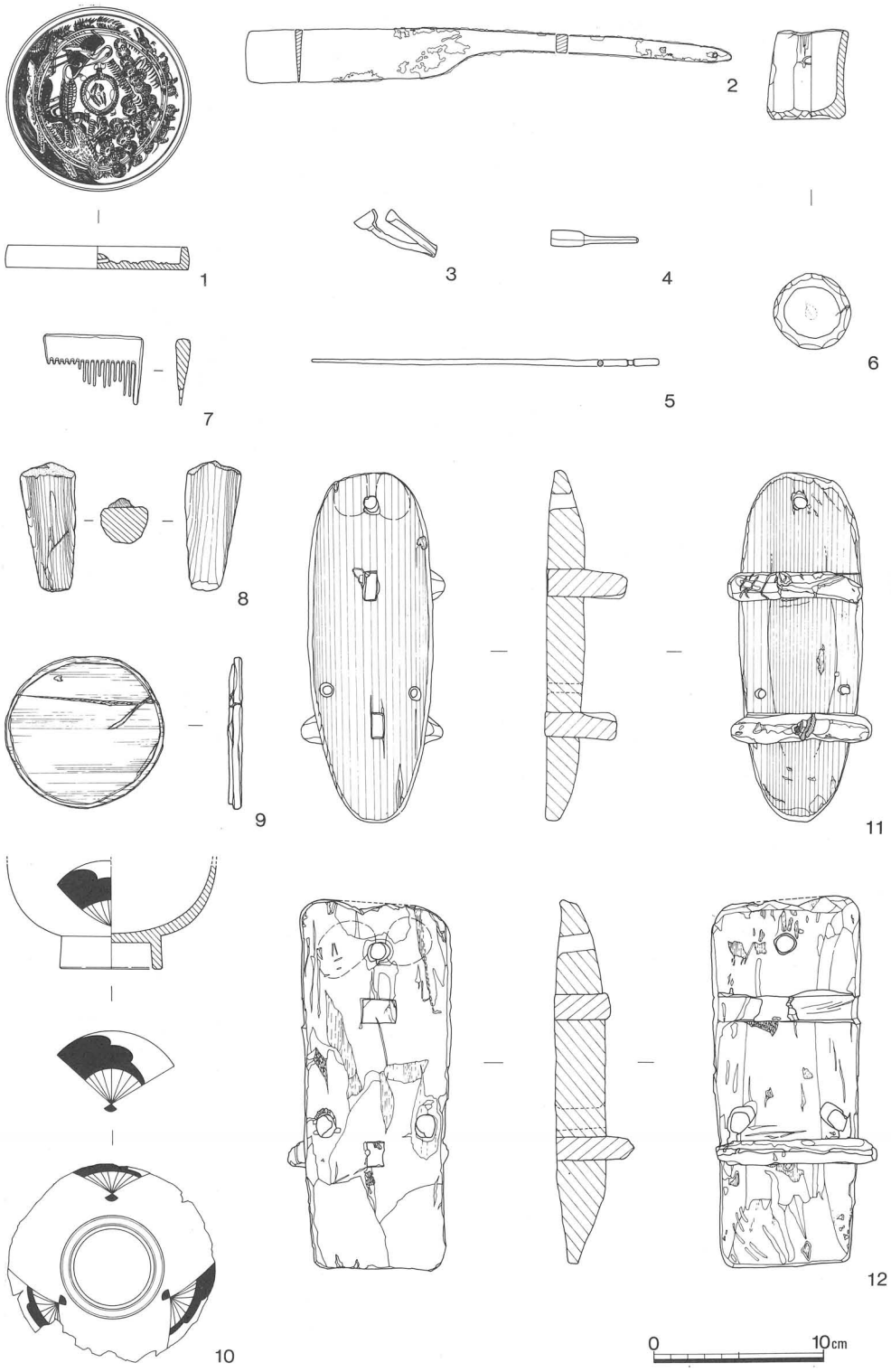


図18　空地（SH001）出土遺物実測図（Ⅱ）

すると、外面左側面が右側面に比して著しく磨滅し変形していることが注意される。これは使用が頻繁であったことと、右ききの人物が使用したことを示唆するものであろう。

木製品には櫛１、栓１、蓋１、椀４、下駄２、桶２がある。櫛（７）は現存長６㎝、幅４㎝、背の厚さ１㎝を測るつげ製の横櫛で、断面は斜辺の長い三角形となっている。歯は比較的間隔をもつもので、その長さは2.5㎝前後ある。栓（８）は長さ5.7㎝、先端部径1.7㎝のもので、断面は正円に近い。材は良質の四方柾が用いられているが、先端はやや磨滅している。蓋（９）は良質の柾材を用いた径9.2㎝前後、厚さ0.7㎝を測る円板状のものである。周縁は厚さの３分の１が３～４㎜幅で欠き取られ、その反対面は入念な面取加工が施されており、この面が外面となるものと思われる。椀（10）は径12㎝、現在高６㎝で、口縁部を欠損する。体部はやや低い半球形を示し、高台はやや外に開く形となっている。外面は黒色漆、内面は赤色漆塗仕上げをし、体部外面の三方に扇文を描く。扇文は竹部が赤色で、雲模様は雄黄で表わす。下駄（11）は長さ21㎝（７寸）、幅7.5㎝（2.5寸）を測り、歯は差し歯で、柄は１本つく。柾目の木取りがされた上質のもので、成人女子の外出用のものである。下駄（12）は長さ21㎝（７寸）、幅９㎝（３寸）物で、歯は差し歯で柄は１本つく。本人の左足用で、歯は著しく磨耗している。

石積溝（ＳＤ033）

長さ９ｍ、幅0.4ｍ、深さ１ｍの河石や野石よりなる石積溝が検出された。この溝は空地（ＳＨ001）と建物跡（ＳＢ025）を区画するもので、方向も町割と一致する。人頭大の石を数段に乱積するが、裏ごめがないため南側部分は洪水時に破壊されている。東側の底辺は幾分高く、水は東側から西側へ流れるようになっている。溝の東側に長さ数ｍで、径10㎝ほどの木が３本横たわっている。

この溝からは残り具合の良い唐津皿（図19－１、２）、伊万里皿（３）、備前徳利（４）が出土している。

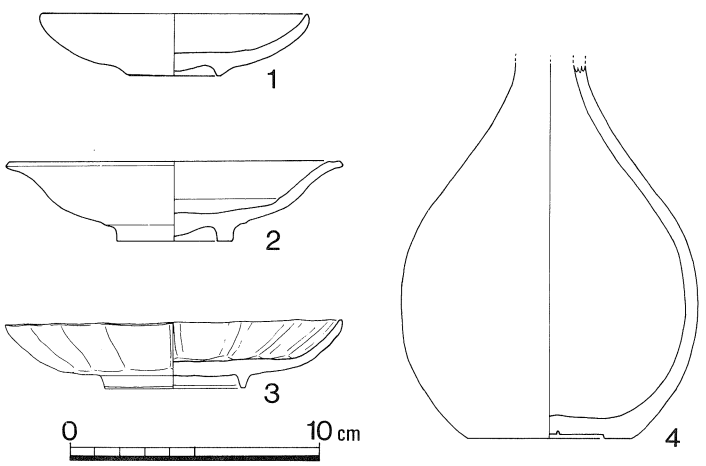


図19　石積溝（ＳＤ033）出土陶磁器実測図

建物跡（ＳＢ025、026）と空地（ＳＨ002）

建物跡（ＳＢ025）は上記石組溝の北側に位置する。調査区内には径80cmの大形ピットが3個検出されたのみで、建物跡の大部分は調査地外に存在する。全体の規模は不明であるが、細長いもので、梁間2間、総梁間4.0mを測る。柱穴内には柱材が2本残り、柱間寸法は2.0mを測る。

この建物に接して西側に、総梁行4.0m、総梁間4m以上の小規模な建物跡（ＳＢ026）が存在する。柱穴は7個確認したが、総て径30～50cmで小さい。柱穴内には柱材が5個残る。内部床面の中央には径1mの範囲に小石よりなる集石が、また、南西隅には小さな5個の石よりなる30cm四方の石組が各1存在する。その性格は不明である。

建物跡に沿って、人頭大の野石や河石を並べた幅30cmの雨落溝（ＳＤ034）が存在する。この溝は東南隅で南に折れ、さらに2mの所で西に曲り、コの字状となる。この溝と建物跡（ＳＢ026）の西端に挟まれた所には、径1cmの女竹が10本一列にさしてある。なお、北側は大部分が洪水時の流水で消失しているが、東北隅には1.5mほど石列が認められる。この石列と溝（ＳＤ033）との間隔は13mあり、屋敷割の6.15間と一致する。

建物跡の背後には空地（ＳＨ002）があり、ピット4、石囲1、土壙2が存在する。ＳＢ025に伴う柱穴の延長線上には径80～100cmの大形ピットが2個検出されたが、建物跡に伴うものかどうかは定かでない。他の2個のピットは

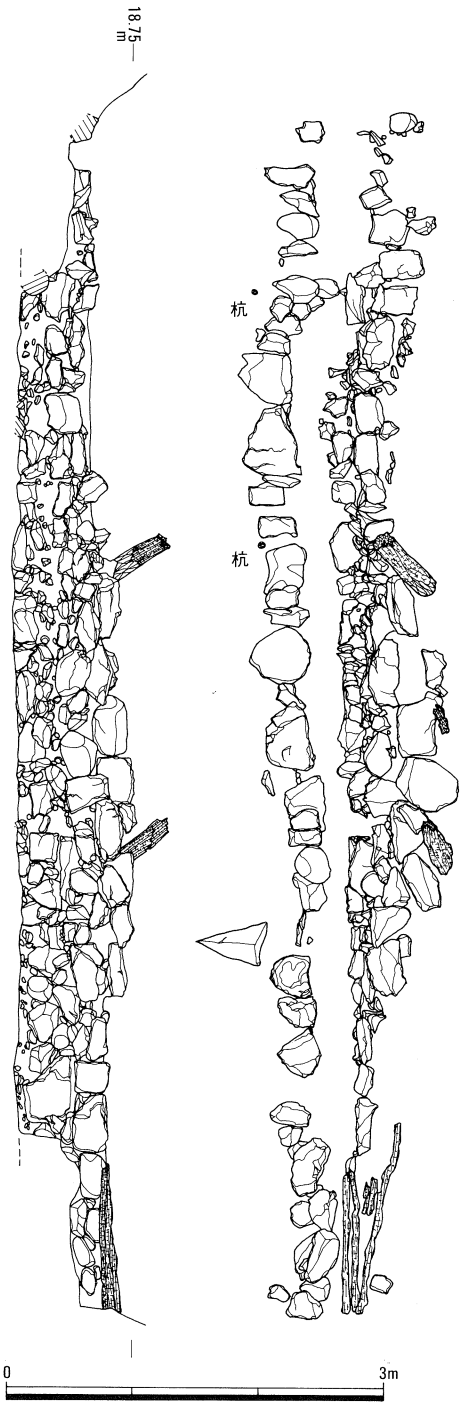


図20　石積溝（ＳＤ033）実測図

図21　建物跡（ＳＢ025・026）と空地（ＳＨ002）実測図

ＳＤ033の北側に接し、２*m*間隔に２個存在する。径は60～100*cm*で、径50*cm*大の樹皮つきの松材を内部に据えている。この松の先端はナタで加工され、現存長は１*m*である。使途は不明である。

空地の中央部には、ＳＢ026の床に存在したと同様の石組が存在する。内側は40*cm*四方で、河石５個からなる。土壙（ＳＫ173）は建物跡の南側に接し、東西１*m*、南北２*m*の不整形なもので、深さは40*cm*を測る。内部には小石や植物の腐敗物が堆積しており、出土品には陶磁器や土師質土器の破片が19個ある。土壙（ＳＫ174）は石組の西側に位置し、径1.8*m*、深さ40*cm*を測る。出土品には陶磁器、土師質土器の破片23個ある。両者とも性格は不明である。

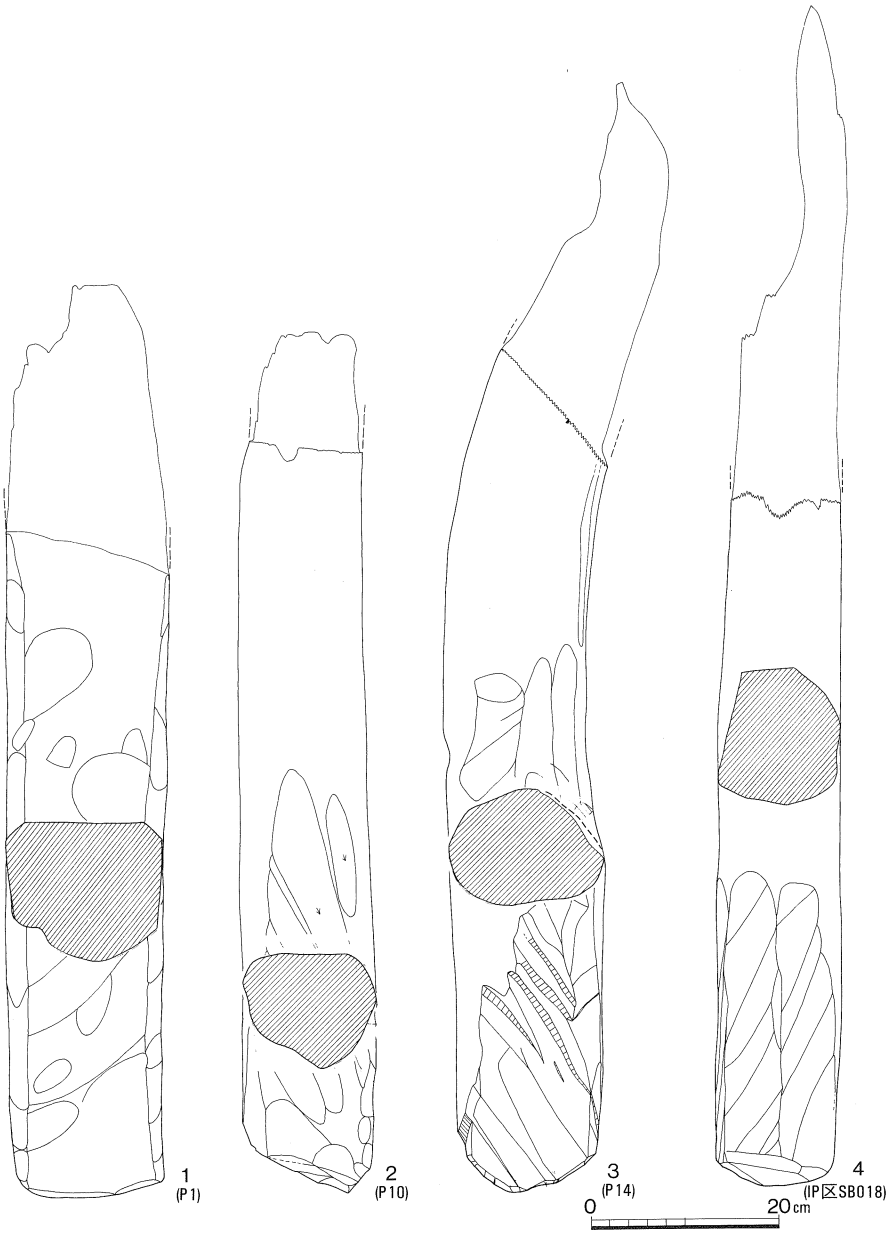


図22　柱痕実測図（Ⅰ）

（遺物）陶磁器、瓦類、石製品、金属製品、木製品等が出土している。

この区画から出土した陶磁器の組合せでは中国陶磁器の比率が低い。伊万里の約２分の１である。ここでも唐津の製品が多いが、碗・皿の他の器種が多いのも特徴である。擂鉢の他に壺、瓶などがある。115片中、絵唐津は２片である。その他の中には志野１、中国

製の赤絵１、茶釉磁２、褐釉１、信楽１などが含まれている。

図23の（１～６）は唐津で、（３）は貫入の入る透明釉で、胎土も鉄分を含まず色調は茶色味のかかる白色である。（６）の皿は見込の部分が輪状に釉抜きになっている。（７）は伊万里、（８）は中国製の白磁青花である。出土破片数に占める唐津焼の割合は多く、伊万里と中国製磁器がほぼ１割づつある。瀬戸、美濃の灰釉の碗はここでは黄瀬戸をさしている。なお、出土量は建物内が空地よりも多い。

ＳＫ173、174にはそれぞれ陶磁器の出土破片数が少ないが、前者は伊万里を含み、後者は含んでいない。

石製品には石臼１、砥石２、碁石状円礫３がある。

金属製品には刀の縁頭１、円板１、小柄４、包丁１、鏃１、鉈１、火ばし１、古銭２（寛永通宝１）、金具２、煙管３、鉄釘８などがある。縁頭（10）は銅製品で、縦幅3.8㎝、横幅2.2㎝、腰高５～６㎜を測り、天井部には中子櫃（なかごびつ）が存在する。腰の部分には黒漆が残存している。円板（13）は径4.3㎝、厚さ４㎜のもので、一面に矢羽根の文様が刻まれている。包丁（12）は現存長20.5㎝、刃部17.7㎝、刃幅4.8㎝、最大厚３㎜を測る菜切包丁である。茎部分は途中で折損している。鏃（14）は長さ23.5㎝の大形品で、儀式あるいは神前奉納用とも考えられる。

表７　建物跡（ＳＢ025・ＳＢ026）・空地（ＳＨ002）出土陶磁器等数量表

名称（器種）	破片数	名称（器種）	破片数	名称（器種）	破片数
青磁（碗）	1	南蛮系（壷）		備前（壷）	10
（皿）	1	（鉢）		（瓶）	43
（鉢）		（その他）		（鉢）	1
（盤）	1	計		（擂鉢）	2
（香炉）		灰釉（皿）	6	（その他）	12
（その他）	1	（鉢）		計	68
計	4	（香炉）		唐津（碗）	31
白磁（碗）		（その他）		（皿）	42
（皿）	7	計	6	（鉢）	4
（坏）		鉄釉（碗）	2	（香炉）	
（その他）	1	（壷）	4	（その他）	38
計	8	（皿）		計	115
染付（碗）	14	（その他）		伊万里（碗）	40
（皿）	16	計	6	（皿）	39
（鉢）		土師質（皿）	79	（鉢）	
（坏）		（土釜）		（その他）	2
（その他）		（その他）		計	81
計	30	計	79	その他の陶磁器	31
				総計	507

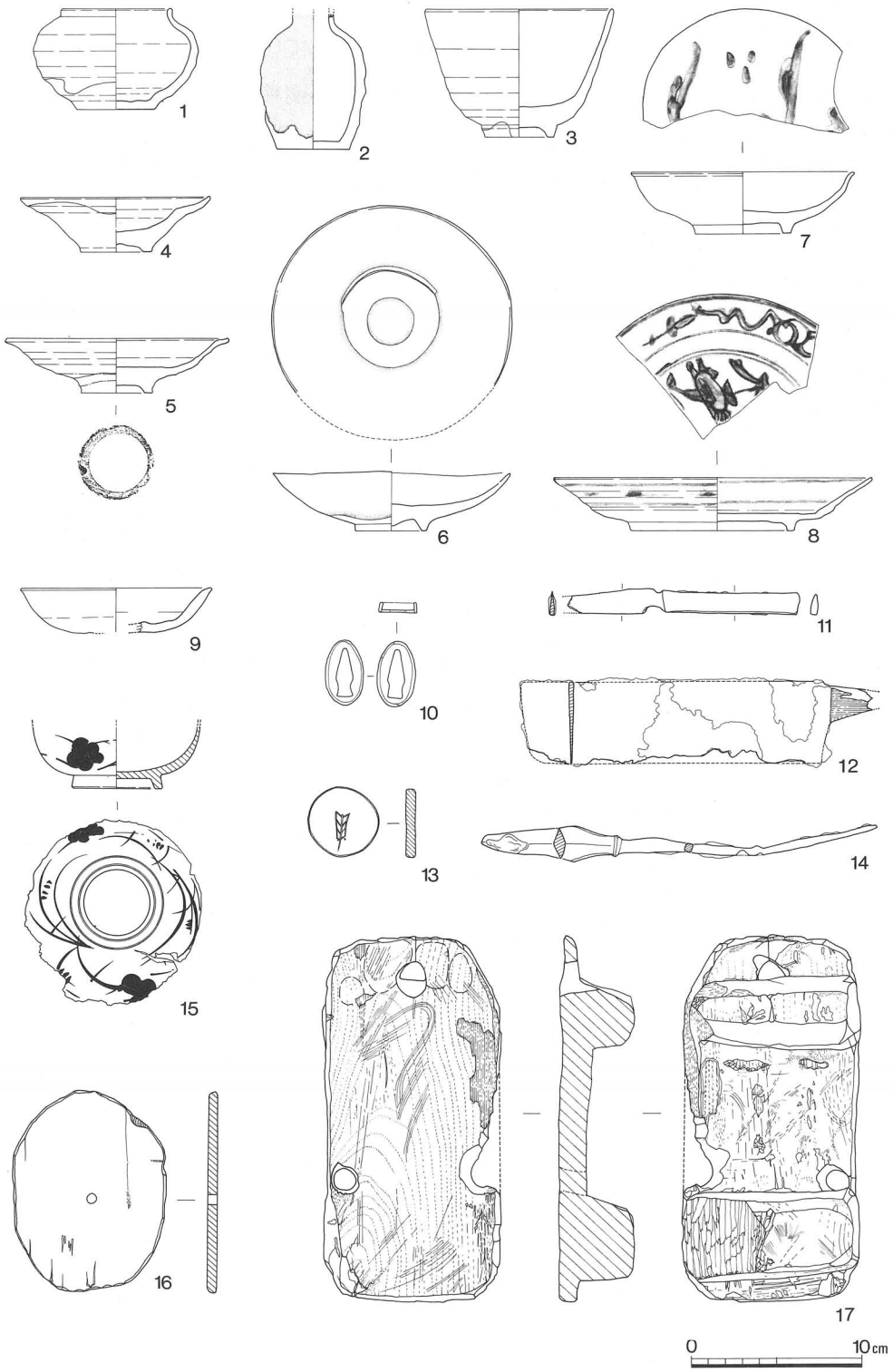


図23　建物跡（ＳＢ025・026）と空地（ＳＨ002）出土遺物実測図

木製品には漆塗椀５、下駄２、円板状木製品１、桶底１、木片多数がある。漆塗椀（15）は口縁部を欠くものであり、現存径9.7cm、同高3.7cmを測る。外面は黒色漆、内面は赤漆で仕上げ、体部外面には梅の花とみられる文様が対で配されている。一方の花弁は赤色漆で、他方は古代緑を使用している。円板状木製品は長径11.5cm、短径９cm、厚さ５mmで、中央に６mmの小孔が穿たれている。この使途は不明である。下駄（17）は長さ21cm（７寸）、幅10.5cm（3.5寸）物で、少年の左足用と推定される。連歯の歯の短いもので、技法的には稚拙である。手造りの自家用品かもしれない。

自然遺物としては、松かさ、種子、サザエのふた、テングニシが各１個出土している。

建物跡（ＳＢ027、028）と空地（ＳＨ003）

ＳＢ026の北側にある石列とＳＢ028に伴う石列との間隔は13mを測り、これは屋敷割の6.13間と一致する。検出された遺構としては、建物跡２とその背後に位置する空地がある。２棟の建物の境界は、屋敷割の真中に当り、３間の屋敷割２となる可能性も考えられる。

建物跡（ＳＢ027）は、ＳＢ026の北側に接して存在する。洪水時に南側の大部分が破壊され、西南隅に７個の柱穴が認められたのみで、全体の規模は不明である。柱穴の大きさは径50～70cmが３個、それ以外は50cm以下である。４本の柱材が残り、柱間寸法は2.2mである。

建物跡（ＳＢ028）はＳＢ027の北側に接し、奥側が検出された。総梁行4.6mを測るが、桁行は不明である。柱穴は10個認められたが、直接この建物に関わるものは６個で、大きさは径50～80cmである。３本の柱材が残り、そのうち１本には根石をもつ。柱間寸法は2.2mを測る。

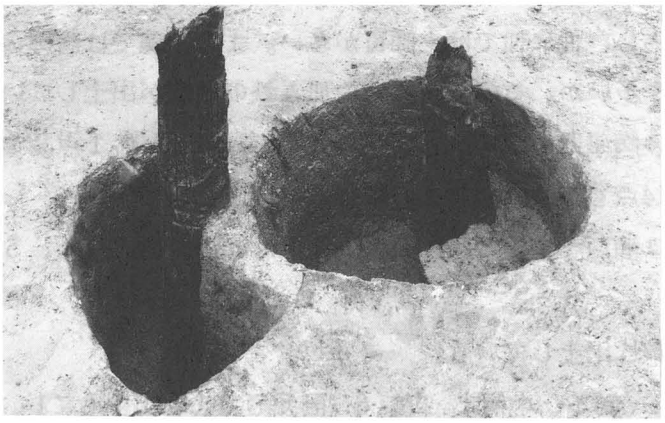
この建物跡に伴って、北側1.5mには長さ８mの石列が平行に存在する。この石列は西側で北に折れ、井戸跡（ＳＥ018）の石敷につながり、逆Ｌ字状となる。

空地（ＳＨ003）には埋設桶（ＳＸ029）と立木が各１存在する。埋設桶はＳＢ028の西側に位置し、底板の径32cm、深さ20cmの小形品である。縦板は18枚、底板は３枚で構成されるが、底板の一枚は後に補修されている。タガは２段である。なお、埋設桶内部より古銭が１枚出土している。

（遺物）陶磁器、土師質土器、瓦類、石製品、金属製品、木製品、自然遺物等が出土している。

陶磁器などの総破片数は526点である。そのうち唐津、伊万里の割合は約２分の１であるが、内訳をみると唐津が圧倒的に多い。中国製の青磁、白磁、白磁青花と伊万里の割合は中国製の方が多い。したがって、この区画にみかけの上で伴う陶磁器の組み合せは、碗、

図24　建物跡（ＳＢ027・028）と空地（ＳＨ003・004）実測図



柱穴と柱痕　（ＳＢ028）

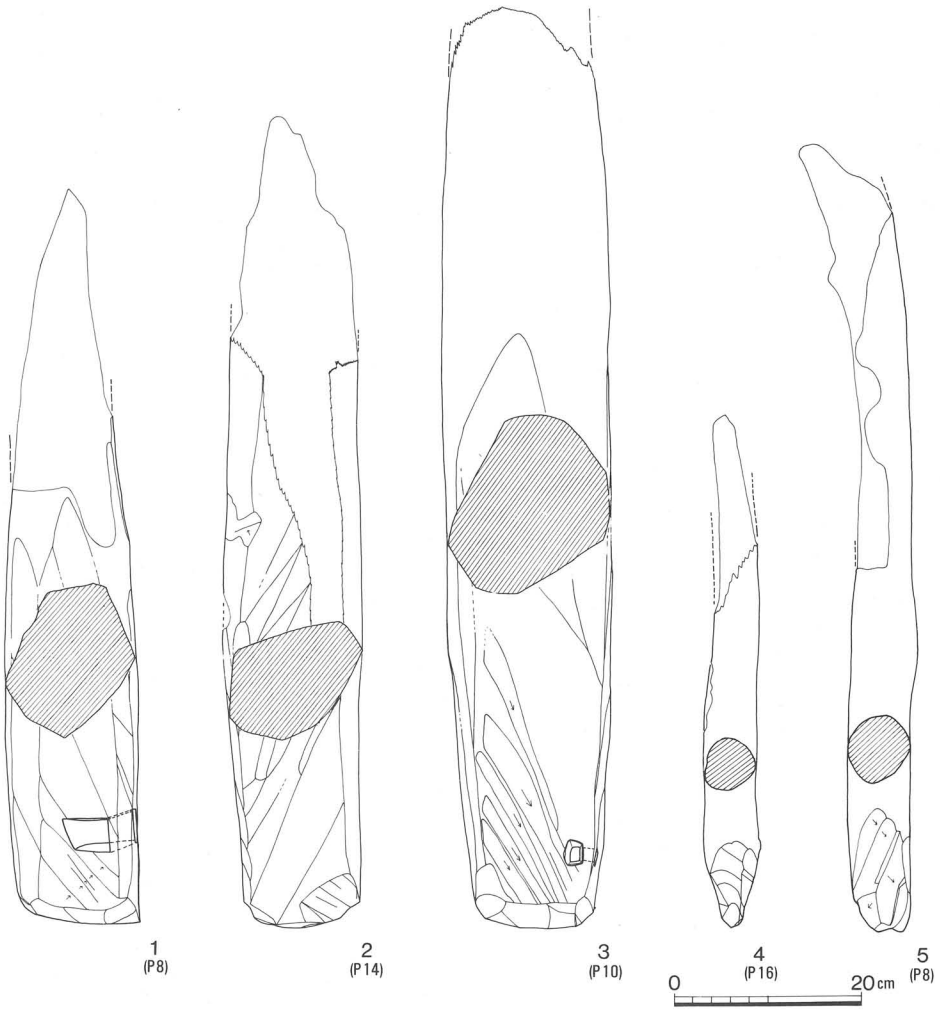


図25　柱痕・杭（4、5）実測図（Ⅱ）

皿では唐津が優位を占め、他に皿では土師質が多い。また、碗では唐津の他に伊万里と中国製の白磁青花がやや多いが、この他、灰釉の皿と鉄の釉碗が出土していることも明記しておきたい。その他の陶磁器の中には、信楽の壺、志野の皿が各１点認められる。九州系と考えられる陶磁器14点もこの中に含まれている。

図26の（１、３）は瀬戸、美濃の灰釉皿、（２）は唐津の皿、（４、５）は伊万里の皿である。

石製品には砥石が数片出土している。

金属製品には和鏡１、鍔１、小柄１、古銭６（開元通宝１、景徳元宝１、洪武通宝１、寛永通宝１）、釘８がある。小柄（６）は銅製品で、現存長9.9cm、幅1.3cm、厚さ4mmを測る。中央部に瓢箪形の浅い凹みがあり、象嵌の痕跡と考えられる。鍔（７）は銅製品で、縦幅4.8cm、横幅4.0cm、厚さ４mmを測る。中央に中子櫃（なかごびつ）、その左側に小柄櫃が存在し、両面周辺部にはタガネによる魚々子地（ななこち）が施してある。鏡（８）は流砂直下から出土しており、径10.6cm、厚さ0.4～1.1cmの直角式厚縁を有する。鏡背には松、鶴を配した双鶴鏡である。

木製品には漆塗椀４、下駄２、櫛１、石臼の軸１、桶材等がある。椀（９）は現存径10.5cm、高さ4.8cmを測り、外面は黒色漆、内面は赤色漆塗で仕上げ、外面には赤色漆で径3.5cmの円を描き、その中に三ツ巴がある。椀（10）は、現在径10cm、高さ５cmを測り、

表８　建物跡（ＳＢ027・028）・空地（ＳＨ003）出土陶磁器等数量表

名称（器種）	破片数	名称（器種）	破片数	名称（器種）	破片数
青磁（碗）	4	南蛮系（壷）		備前（壷）	6
（皿）	2	（鉢）	1	（瓶）	41
（鉢）		（その他）	2	（鉢）	4
（盤）		計	3	（擂鉢）	2
（香炉）		灰釉（皿）	7	（その他）	17
（その他）		（鉢）		計	70
計	6	（香炉）		唐津（碗）	42
白磁（碗）	3	（その他）		（皿）	129
（皿）	12	計	7	（鉢）	3
（坏）		鉄釉（瓮）	9	（香炉）	
（その他）		（壷）		（その他）	34
計	15	（皿）		計	208
染付（碗）	20	（その他）		伊万里（碗）	18
（皿）	16	計	9	（皿）	16
（鉢）		土師質（皿）	82	（鉢）	
（坏）	1	（土釜）	5	（その他）	8
（その他）	1	（その他）	1	計	42
計	38	計	88	その他の陶磁器	40
				総計	526

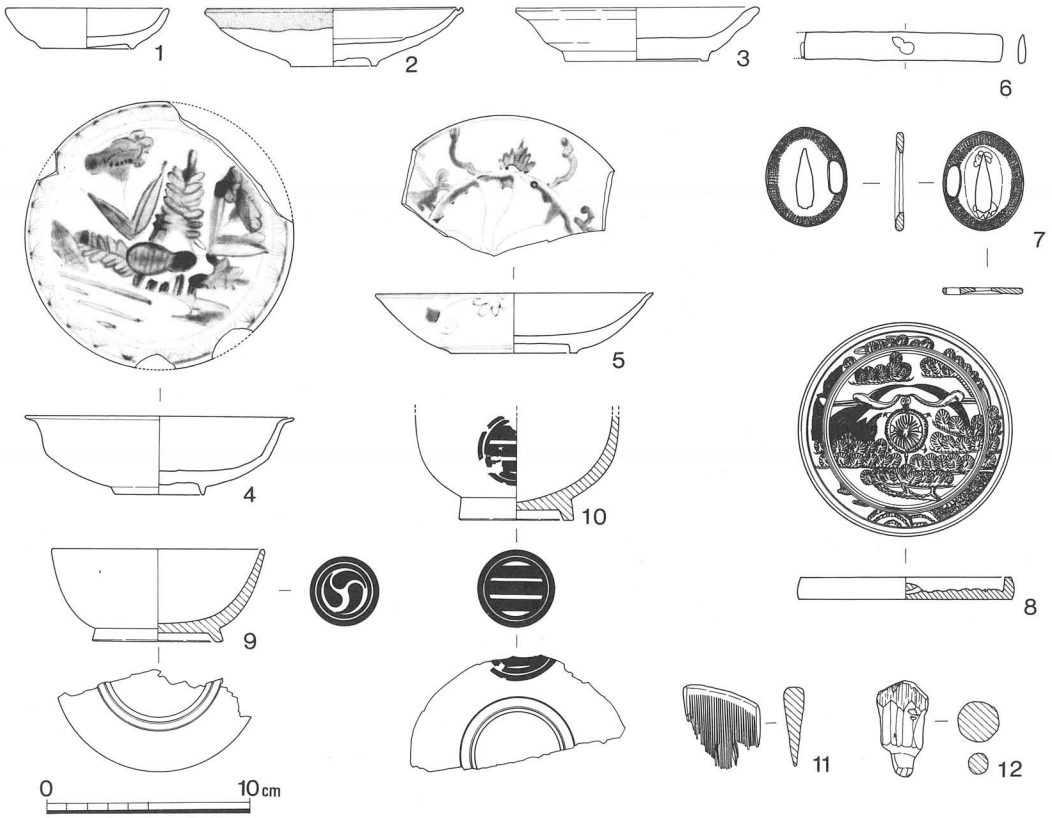


図26　建物跡（ＳＢ027・028）と空地（ＳＨ003）出土遺物実測図

外面は黒色漆、内面は赤色漆塗で仕上げ、外面に「細輪三ツ引」の家紋を描いている。中央が赤色で、上下は黄色を呈す。櫛（11）は、丈4.3cm、厚さ1.0cmであるが、大部分は欠損している。小形の弦月形で歯間が狭く、歯数が多い。石臼の軸（12）は長さ4.8cm、基部最大径2.5cm、先端部径8㎜を測る。太い部分は㊧方向に比較的細い面取りが施されている。

空地（ＳＨ004）と井戸跡（ＳＥ018）・埋設桶（ＳＸ030）

ＳＢ028に伴う石列と溝（ＳＤ035）との間が空地で、その幅は11.5mを測り、屋敷割の6間と一致する。標高は18mである。この空地には石積井戸跡と埋設桶が各1存在する。

井戸跡（ＳＥ018）は空地の西側に位置する。石敷は河石よりなる2.5m四方のものである。この石群の北側には長辺60cm、短辺50cmの切石の踏石が残る。水を汲む時、足が滑らなくするため表面がザラザラしている緑色凝灰角礫岩を使用している。井戸の内部は円形を呈し、径80cmで大形の河石や野石を積んでいる。しかし、内部の低部については崩壊の恐れがあり、調査を行っていない。

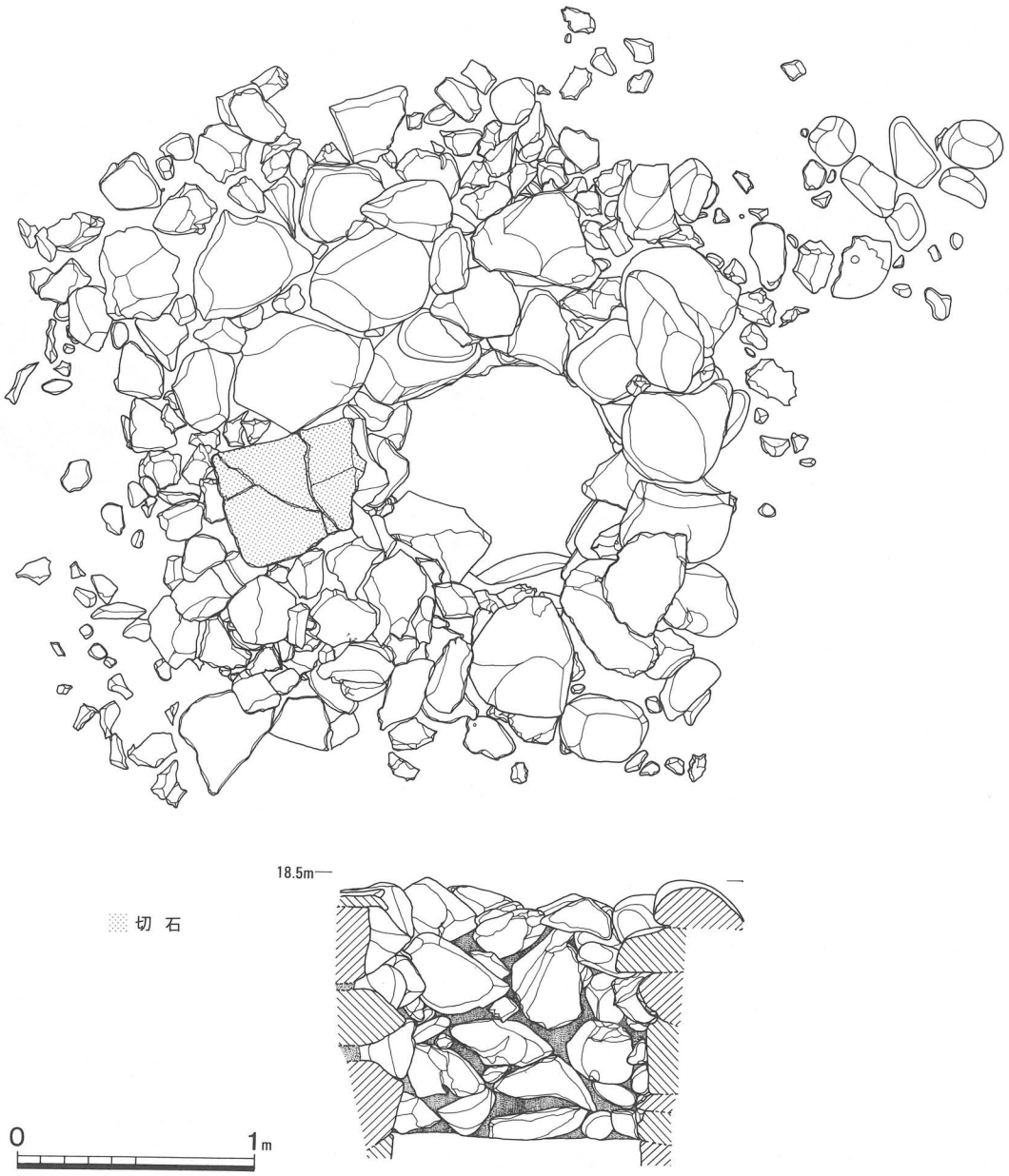


図27　石積井戸跡（ＳＥ018）実測図

埋設桶（ＳＸ030）は前記の井戸跡の北側に位置する。径70*cm*、深さ50*cm*以上の大形品で、縦板31枚、底板６枚よりなり、タガは３段である。石囲は2.2*m*四方、高さ0.5*m*で、中央部に桶が埋められている。大形の野石で三方が囲まれているが、東側には存在しない。石囲上面の南北端に杭が３本ずつ打たれているが、これは桶を覆う施設を支える柱状のものと推定される。なお、この石囲の下には石溝（ＳＤ035）が存在する。

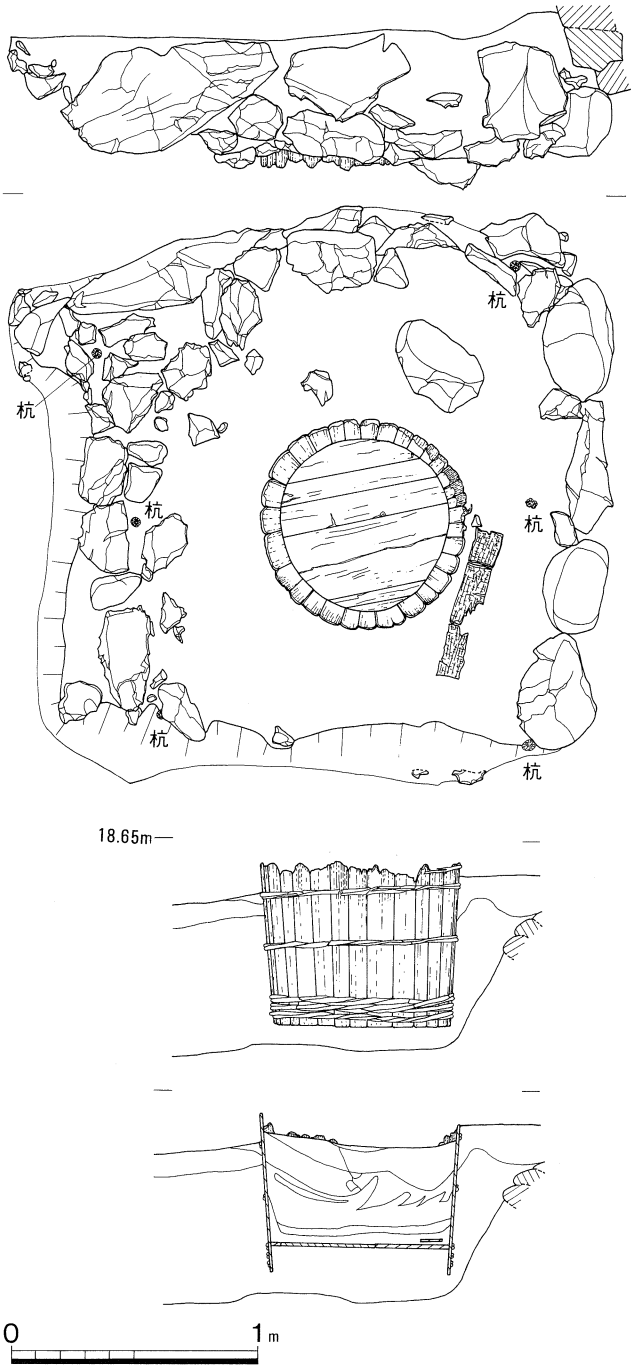


図28　埋設桶（SX030）実測図

（遺物）陶磁器、石製品、鉄製品、木製品等が出土している。

この区画から出土した陶磁器片の半数は唐津である。皿の占める割合が多いが、碗、皿の中で絵唐津が８点認められる。中国製の青磁、白磁、白磁青花と伊万里の皿・碗は、占める割合は少ない。また、壺・甕・擂鉢などの器種を占めるのはここでも備前であって、他に瀬戸、美濃の製品、土師質土器皿も出土している。

図29の（１、２）は伊万里の碗、（３、４、５）は唐津の皿で、（６）は唐津の碗である。

ＳＤ035からは中国製の青磁、白磁・白磁青花の碗・皿・坏、備前の壺・甕、瀬戸、美濃の灰釉の皿・碗、唐津、伊万里の皿・碗、土師質土器皿の組み合わせで陶磁器が出土している。中でも唐津の皿は完形に近いものが多量に出土しており、図30の（１～10）がそれである。（11、12）は唐津碗、（13、14）は土師質土器の皿である。

石製品には砥石４がある。

金属製品には煙管５、古銭３（景徳元宝１、寛永通宝１）、釘３、鉞（まさかり）１、鎌１、鉄鍋１、火ばし１、鉄片少量がある。煙管の雁首（７、８）は皿が大きく拡がるもので、２個出土している。鉞は全長15.7㎝、刃部幅4.5㎝、最大厚2.7㎝を測る。刃先に近い部分で、幅２～３㎜、長さ5.2～5.5㎝の平行沈線が４条刻まれ、柄を装着する部分には鉄のクサビが打

表９　空地（ＳＨ004）出土陶器等数量表

名称（器種）	破片数	名称（器種）	破片数	名称（器種）	破片数
青磁（碗）	1	南蛮系（壷）		備前（壷）	6
（皿）	2	（鉢）	1	（瓶）	20
（鉢）		（その他）	2	（鉢）	
（盤）		計	3	（擂鉢）	3
（香炉）		灰釉（皿）	6	（その他）	6
（その他）		（鉢）		計	35
計	3	（香炉）		唐津（碗）	16
白磁（碗）	3	（その他）	1	（皿）	111
（皿）	8	計	7	（鉢）	2
（坏）		鉄釉（碗）		（香炉）	
（その他）		（壷）		（その他）	25
計	11	（皿）		計	154
染付（碗）	11	（その他）	1	伊万里（碗）	10
（皿）	4	計	1	（皿）	10
（鉢）		土師質（皿）	43	（鉢）	
（坏）		（土釜）		（その他）	
（その他）		（その他）		計	20
計	15	計	43	その他の陶磁器	25
				総計	317

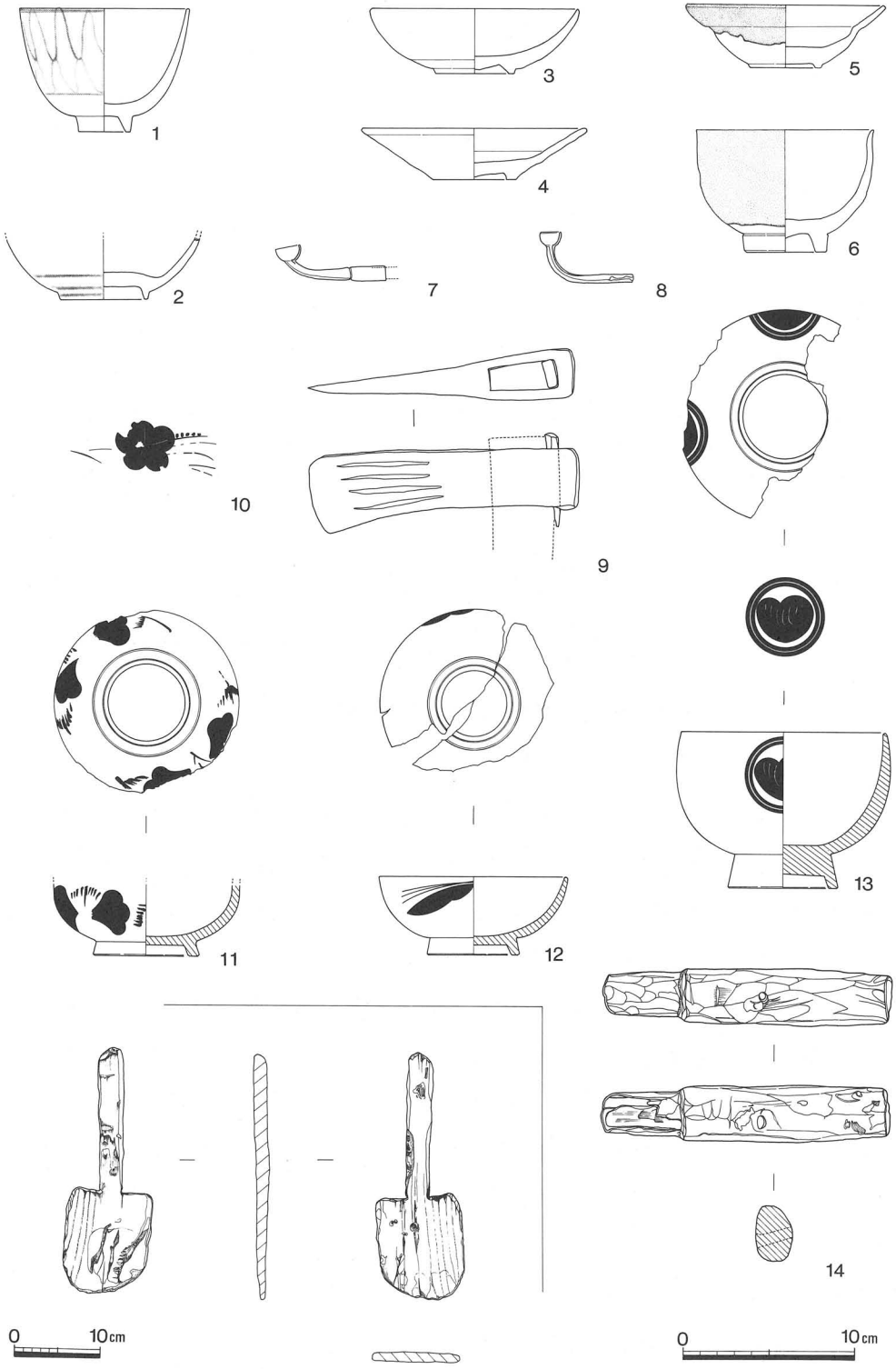


図29　空地（SH004）出土遺物実測図

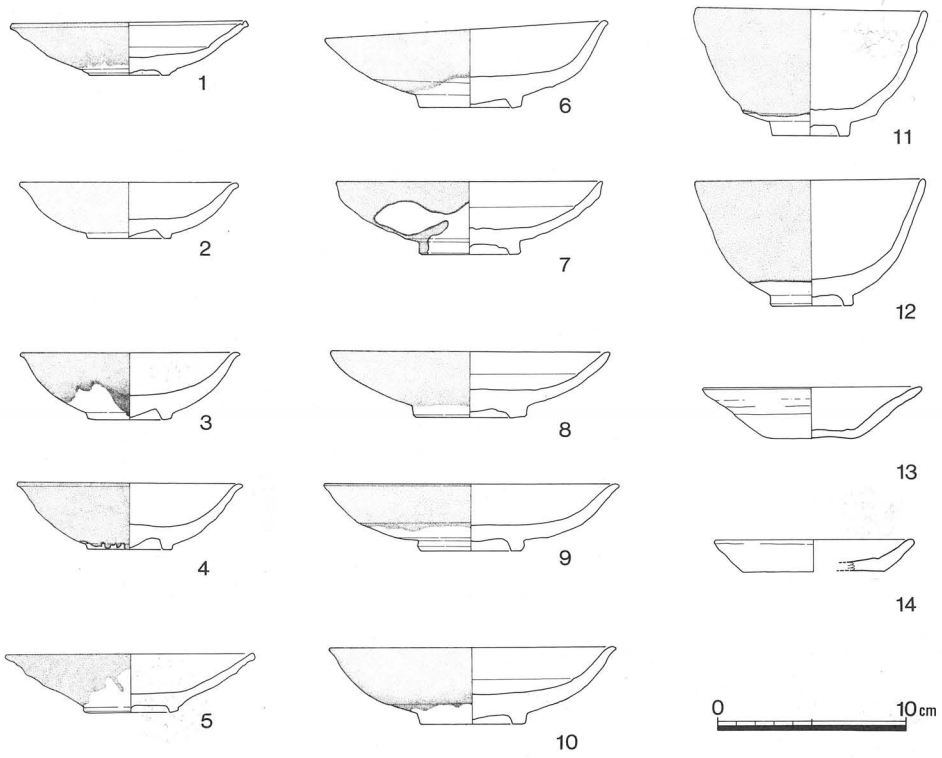


図30　溝（SD035）出土遺物実測図

ち込まれている。

木製品には椀7、桶底3、下駄1、しゃもじ1、木片等がある。（10）は漆器碗の文様で、柄文と草文連続模様を描く。黒地に赤色で柄文を、古代緑で草文を表わす。椀（11）は体部最大径11㎝で半球形を示し、高台は径6.2㎝、高さ0.9㎝でハの字状に開く。体部外面2方に、銀杏の葉形の花弁2枚と筆の穂先による8、9個からなる列点を単位とする草の葉が描かれている。黒地に、緑色で花弁と列点を表わす。皿（12）は口径11.0㎝、器高5.0㎝で、外面の2方に草花文を描く。内面は赤漆、外面は黒漆で、草文は赤色と古代緑で表わす。椀（13）は口径12㎝、高さ9㎝を測り、体部は半球に近い形態で、高台はハの字状に開く。内面は赤漆、外面は黒漆で、体部外面には二重円に橘を表現した家紋風の絵が三方に配されている。二重円は黄色で、橘は赤色で表わし、橘には縦方向の7条の引掻文が施されている。

柄状木製品（14）は長さ17㎝で、工具の柄と考えられる品である。柄尻は一文字に加工され、他の一端は長さ4.5㎝、幅2.7㎝を測る木はばきが共木から削り出されている。柄、はばき共に多く面取り加工がなされているが、稚拙な削りとなっている。柄の中央には径8㎜の目釘穴が穿たれ、木はばきの内面には工具の込み挿入時の焼け跡が認められる。

ＧＳ区の概要

調査区の中央部に位置する。荒砂が１～２ｍ堆積していたが、遺構の残り具合は良好で、町割や石列により３つの部分に分けられる。南側の２つの部分は空地と路で、埋設桶や石組井戸跡が存在し、北側の部分には建物跡２棟が検出された。各部分とも高低差が認められ、建物跡は標高19ｍで一番高く、南側とは１ｍの比高差がある。

空地（ＳＨ005）と道路（ＳＳ005）・埋設桶（ＳＸ031）・囲い（ＳＡ007）

ＧＲ区の北側に隣接する空地である。石垣に挟まれた幅は８ｍで、町割では４間に当り、遺構としては埋設桶１・小路１・囲い１が存在する。

埋設桶は南東に位置し、北側の石垣に接した部分には幅１ｍの道路（ＳＳ005）が東西に走り、中途から坂となり、北側の平坦地に登ることができる。この坂と西側一帯には小石が敷きつめてある。埋設桶（ＳＸ031）は、径48cm、深さ30cmの小形品で、空地の東南に位置する。縦板は23枚、底板は４枚、タガ４段で構成され、材質は杉である。なお、この桶から西へ石列が３ｍ伸びている。

囲い（ＳＡ007）は空地の西側に存在し、石列に対して直角になる。杭、竹、桶の廃材等を20～40cmごとに打ち込み、その間を割竹を交互に編んで柵状に囲んでいる。規模は東西２ｍ、南北７ｍの長方形を呈し、高さは杭の高さより30cm前後と推定される。内部にはシダ植物のウラジロ葉が厚さ数cmにわたって堆積していた。検出時には葉が茶褐色を呈していたが、これは採集して間もない時に河川敷下に埋没したためと推定される。これだけ多量のウラジロが何の目的で採集されたかは不明である。なお、ＩＰ区の第２遺構面（ＳＢ033）付辺からも多く出土している。

（遺物）　陶磁器、瓦類、石製品、金属製品、木製品、自

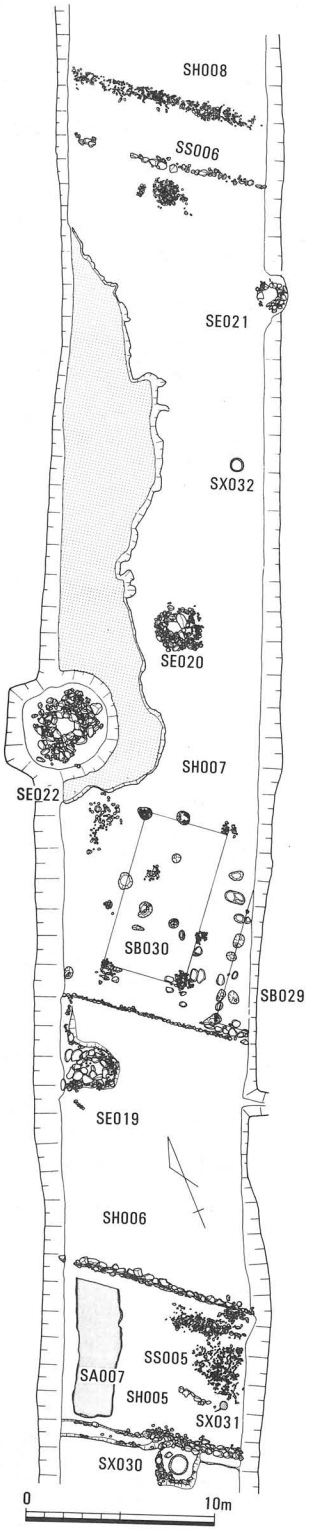


図31　第１遺構面　ＧＳ・ＦＴ区遺構実測図（Ｉ）

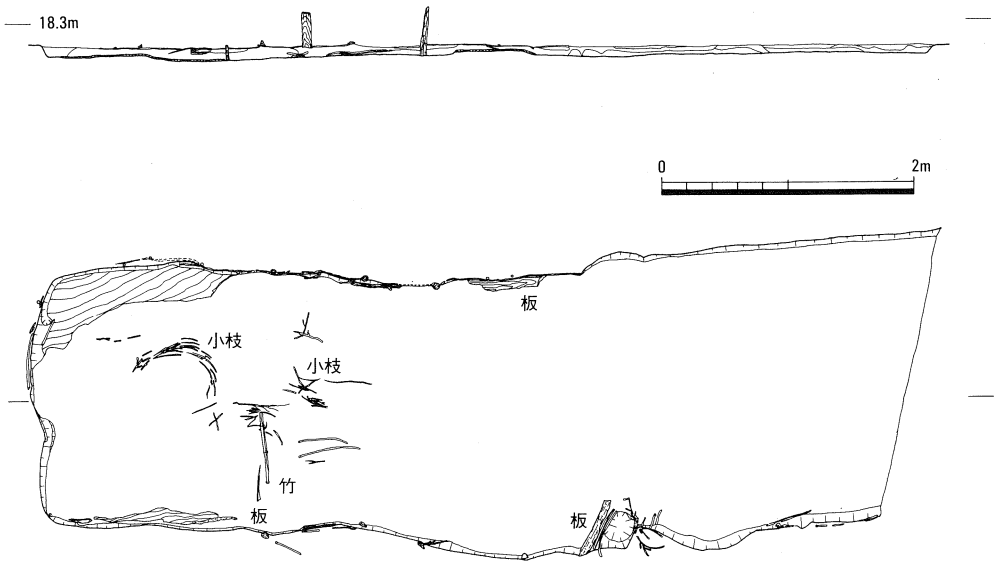


図32　囲　い（ＳＡ007）実　測　図

然遺物がある。

この区画から出土する中国製磁器は全体の10パーセントに満たない。それに比較して肥前陶磁器である唐津・伊万里は51.8パーセントと全体の半数という見かけ上の組成比率を占めるのが注意される。なかでも唐津の皿の破片数は多く、103点を数える。その中に含まれる絵唐津の破片は10点で、ほぼ10分の１の割合である。伊万里も15パーセントを占めているが、器形の上では唐津とは逆に碗が多いのが特徴である。瀬戸、美濃の碗、皿の関係もここでは、鉄釉碗と灰釉皿片が８点と７点出土しており、一見補完関係を保っているように見える。その他の中には、信楽の壺が１点含まれている。

図34の（１～３）が唐津、（４）が伊万里である。

石製品としては砥石２片がある。

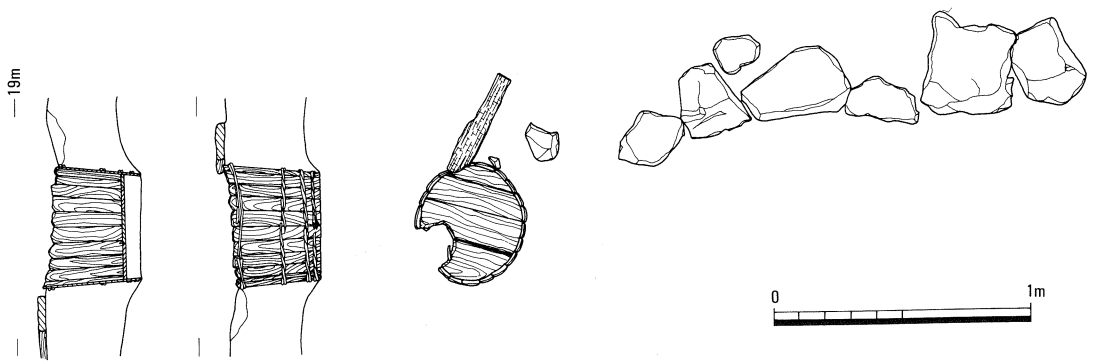


図33　埋　設　桶（ＳＸ031）実　測　図

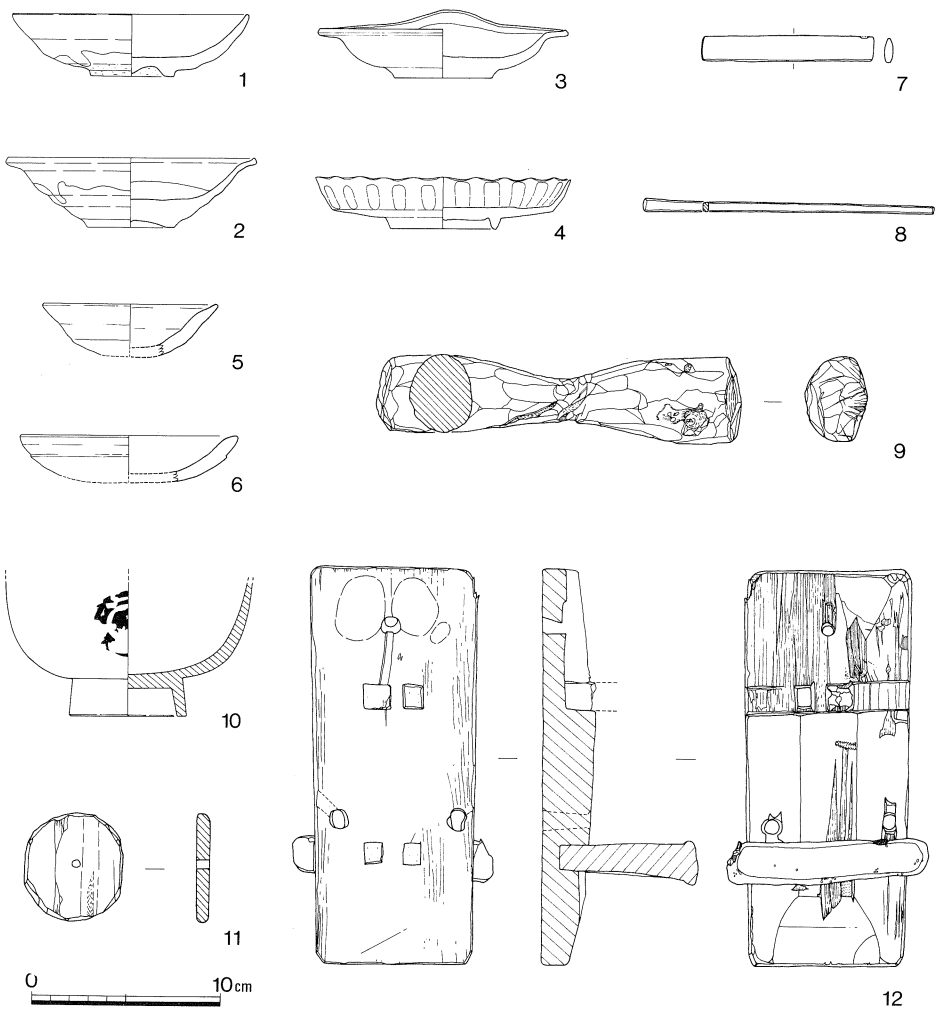


図34　空地（SH005）出土遺物実測図

金属製品としては釘８、古銭２、火ばし状金具１、小柄１がある。小柄は銅製で、文様はない。火ばし状金具は青銅製で、長さ15.5cmを測り、先端になるほど細くなる。

木製品には椀７、つちのこ１、円板状木製品１、木片が若干ある。椀は口縁部を欠くものであるが、胴部径13cm、高さ７cmを測る。内面は赤漆、外面は黒漆で、三方に二重円の文様が描かれているが、剥落が著しく、その内部は不明である。つちのこは長さ19cmで、左右の太い部分の径は4.5cm、中央部は２cmと細くなる。全体に雑な加工痕が多く残る。有孔円板は径5.5cmの円板状のもので、厚さは７mmである。中央部に５mm大の小孔が穿かれ、戸車とも考えられる。

表10　空地（SH005）出土陶磁器等数量表

名称（器種）	破片数	名称（器種）	破片数	名称（器種）	破片数
青磁（碗）	3	南蛮系（壷）		備前（壷）	15
（皿）	3	（鉢）	1	（瓶）	34
（鉢）		（その他）		（鉢）	7
（盤）			計 1	（擂鉢）	5
（香炉）		灰釉（皿）	7	（その他）	7
（その他）		（鉢）			計 68
	計 6	（香炉）		唐津（碗）	23
白磁（碗）	1	（その他）		（皿）	103
（皿）	9		計 7	（鉢）	11
（坏）	1	鉄釉（碗）	8	（香炉）	
（その他）		（壷）		（その他）	17
	計 11	（皿）			計 154
染付（碗）	9	（その他）	2	伊万里（碗）	48
（皿）	10		計 10	（皿）	15
（鉢）	3	土師質（皿）	46	（鉢）	
（坏）		（土釜）	4	（その他）	1
（その他）		（その他）	1		計 64
	計 22		計 51	その他の陶磁器	27
				総計	421

空地（SH006）と石積井戸跡（SE019）

石垣（SX033）と石列（SX034）に挟まれた幅13*m*の空地であり、町割は6.3間に当る。遺構としては、北西隅に石積井戸跡が一基存在する。

石垣は乱石積で、その高さは西側で80*cm*、東端20*cm*となり、東側では坂道に沿って低くなる。石材としては自然石や割石が用いられ、大きさは人頭大のものから50*cm*大のものまで、まちまちである。

石積井戸跡は空地の一角に位置する。石敷は既に破壊されている。内部は厚さ10～20*cm*の野石、河石が積まれ、径70*cm*、深さ1.7*m*以上であるが、溜水のため底部を確認するこ

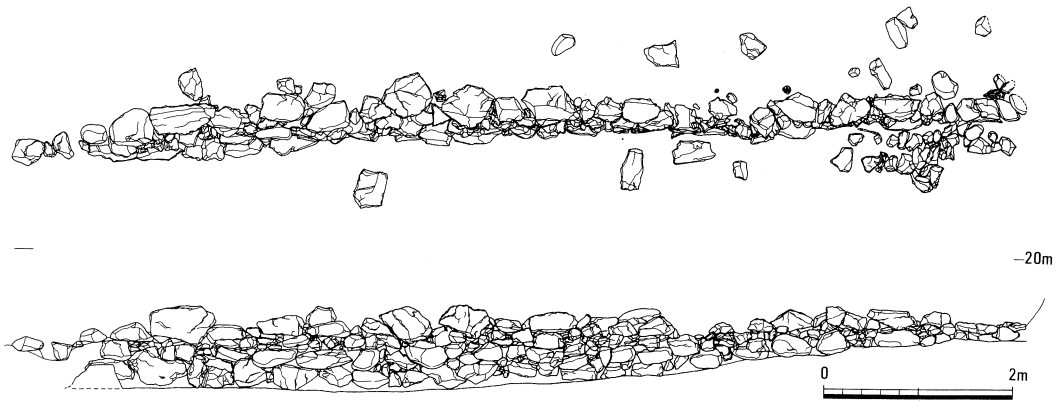


図35　石垣（SX033）実測図

とはできなかった。また、この井戸跡の西側には北側の石列に繋がる石列が存在する。なお、この内部より径18cmの桶底が１枚出土している。

（遺物）　陶磁器、瓦類、石製品、金属製品、自然遺物等がある。

中国製品である青磁、白磁、白磁青花の碗、皿が69片で、全出土陶磁器片中に占める割合が21.8パーセントと比較的高いのが陶磁器組成の特徴である。中国陶磁器の組合せでは白磁青花の碗、皿と白磁の皿が多く、白磁碗、青磁の碗、皿が少量出土している。相対的に唐津の比率が低い。皿50点の中の３点に銹絵が施されている。また、伊万里も6.3パーセント出土破片数に占める割合は小さい。

図37は（１～３）が伊万里、（４～６）が唐津である。

石製品には砥石２と玉石１がある。

金属製品には小柄１、鎹（はばき）１、煙管１、古銭１と少量の釘がある。小柄は銅製品で、全長9.9cm、幅８mm、厚さ５mmを測る。文様はないが、二次的に火を受けている。鎹は銅製品で、最大長2.7cm、幅1.8cm、最大厚８mmを測る。

木製品には下駄５、椀３がある。椀は口径9.8cm、高さ４cmの小形品で、内外とも黒漆で、内面底には断文が認められる。高台部は二次的に取り、体部中途には４mmの小孔を穿っている。

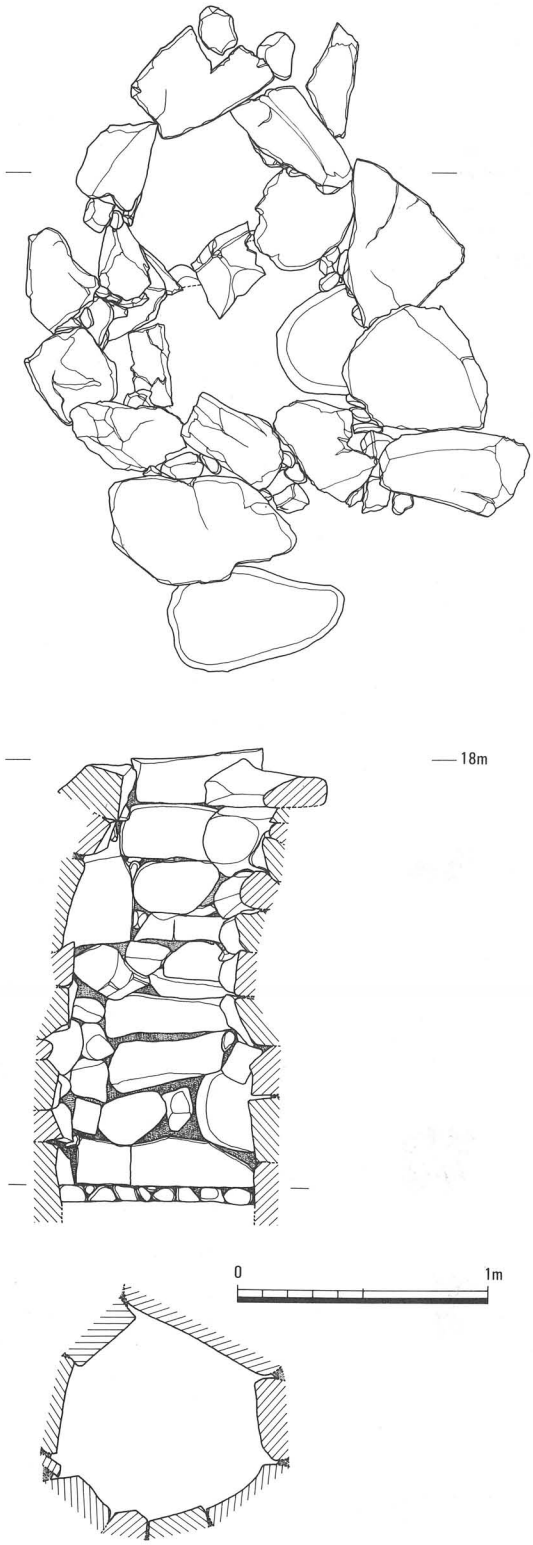


図36　石積井戸跡（ＳＥ019）実測図

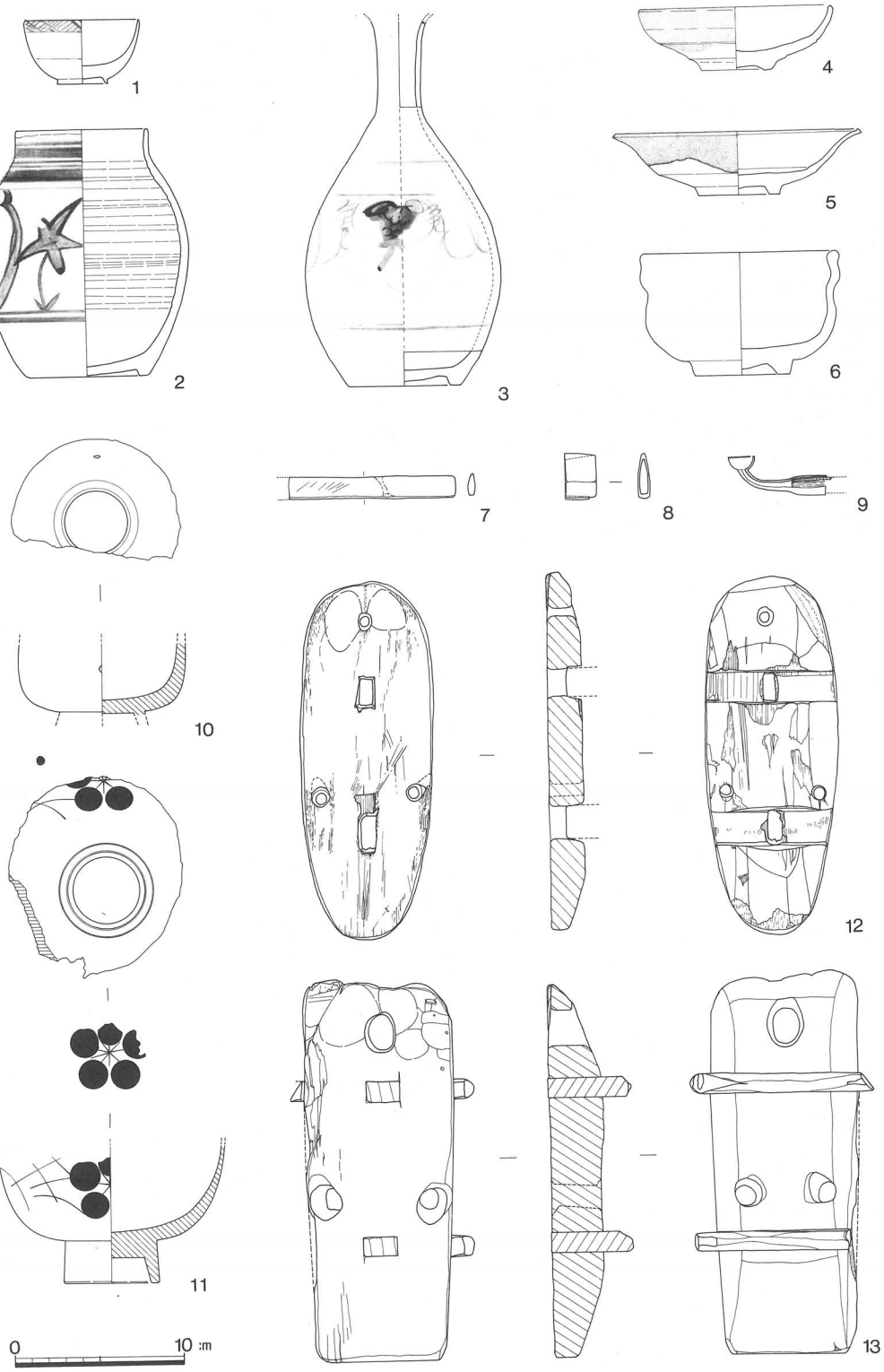


図37　空地（SH006）出土遺物実測図

椀を二次的に加工し、米量（よねばかり）として使用したものであろうか（附論参照）。漆塗椀は口縁部を欠損しているが、胴部最大径13.5cm、高台の高さ2.5cm、径5.6cmを測り、その裏面は深さ1.5cmの内刳りが施されている。体部は半球に近い形で、高台は円板状を呈し、重厚なつくりとなっている。体部外面の3か所には、赤色の梅鉢文が描かれ、その横には赤銅色ですすき葉様の線が6条斜格子状に表わされている。

表11　空地（SH006）出土陶磁器等数量表

名称（器種）	破片数	名称（器種）	破片数	名称（器種）	破片数
青磁（碗）	4	南蛮系（壷）		備前（壷）	10
（皿）	3	（鉢）	2	（瓶）	22
（鉢）		（その他）	1	（鉢）	
（盤）		計	3	（擂鉢）	3
（香炉）		灰釉（皿）	4	（その他）	4
（その他）		（鉢）		計	39
計	7	（香炉）		唐津（碗）	10
白磁（碗）	5	（その他）		（皿）	50
（皿）	23	計	4	（鉢）	1
（坏）		鉄釉（碗）	7	（香炉）	
（その他）	1	（壷）		（その他）	10
計	29	（皿）		計	71
染付（碗）	11	（その他）		伊万里（碗）	8
（皿）	22	計	7	（皿）	11
（鉢）		土師質（皿）	56	（鉢）	
（坏）		（土釜）	14	（その他）	1
（その他）		（その他）		計	20
計	33	計	70	その他の陶磁器	33
				総計	316

建物跡（SB029・SB030）と空地（SH007）

建物跡（SB029）は調査区の東端で、その一部を検出したに過ぎない。柱穴の列は6個確認されたが、建物跡に伴うものは4個で、径50cm前後を測る。また、南側には30～40cm大の河石が並ぶが、その性格は不明である。この建物跡の床面は黄褐色の砂質土や小石混りで、固く敲きしめてあり、土間（にわ）と考えられる。

建物跡（SB030）はSB029の西側に存在する。洪水時に流路となったため礎石は存在しないものの、径80cmの範囲に小石よりなる根石が6か所で残存する。その規模は、梁間2間（総梁間4.5m）、桁行3間（総梁行9m）を測る。南側には30～40cm大の4個の礎石が対で存在し、庇がつくものであろうか。

（遺物）陶磁器、瓦類、金属製品、木製品がある。

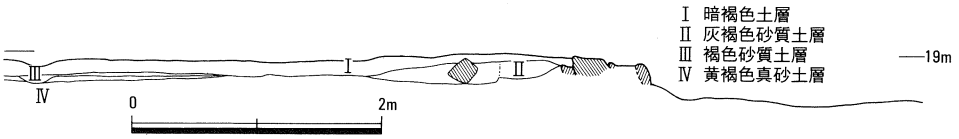


図38　建物跡（SB029）床面断面図

この区画に伴う陶磁器は全体の器形等がわかるものが多い。陶磁器片の少ない中で、灰釉碗が７点確認されるのが注意される。その他の陶磁器には九州系の陶器と常滑系の陶器片各１が含まれる。

図39の（１）は灰釉碗、（３～６）は伊万里、（２）は唐津の片口である。

金属製品は煙管１、古銭４（元祐通宝１、景祐元宝１、宣和通宝１）、釘４、鉄片等が若干ある。キセルは雁首の大きく拡がるものである。

木製品には朱色の杯の破片、椀３、木履１、桶材少量がある。木箱は長辺11.5㎝、短辺6.3㎝、高さ３㎝の菱形を呈すもの。厚さ５㎜大で、内部が刳り抜かれて容器となっている。

表12　建物跡（SB029・030）と空地（SH007）出土陶磁器等数量表

名称（器種）	破片数	名称（器種）	破片数	名称（器種）	破片数
青磁（碗）		南蛮系（壷）		備前（壷）	
（皿）		（鉢）		（瓶）	2
（鉢）		（その他）		（鉢）	
（盤）		計		（擂鉢）	
（香炉）		灰釉（皿）		（その他）	
（その他）	1	（鉢）		計	2
計	1	（香炉）		唐津（碗）	2
白磁（碗）		（その他）	7	（皿）	
（皿）		計	7	（鉢）	
（坏）		鉄釉（碗）	1	（香炉）	
（その他）	6	（壷）		（その他）	1
計	6	（皿）		計	3
染付（碗）	3	（その他）		伊万里（碗）	1
（皿）	3	計	1	（皿）	2
（鉢）		土師質（皿）	6	（鉢）	
（坏）		（土釜）		（その他）	1
（その他）		（その他）		計	4
計	6	計	6	その他の陶磁器	3
				総計	39

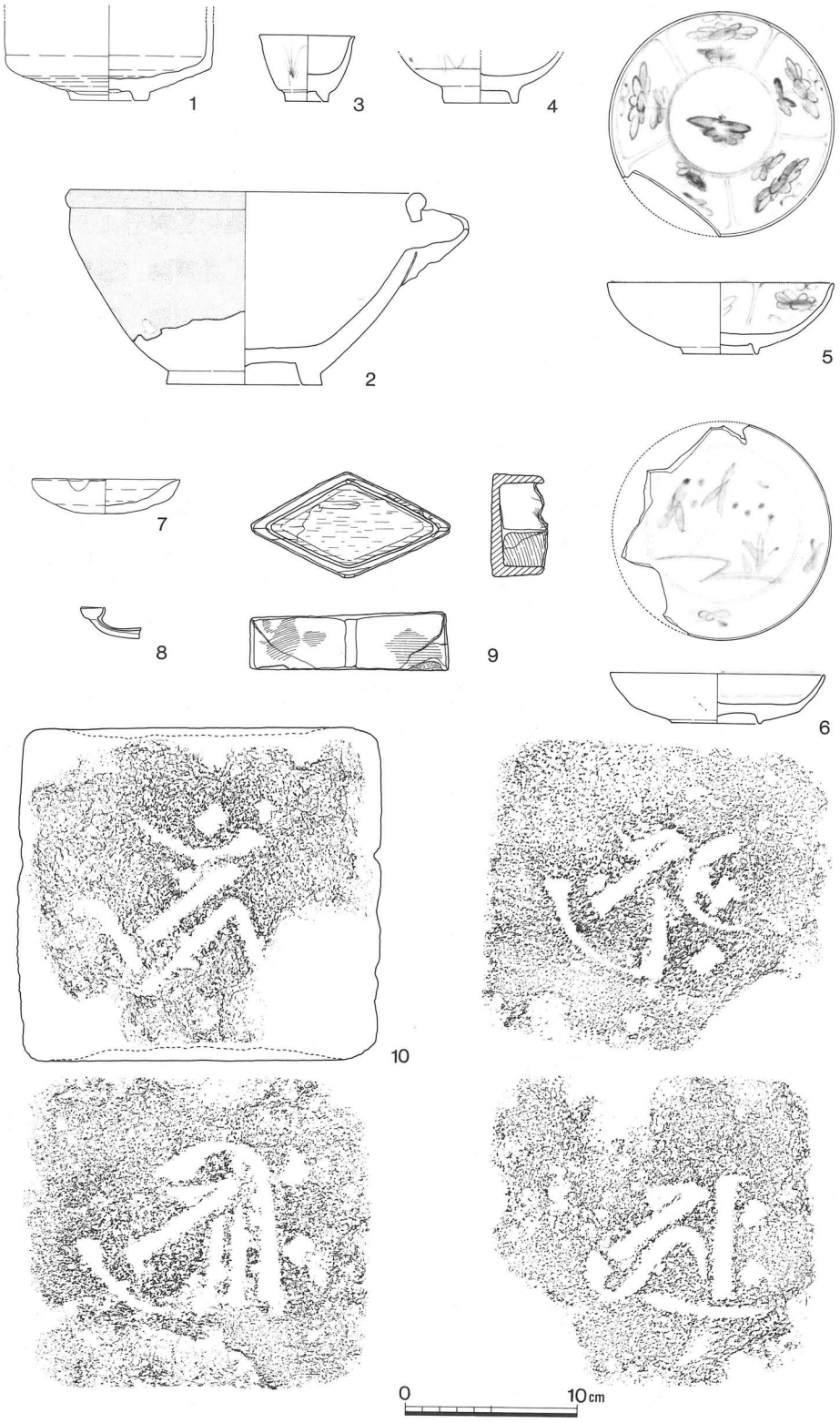


図39　建物跡（ＳＢ029・030）出土遺物実測図

ＦＴ・ＦＵ区の概要

ＦＴ・ＦＵ区は調査区の最北部に当り、大部分は空地（ＳＨ008）で、遺構としては井戸跡２・集石２・埋設桶１・石列１・道路状遺構１が検出された。なお、ＦＴ区の西側の大部分は洪水時に流路となったため、遺構は存在しない。標高は18.5*m*で、ＧＳ区の北側建物跡部分より僅かに低い。

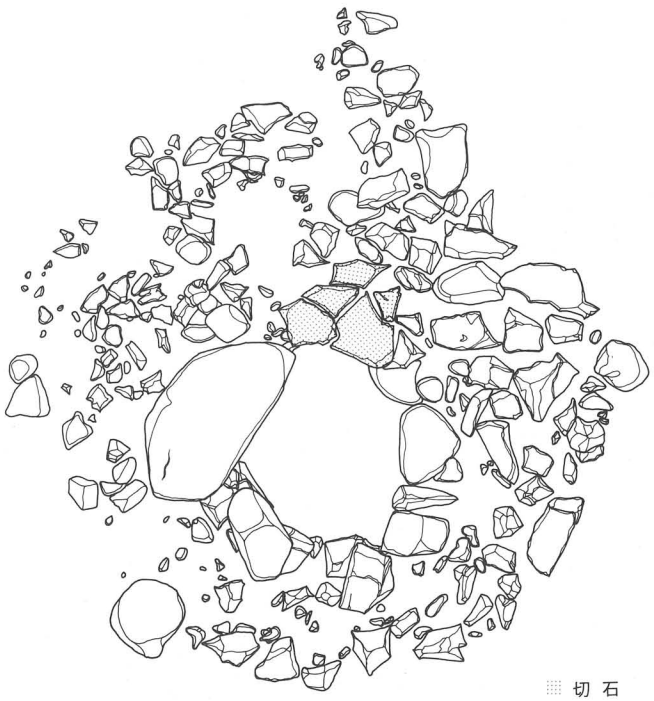


図40　石積井戸跡（ＳＥ020）実測図

井戸跡（ＳＥ020・021）

井戸跡（ＳＥ020）は建物跡（ＳＢ030）の北側に存在する。河石よりなる石敷が認められるが、その規模は定かではない。この石敷の南側には長辺50*cm*・短辺40*cm*の切石の踏石が残存するが、ＳＥ018と同様に緑色凝灰角礫岩を使用し、その表面には多くのノミ痕が残っている。裏込石は径２*m*の範囲に存在する。内部は径60～80*cm*のほぼ円形を呈し、厚さ10～20*cm*の河石が積まれている。深さは1.5*m*以上で、内部より桶底が出土している。

井戸跡（ＳＥ021）は埋設桶（ＳＸ032）の北東に位置する。石敷は不明である。内部は径１*m*の円形で、大形の河石・野石が積まれているが、ここは調査区外のため詳しい調査は行っていない。なお、この井戸跡は16世紀に掘られた井戸跡（ＳＥ024）の一部

を壊して設けられている。

集石（ＳＸ035・036）

石列（ＳＸ007）に接して径1.5*m*と径30*cm*の大小２3個の集石が存在する。河石や野石の10*cm*大の小礫で構成されている。性格は不明である。

埋設桶（ＳＸ032）

井戸跡（ＳＥ020）の北側に位置する。底板の径は65*cm*、深さ50*cm*を測る大形品である。縦板は約30枚で、部分的にそぎ板状の薄手の板で補っている。底板は７枚存在し、この裏側中央部にある幅２*cm*、長さ63*cm*の板で補強されている。この桶には、３*mm*四方の角釘７本が使用されていた。なお、この桶にはタガは存在しない。

石列（ＳＸ037・ＳＸ038）

調査区の北側に町割の方向と一致する石列が２本認められる。南側のものは、30～50*cm*大の野石が一列に並び、空地を区画するものである。

この石列の北側に３*m*隔てて、幅１*m*の石敷がある。これは道路跡（ＳＳ006）と考えられるが、側溝は検出されていない。同様なものとしては、第１次調査時に検出されたＳＳ001がある。

（遺物）　陶磁器、瓦類、金属製品、木製品、石製品、自然遺物等があるが、その量は他の区に比べると極めて少ない。遺物は洪水時に泥流に呑まれたものが多く、粘質土層中から出土している。

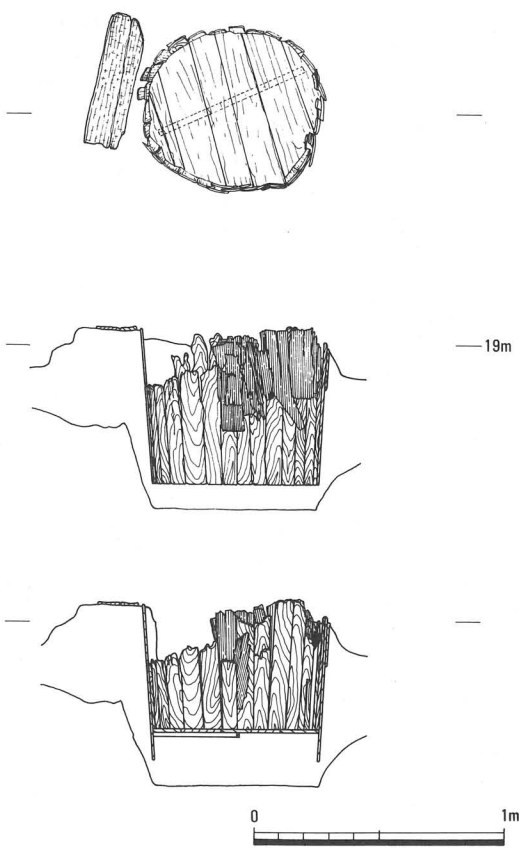
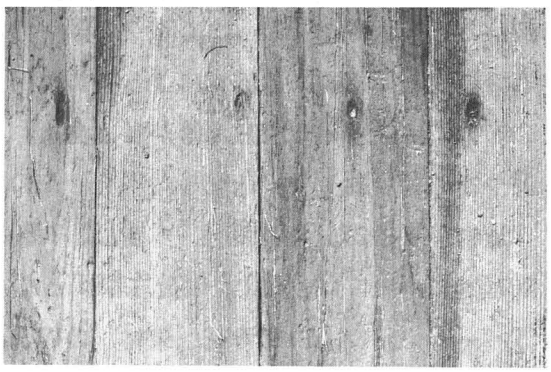


図41　埋設桶（ＳＸ032）実測図



埋設桶（ＳＸ032）の底板と釘

2. 第２遺構面の概要

第１遺構面は調査区の全域で検出できたが、第２遺構面は調査区の上流部のＩＰ区において確認されたに過ぎない。遺構としては建物跡４が存在したものの、部分的にしか認められなかったため、町並の全容を把握するにはいたらなかった。しかし、建物跡の方向と配置は第１遺構面のそれと一致し、同一の町割が施されていたものと考えられる。

なお、遺構面の標高は18.2*m*で、第１遺構面との比高差は80*cm*となる。

この面の埋没時期は、調査区の東側に存在した砂層直下より寛永21年（1644）の文字が記された木札が出土していることより、この年から第１遺構面が埋没した寛文６年（1666）までの間である。

建物跡（ＳＢ031）

ＩＰ区の第１遺構面の建物跡（ＳＢ020）の敷地直下で検出された掘立柱を中心とする建物跡である。間口は6.3間で、梁間５間（総梁行12*m*）、総桁行は現在では14*m*以上あり、ＳＢ020と同規模と推定される。

梁間には柱間寸法2.0*m*で、７個の柱穴が一列検出された。また、この列の1.8*m*奥に、平行して1.8*m*おきに５個の礎石が並ぶ。この２列の柱から庇をもつ建物跡と考えられる。梁間については遺構の遺存状態が悪く、南側において柱列が１*m*幅で２列平行して存在するが、詳細は不明である。外側は掘立柱のみで、柱間寸法は2.5*m*を測る。内側は礎石と掘立柱からなり、礎石は２*m*間隔で並ぶが、柱穴は洪水時の攪乱のため大小７個を確認したに過ぎない。北側には石列が８*m*存在するものの、柱穴は検出されなかった。内部をみると北寄り部分で、桁に平行して長さ９*m*の石列が認められ、これが内部を二分している。この石列の北側には３*m*の正方形の石囲いが存在し、周囲から鉄鍋や鉄釜等の台所用具および鉄塊も数個が出土している。これは第３次調査時に検出された鍛冶屋跡とともに、鉄にかかる産業が盛んであったことを物語っている。

この建物跡の東端には流水により生じた凹地があり、内部には大量の砂が堆積していた。この凹地には鉄製品や陶磁器等が多く含まれ、さらに下層の腐敗土中には濁流で運ばれた木屑や木片等が混じり、前記した木札もこの層で発見されている。

（遺物）陶磁器、金属製品、木製品、石製品が出土している。

陶磁器については、880点の破片がまとまって出土している。中国陶磁の占める割合は17.7パーセントで、白磁青花（染付）の碗、皿、白磁の皿が主体となっている。日本製では美濃、瀬戸の灰釉皿、鉄釉碗が僅かながらも認められる。備前は甕の破片と考えられるものがやはり多く、一部には壺や擂鉢もみられる。土師質は14.0パーセントで、皿が圧倒

図42　第２遺構面ＩＰ・ＩＱ区遺構実測図（第１・２遺構面―赤色―）

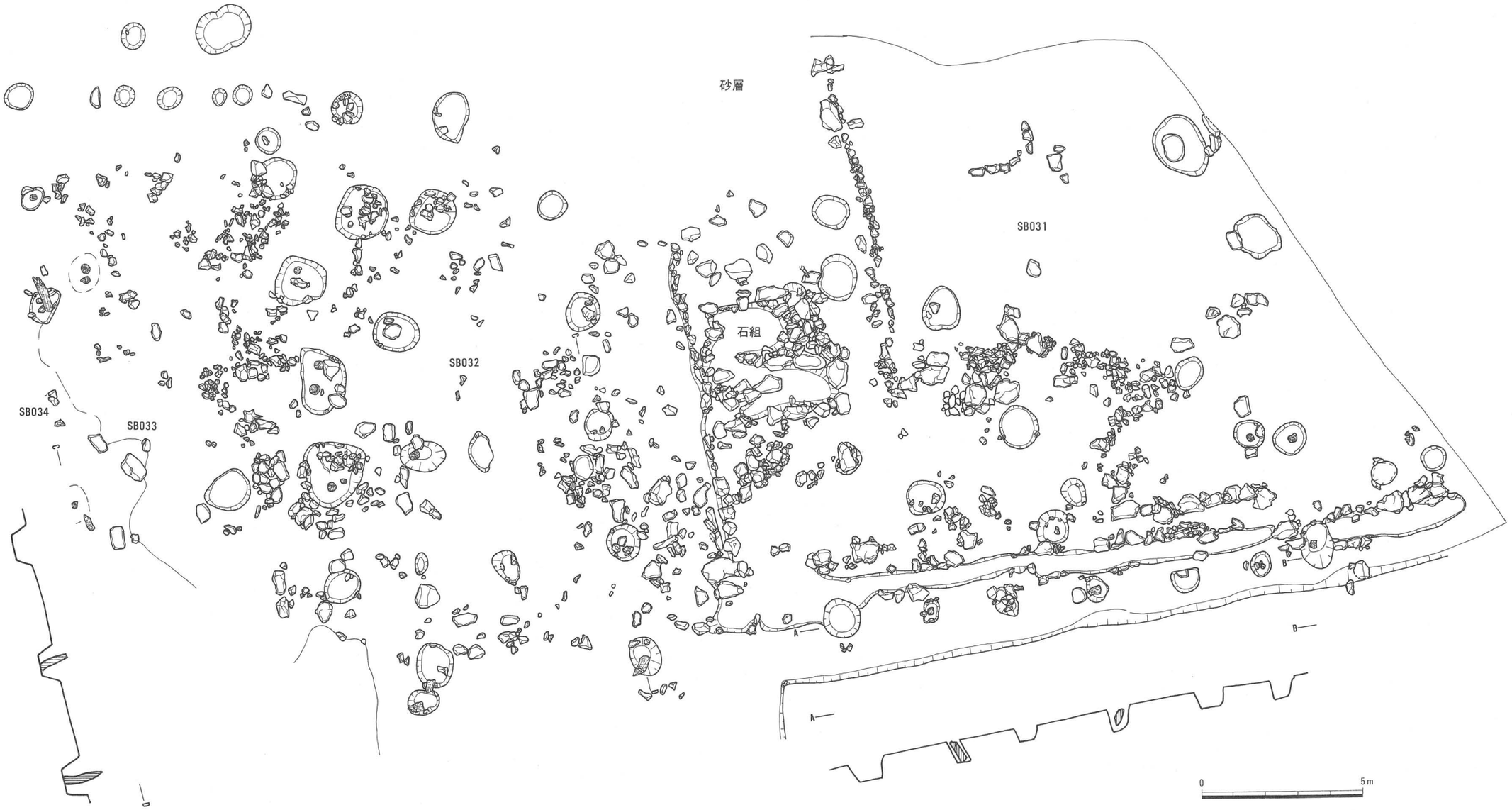


図43　建物跡（ＳＢ031・032・033・034）実測図

的である。この区域において重要なのは全体のなかで唐津が39.3パーセントを占め、伊万里が5パーセントである。こうした傾向は第2遺構面の他の区域でも知られるが、破片数のより多い箇所で認められることは注意される。唐津では皿が碗の3倍強あり、ここでは鉢も確認される。伊万里では皿が碗を上回っている。図44の(1)は鉄釉の皿、(2)は灰釉の皿、(3～19)は唐津の皿、(20～25)は唐津の碗、(26)は唐津の鉢、(27)はぐい呑み、(28～30)は唐津の壺類である。図45の(5)は白磁青花の皿、(1～4、6～8)は唐津で、(9～12)は土師質土器の皿である。

金属製品としては、別表にみるように古銭、煙管、小柄、水滴、紡錘車、釘、毛抜、錠前、鈴、鎌、鉈、鉞、鍋、茶釜、熊手等が出土している。

鉄鍋(図48)は大小のものが4個ある。3個は片口式のもので、半円状の取手を有し、底部には短い脚が3個付く。他の1個は注ぎ口と取手脚は付かない。総て鋳造品であり、底部中央は湯口の痕跡が認められる。小柄(図46)は7個出土している。黄銅製で3本の沈線を施したものや菊、桐の紋を打ち出し、それに金箔を施したものがある。水滴(図46－5)は蓋部しか残存しない。銅の薄板で、中央に受け口、端に注ぎ口が付く。茶釜(6)は鉄鍋と一緒に出土している。胴の最大径27.0cm、高さ10.7cmの鋳造品で、肩部には環状の取手が2個付く。紡錘車(7、8)は2個発見されており、1個は完形品である。

表13　建物跡(SB031・砂層)出土遺物一覧表

	SB031		砂層中
	建物内	石組内	
金属製品	小柄4、銭4(元祐通宝2、洪武通宝1、景祐元宝1)、煙管3、紡錘車2、鎌2、水滴1、鉈1、鉞1、鍋1、錠前1、茶釜1、鈴1	鍋4、小柄3、釘3、古銭2(元祐通宝、祥符通宝)、毛抜1、鉈1	古銭1、鏃1、熊手1、鍋1、釘1
石製品	碁石状石4、砥石4、硯1、茶臼1、手水鉢1	硯2	
木製品	軸状木製品1、椀1		木札(寛永廿一年銘)1、下駄2、桶底2、椀2
その他	瓦類多量、獣骨2、貝類2、モモの核1、布切れ1	瓦類少量、サルボウガイ1、スズキの鰓蓋骨1	瓦類少量、種子1

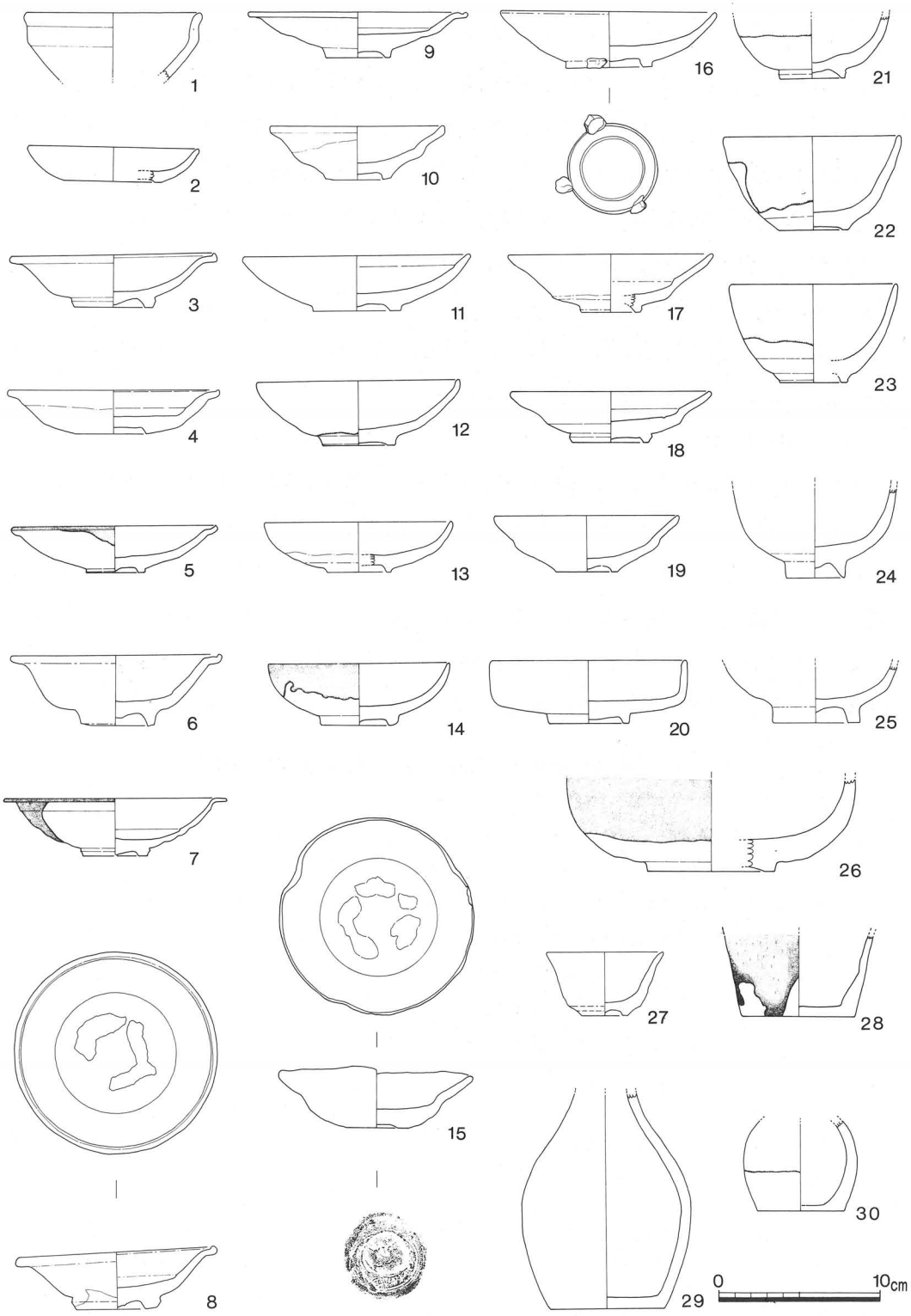


図44　建物跡（ＳＢ031）出土遺物実測図（Ⅰ）

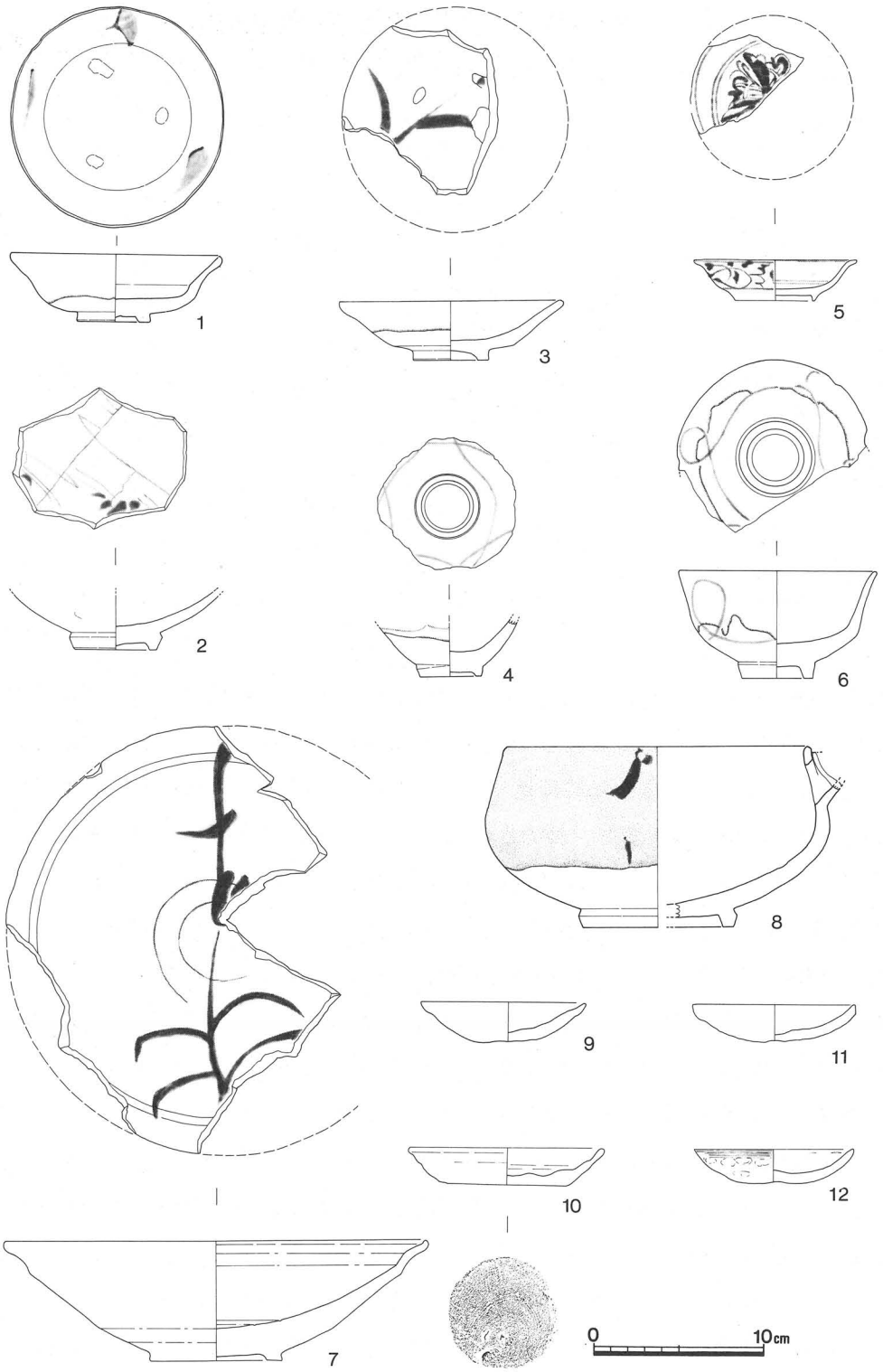


図45　建物跡（ＳＢ031）出土遺物実測図（Ⅱ）

表14　建物跡（SB031）出土陶磁器数量表

名称（器種）	破片数	名称（器種）	破片数	名称（器種）	破片数
青磁（碗）	5	南蛮系（壷）	1	備前（壷）	33
（皿）	1	（鉢）	2	（甕）	72
（鉢）		（その他）	4	（鉢）	2
（盤）		計	7	（擂鉢）	10
（香炉）	1	灰釉（皿）	18	（その他）	22
（その他）	2	（鉢）		計	139
計	9	（香炉）		唐津（碗）	83
白磁（碗）	1	（その他）	3	（皿）	225
（皿）	48	計	21	（鉢）	36
（坏）	3	鉄釉（碗）	9	（香炉）	
（その他）	1	（壷）	1	（その他）	31
計	53	（皿）		計	375
染付（碗）	51	（その他）	1	伊万里（碗）	15
（皿）	40	計	11	（皿）	25
（鉢）		土師質（皿）	144	（鉢）	
（坏）		（土釜）	18	（その他）	4
（その他）	8	（その他）	1	計	44
計	99	計	163	その他の陶磁器	46
				総計	967

鉄製で、軸は棒状となり、中央に皿状の円板が付く。錠前（図46－9）は幅7.9cm、高さ3.2cmの黄銅製で、部分的に腐食している。施錠された状態で発見された。鎌(10)は草刈用で、比較的刃は薄く、茎の先端は折りかえしてある。毛抜（図48－1）は完形品で、銅品である。長さは8.4cmを測り、弾力性に富む。鉈（3）は大型のものである。刃は鋭利であるが、大部分を欠く。茎尻は錆化が著しく、目釘穴の存在は判らない。

木製品には、軸状のもの（図46－11）が出土している。現在長は13cmであるが、一つの端は破損している。太さは径6mm、他方は7mm。断面は正円形を呈す。外面は黒色漆が塗布されているが、木口には漆は認められない。文様としては黒地の上に5重の同心円文（外径は1.4cmを測る）が鮮やかな黄色漆で描かれている。使途は不明。

石製品には碁石、砥石、硯、茶臼、手水鉢が出土している。碁石は小さな円礫で、黒色のものが数個認められる。硯（15）は凝灰岩製で、長方体の通常品である。大きさはほぼ同じで、長さ12cm、幅5cmを測る。かなり使用されており、海部中央部には大きな窪みが残る。砥石（図46－16～22）は荒砥と仕上砥の2種類があり、大きさはいろいろである。

砂層中からは陶磁器、瓦類、金属製品、木製品、自然遺物等が出土している。

陶磁器の総数は48片である。破片数は少量であるが、他の区域を含め第1遺構面、第2遺構面の層位の組成と大差はない。中国陶磁青花だけで12.5パーセント、日本製は土師質土器が3点、鉄釉碗1点、美濃の志野1点、備前の甕片が4点、伊万里碗が2点、やはり唐

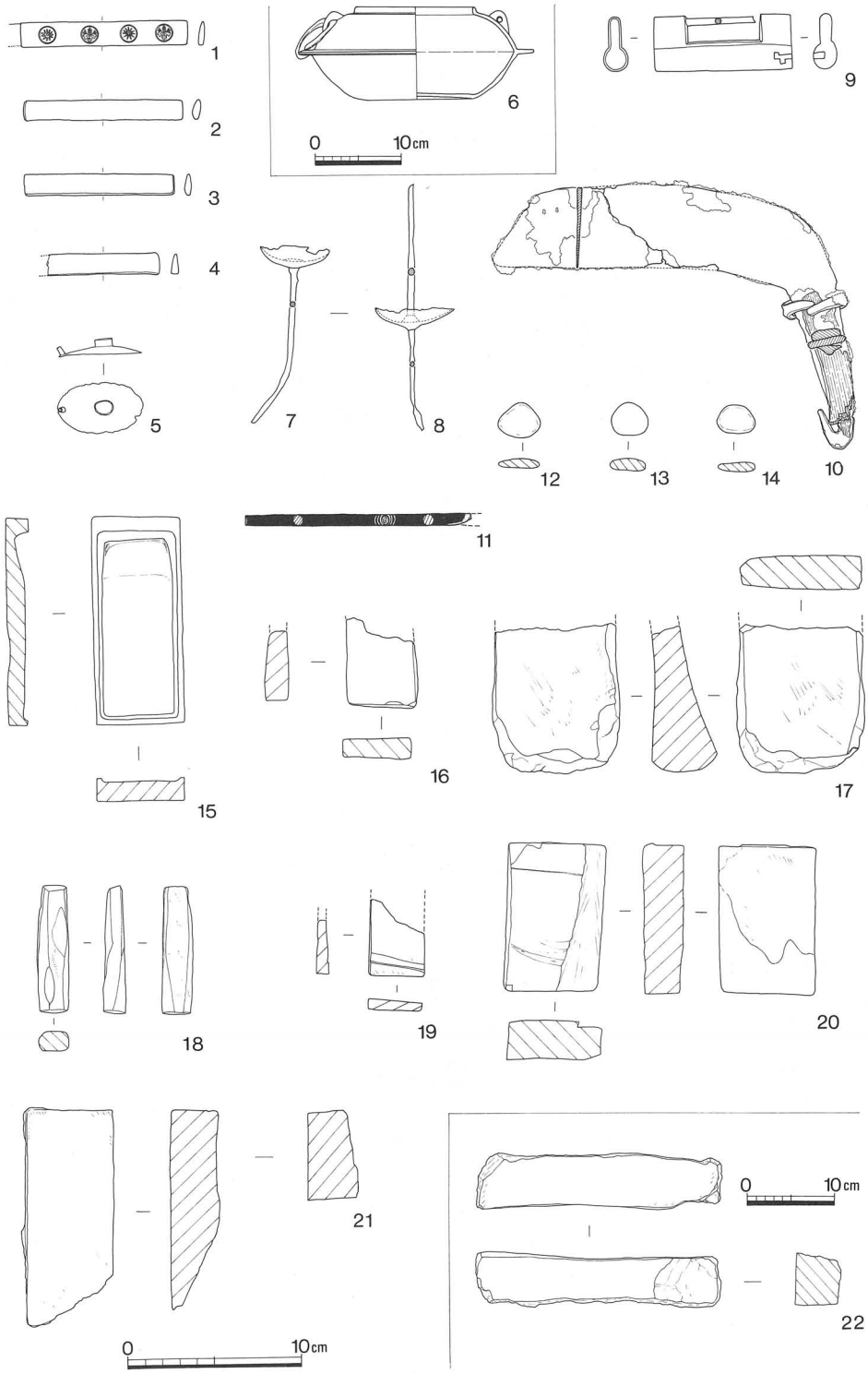


図46　建物跡（ＳＢ031）出土遺物実測図（Ⅲ）

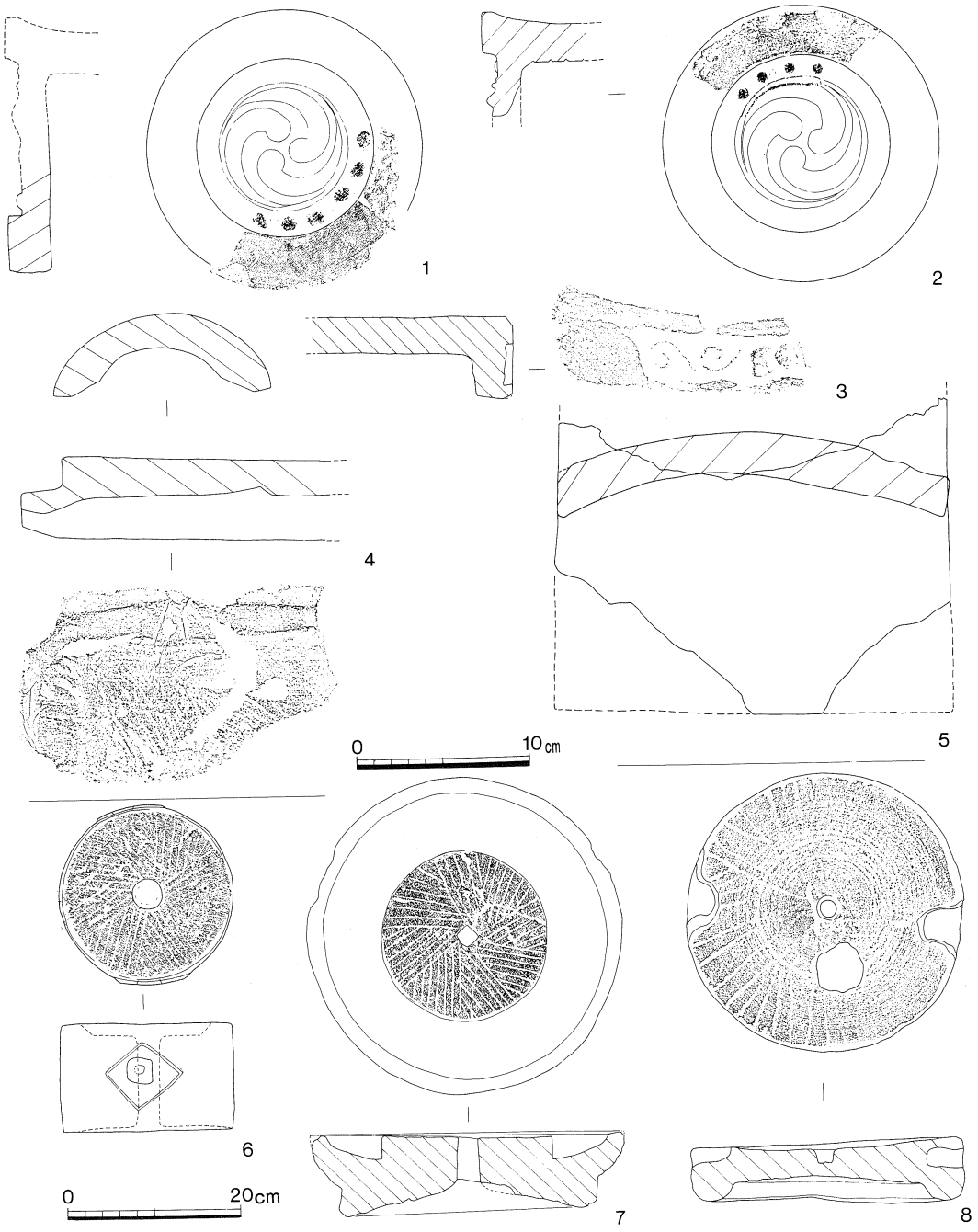


図47　建物跡（ＳＢ031）出土遺物実測図（Ⅳ）

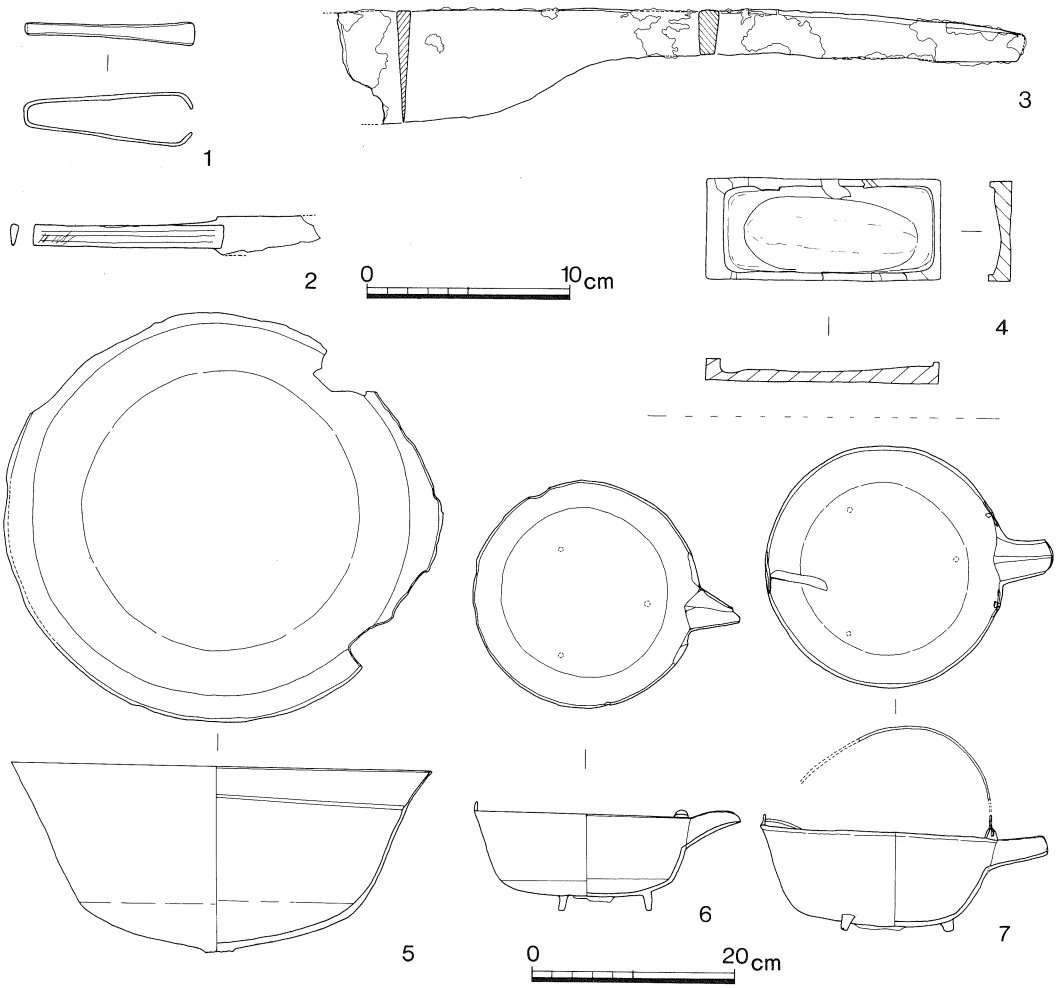


図48　建物跡（ＳＢ031）出土遺物実測図（Ⅴ）

津が多く、31点の64.6パーセントを占めている。図49の（1、3～8）は唐津で、(2)は土師質土器に分類しているが、瓦質のものである。(9)は土師質土器の皿である。

金属製品には鏃、釘、古銭、鍋、熊手が各1出土している。鏃(10)は鉄製で、茎のある全長10cmの比較的細身のものである。熊手(11)は三方に大きく拡がる長さ8cmの爪をもつ。柄は12cmで、端は爪と逆方向に曲げている。

木製品には椀2、桶底2、下駄2、木片等がある。漆塗椀高台(12)は径6.8cm、現在高2.2cm、裏面刳込みの深さ1.4cmを測る。体部の内外面ともに赤色漆が塗布されているが、高台裏面のみは黒色漆である点が注目される。さらに、高台の刳込み面の中央に赤色漆で「仲」の字が書かれ、その周囲には僅かであるが、断文が認められる。塗膜の観察からいずれの面も塗立て仕上げと考えられる。下駄(13)は長さ21cm（7寸）、幅7.5cm（2.5寸）

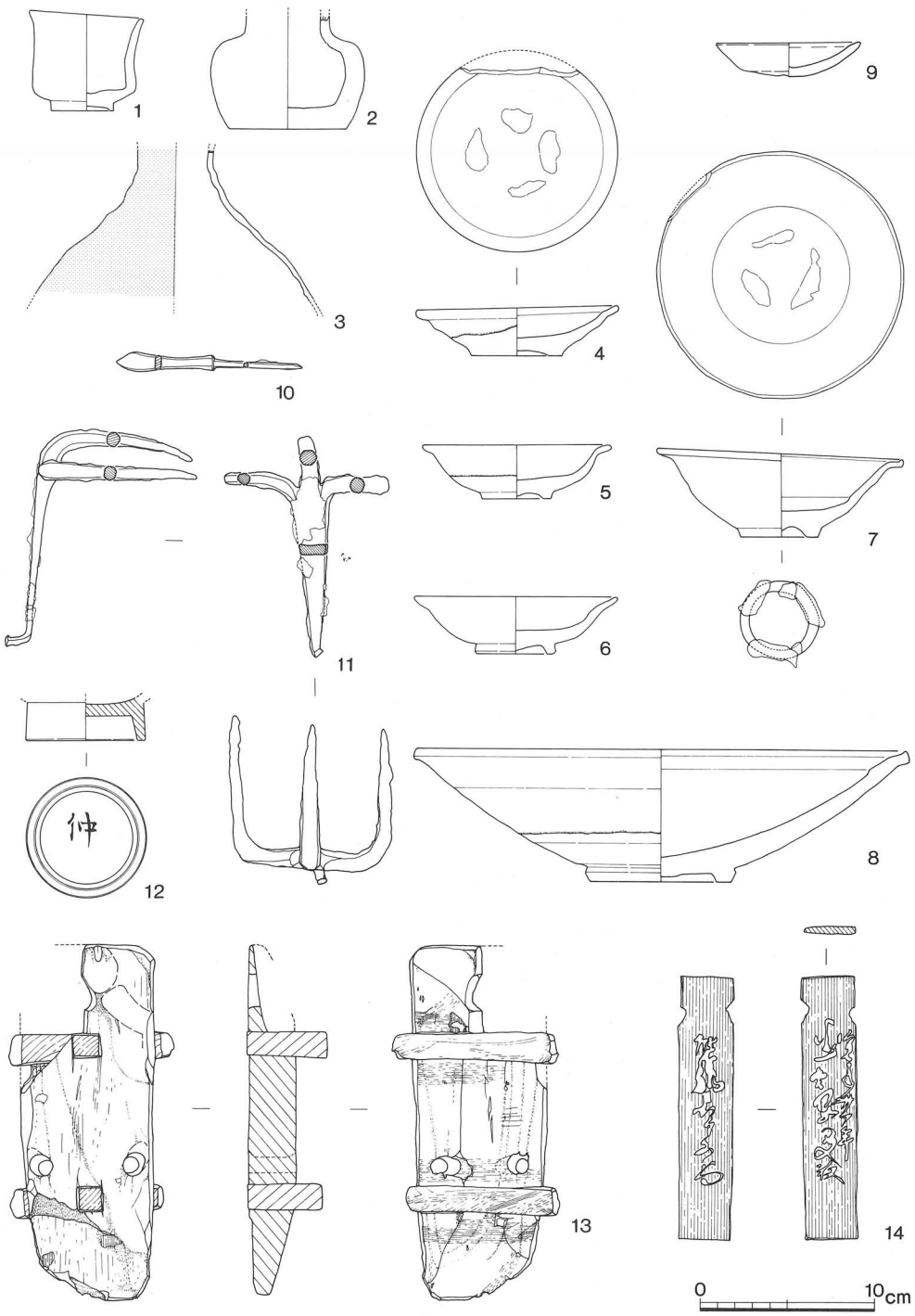


図49　ＩＰ・ＩＱ区砂層出土遺物実測図

物で、成人男子の左足用の普段履である。歯は差し歯で、柄は1本つく。かなり使用され、歯は摩耗している。木札(14)は長さ15cm、幅3cm、厚さ0.4cmの短冊状の薄い杉板で、上方の二箇所に切れ込みが残り、荷札として使用されたと推定される。両面に墨書が認められ、表面の右側には「寛永廿一年」(1644)が、中央には「〔　〕収五□文□」が、さらに裏面中央には「能義郡石本又右衛門」が書かれている。なお、「石本」姓は現在広瀬町内にはほとんどない。

その他のものとしては少量の瓦片と種子1がある。

建物跡（SB032）

SB031の北側に存在する掘立柱建物跡である。総梁行5.0m、桁行5間(総桁行14.5m)の東西に細長いもので、柱穴は16穴確認できた。大きさは径50～100cm、柱痕は4穴に残り、柱間寸法は2.9mを測る。また、内部には北寄りに3穴あるが、東南隅のものは洪水時の攪乱のため検出できなかった。

(遺物) 陶磁器、瓦類、金属製品、木製品、自然遺物が出土している。

中国製陶磁の全体に占める割合は16.6パーセントで、白磁青花が多く、白磁は皿だけである。この区域では備前の甕の破片が多いので、破片数の上で占める割合が大きくなっている。碗、皿では唐津が多く、伊万里は碗の破片が確認される。

木製品には耳掻と下駄が各1ある。耳掻（図50－20）は長さ8.4cmの小さいもので、そ

表15　第2遺構面ⅠP・ⅠQ区砂層出土陶磁器等数量表

名称（器種）	破片数	名称（器種）	破片数	名称（器種）	破片数
青磁（碗）		南蛮系（壷）		備前（壺）	
（皿）		（鉢）		（甕）	4
（鉢）		（その他）		（鉢）	
（盤）			計	（擂鉢）	
（香炉）		灰釉（皿）		（その他）	
（その他）		（鉢）			計 4
	計	（香炉）		唐津（碗）	1
白磁（碗）		（その他）		（皿）	16
（皿）			計	（鉢）	5
（坏）		鉄釉（碗）	1	（香炉）	
（その他）		（壷）		（その他）	9
	計	（皿）			計 31
染付（碗）	3	（その他）		伊万里（碗）	2
（皿）	3		計 1	（皿）	
（鉢）		土師質（皿）	1	（鉢）	
（坏）		（土釜）	1	（その他）	
（その他）		（その他）	1		計 2
	計 6		計 3	その他の陶磁器	1
				総計	48

の端は僅かに屈曲している。下駄(21)は長さ21.6cm(7.2寸)、幅9.0cm（3寸）で、成人男子の普段履の右足用である。歯は欠くが、台木の前方にはほぞ穴が2個、後方には1個認められる。

建物跡（SB033）

SB032に隣接する掘立柱建物跡である。北側は破壊され、全体の規模は把握できないが、総梁行5.0m、桁行4間以上（総桁行7m）の東西に細長いもので、柱穴は8穴確認した。大きさは径40～100cmで、柱痕は6穴に残り、柱間寸法は2.0mを測る。なお、東側には径約40cmの柱穴が6個一列に並ぶ。しかし、これは建物との方向が合わず、一連のものかどうかは不明である。

（遺物）陶磁器、瓦類、金属製品、木製品、自然遺物が出土している。

陶磁器においては中国製の割合は16パーセントであり、そのうち白磁青花（染付）の碗、皿が多い。日本製では唐津の碗、皿が圧倒的に多く、次いで土師質皿、伊万里の碗、皿である。少量ながら美濃、瀬戸の灰釉皿、鉄釉碗も認められる。唐津では皿の方が碗の3倍強、伊万里では碗が皿の4倍弱となっている。（図51－1）は中国製の白磁青花のやや大きな皿である。少し赤味を帯びた厚手のもので、高台内には粗い砂粒が付着しており、スワトー・ウエアと呼ばれる様式に属するものである。（3～6）は唐津で、（8）は白磁青花である。（6、7）は銹絵で、草文が施されている。

表16　建物跡（SB032）出土陶磁器等数量表

名称（器種）	破片数	名称（器種）	破片数	名称（器種）	破片数
青磁（碗）		南蛮系（壺）		備前（壺）	7
（皿）		（鉢）		（甕）	26
（鉢）		（その他）		（鉢）	1
（盤）			計	（擂鉢）	2
（香炉）		灰釉（皿）	1	（その他）	3
（その他）		（鉢）			計 39
	計	（香炉）		唐津（碗）	17
白磁（碗）		（その他）		（皿）	17
（皿）	6		計 1	（鉢）	1
（坏）		鉄釉（碗）	1	（香炉）	
（その他）		（壺）	1	（その他）	
	計 6	（皿）			計 35
染付（碗）	3	（その他）	1	伊万里（碗）	4
（皿）	6		計 3	（皿）	
（鉢）	2	土師質（皿）	3	（鉢）	
（坏）	1	（土釜）	1	（その他）	
（その他）		（その他）			計 4
	計 12		計 4	その他の陶磁器	4
				総計	108

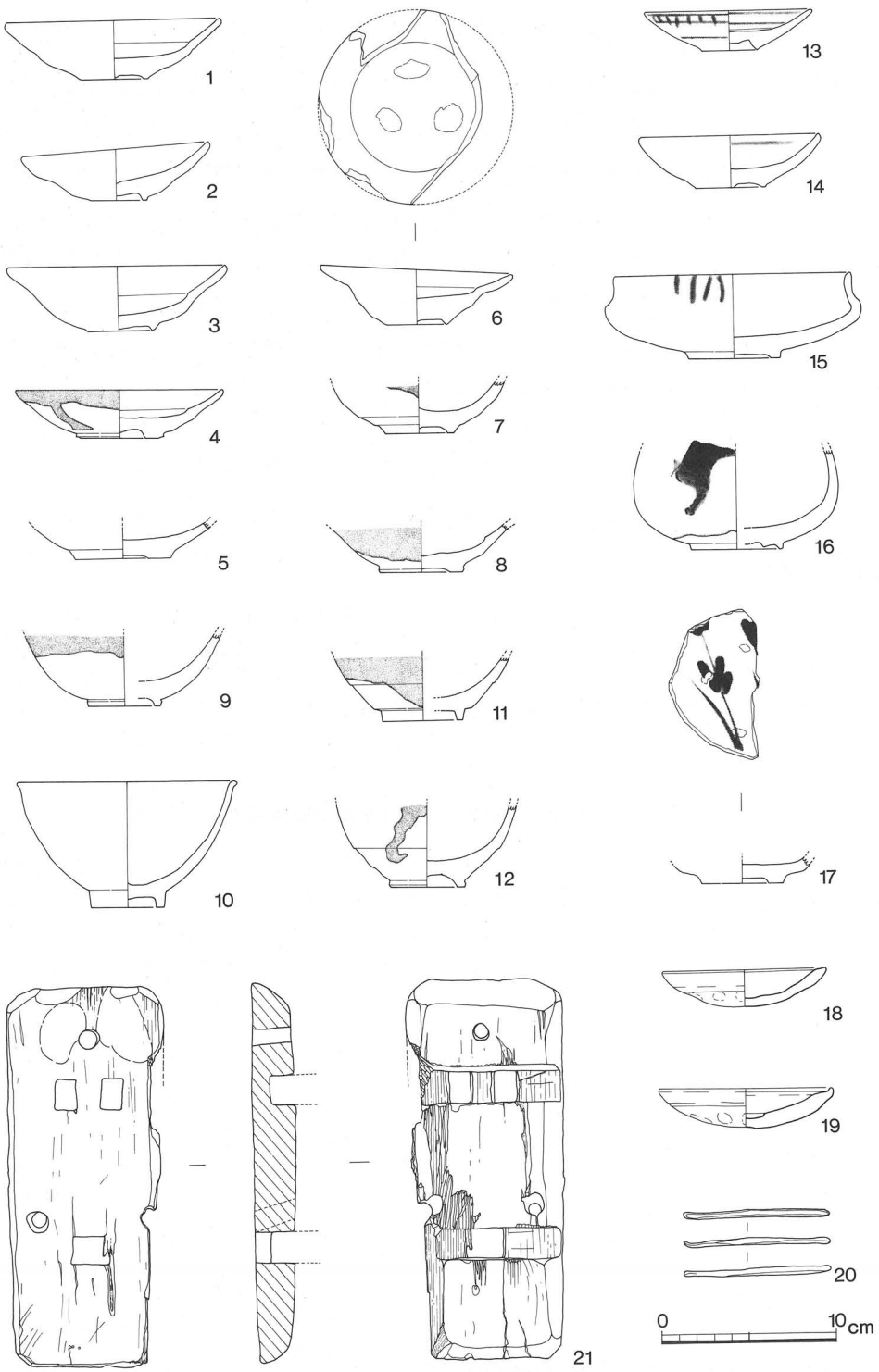


図50　建物跡（ＳＢ032）出土遺物実測図

金属製品としては包丁1、煙管1（雁首）、座金1、小柄1、古銭2（熙寧元宝1）、鉄滓（少量）が出土している。小柄(9)は銅製で長さ9.7cm、幅1.5cmを測り、地板に菊の紋を三個打ち出している。包丁(10)は刃部の先端を欠く。幅は3.0cmで、刃部の厚さは0.2cmと薄く、菜切包丁と考えられる。

木製品には刀の鞘(11)がある。長さ17cm、幅3.5cm、厚さ1.0cmを測る。片面には造りの短刀が挿入されたとみられる幅3.5cm、長さ16.5cm、深さ0.3cmの刳込みが内面に認められる。鯉口と鞘尻は一文字に加工され、外面の2辺の木端には面取加工が施され、断面は平偏な蒲鉾形を示す。また、外面の鞘尻付近の一部を除き、黒色漆が認められる。この塗膜の表面は他の漆器類と比較して光沢があることなどから、朧色磨きの技法が施されたものとも推定される。ただ、漆の塗膜は木質部から遊離し、薄い板状を呈す。木質の遺存状態は比較的良好で、樹種は朴材であると思われる。なお、布や紙を着せる下地加工は認められない。

その他の出土品としては、少量の瓦類と自然遺物のアワビ2個が発見されている。

建物跡（SB034）

SB033の北側に隣接する掘立柱建物跡である。洪水時に床面がかなり破壊されていたので、柱穴は南側の桁行部分において3個を確認したにすぎない。その大きさは40～60cm大で、内部に柱痕を残す。柱間寸法は2.0～2.2mを測る。

表17　建物跡（SB033）出土陶磁器等数量表

名称（器種）	破片数	名称（器種）	破片数	名称（器種）	破片数
青磁（碗）	1	南蛮系（壺）		備前（壺）	2
（皿）		（鉢）	1	（甕）	9
（鉢）		（その他）		（鉢）	
（盤）		計	1	（擂鉢）	
（香炉）		灰釉（皿）	4	（その他）	3
（その他）		（鉢）		計	14
計	1	（香炉）		唐津（碗）	22
白磁（碗）	1	（その他）		（皿）	74
（皿）	7	計	4	（鉢）	5
（坏）	1	鉄釉（碗）	3	（香炉）	
（その他）		（壺）		（その他）	16
計	9	（皿）		計	117
染付（碗）	11	（その他）		伊万里（碗）	15
（皿）	12	計	3	（皿）	4
（鉢）	1	土師質（皿）	44	（鉢）	
（坏）	1	（土釜）		（その他）	6
（その他）	1	（その他）		計	25
計	26	計	44	その他の陶磁器	4
				総計	248

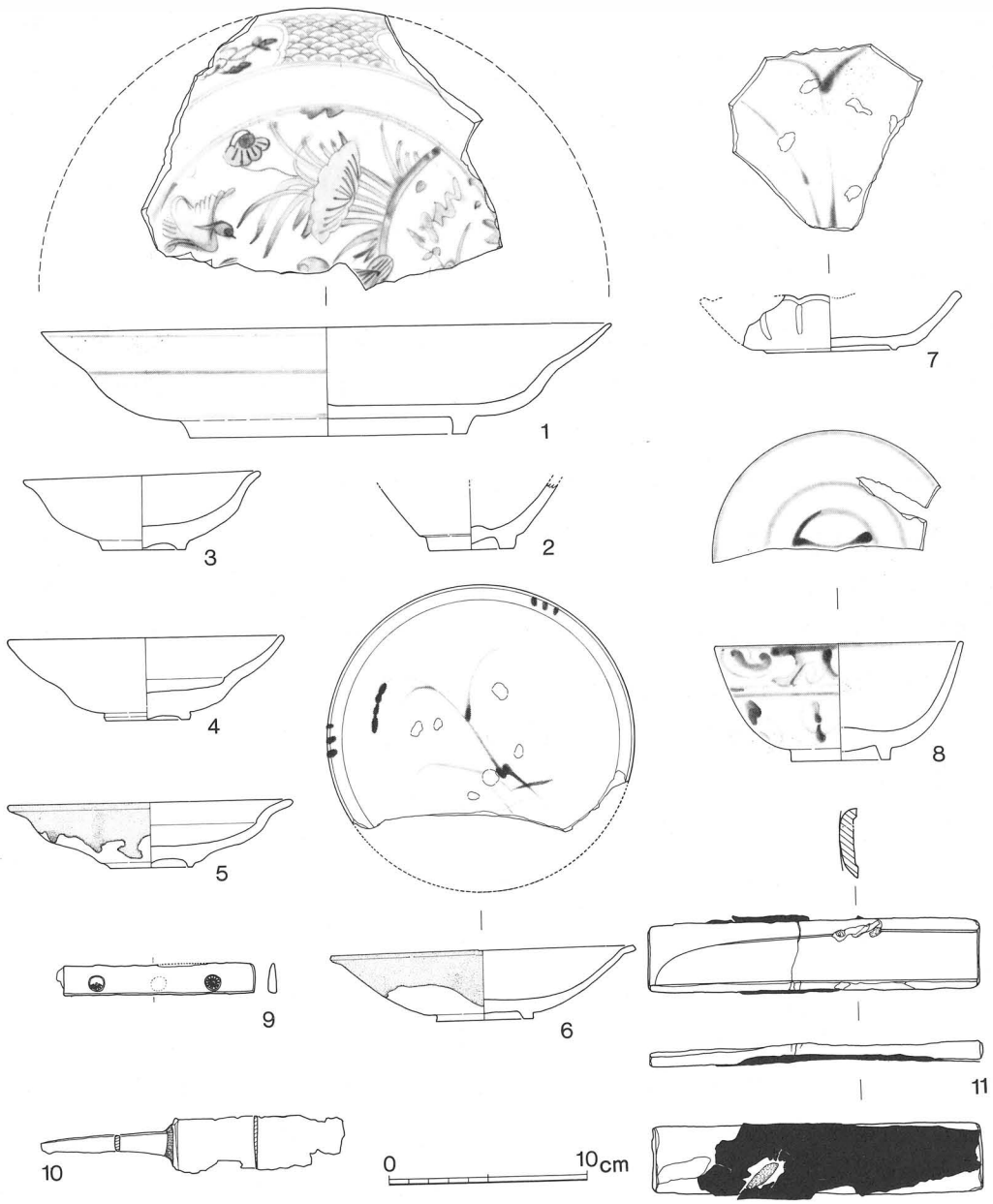


図51　建物跡（ＳＢ033）出土遺物実測図

3. 第3遺構面の概要

第3遺構面は調査区の北端にあたるＦＵ区に存在する。同区の上層にある第1遺構面では小路に伴う石列（ＳＸ037、ＳＸ038）のみを検出したが、この面では土壙など多くの遺構が認められた。土壙とピットが大部分を占め、その数は両者とも16個で、北側に隣接する第6次調査区（昭和55年度）のものと同様である。

なお、二つの遺構面の比高差は50cmで、第3遺構面の標高は18.0mである。

土壙（ＳＫ174～ＳＫ190）

土壙は不整形のものが多く、規模も大小まちまちである。大きいものとしてはＳＫ184（長径6.0m×短径3.7m、深さ0.6m）がある。

陶磁器には完形品は少なく、金属製品や石製品なども共伴しており、また、炭化物や焼土も混在している。これらの点からすると、遺構面にある多数の土壙は火事場整理時の処理用の穴と考えられる。

出土品には多量の陶磁器と石製品（硯2、砥石5）、金属製品（金具1、包丁1、匙1、鉄鏃1、銭12）、自然遺物（獣骨2、貝類2）等が出土している（表18参照）。

飾り金具（図53－1、ＳＫ177出土）は銅製品で、現在長3.45cm、最大幅1.2cmを測る。これは薄い板金を打ち出して作られたものである。包丁（図53－2、ＳＫ183）は現在長17.6cm（刃部13.6cm）、幅3.3cm、刃部最大厚0.15cmを測り、菜切り包丁と思われる。匙（図53－3、ＳＫ179）は銅製品で、全長17.0cmを測る。先端部はうすく延ばして作られたものである。

次に陶磁器であるが、出土品の多いＳＫ184を中心に記述する。

中国陶磁の占める割合が23.8パーセントと高く、伊万里は検出されず、土師質土器に分類したものの中に土鍋の類が多く出土しているのが注意される。

図54の（1・3～17）は唐津の碗、皿、壺である。(4)と(17)は絵唐津。（1）は天目茶碗形の口縁近くに草文が描かれている。(17)は輪花形の外面にも錆絵が見られ、縁に燈明皿に使ったと思われる痕跡がある。（7）の碗は見込みと外面の一部に漆の痕跡がある。(14)は長石の透明釉の上に黄褐色の鉄釉をかけ、底部に稲籾の様な目跡が一面に見られる。(15)は高台内に十字文が篦で描かれる。（5）は胎土が砂質で、黒褐色の釉の所々にナマコ釉の白濁したものが認められ、高取など九州の他の窯の製品と考えられる。

図55の（1・2）は瀬戸美濃の鉄釉天目碗。（2）の下半には鉄錆が塗ってある。（3）は美濃の灰釉皿。（4～9）は唐津焼の皿・鉢・盤。（4）の高台内には漆で十字文が描かれ

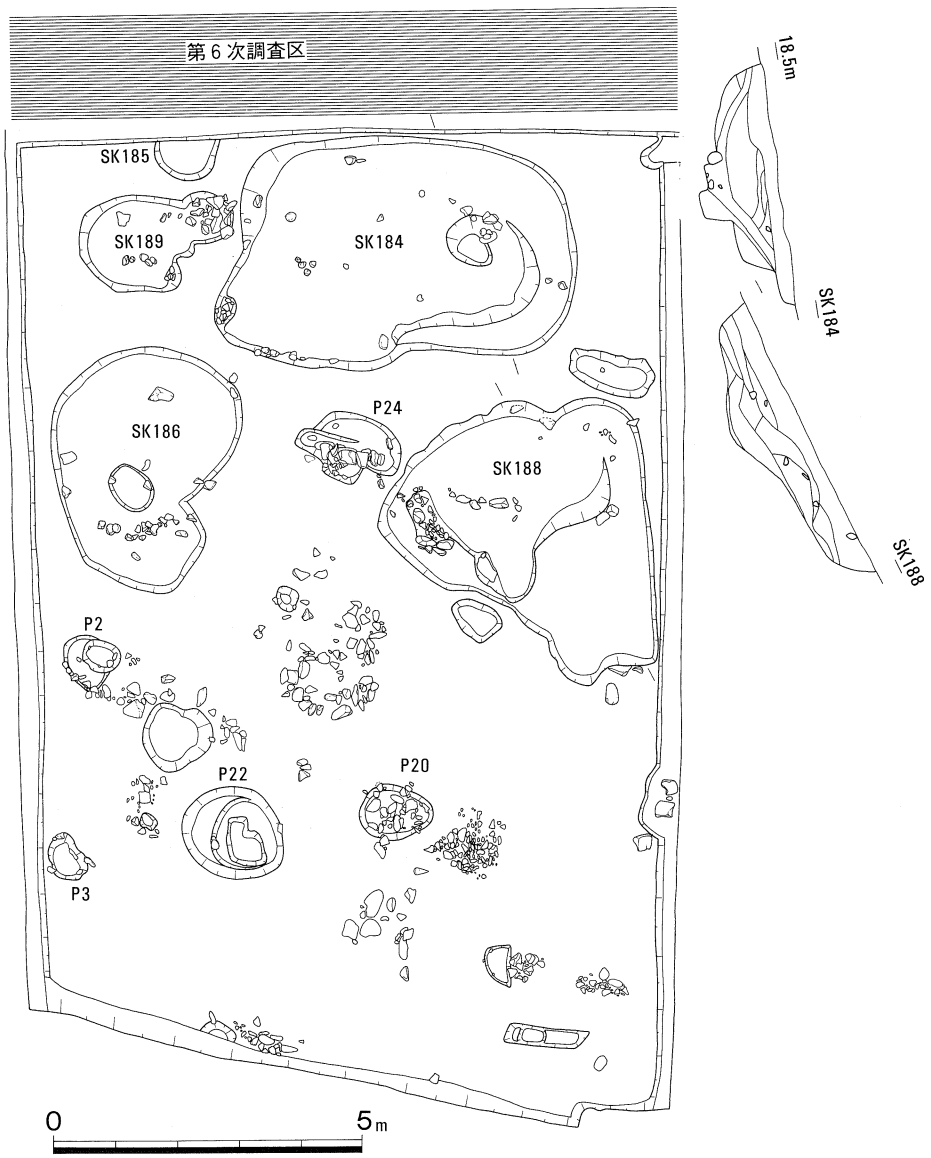


図52　第３遺構面ＦＵ区遺構実測図

る。(5)は口唇に銹絵がある。(6)は鉄分の多い暗褐色の胎土。(9)は口唇部平坦面以外に暗黄緑色釉がかかる。(10・11)は南蛮系の焼締め陶。(11)は非常に薄作りの甕で、内面に叩きの痕跡が顕著。薄い灰黄緑の釉が内外面にかかる。(12～16)は備前。(16)は薄灰茶色で器表に小さな紫褐色の斑点が多く見られる。

表18　第3遺構面における主要出土品

土壙(SK)	出　　土　　品(陶磁器を除く)
175	釘1
177	金具1、るつぼ1
178	獣骨1
179	匙1、銭1(開元通宝)、耳かき1、硯1、砥石1、獣骨1、
181	釘1
182	釘1、銭5(元禧通宝、元祐通宝2、聖宋元宝)
183	包丁1、貝類(巻貝)1
184	鉄鏃1、釘3、銭2(元符通宝、皇宋通宝)、小柄1、硯1、砥石3、貝類1、獣骨1、木片1
186	釘1、銭2
187	釘1
188	釘3、銭2(元祐通宝1)、砥石1

図56の(1)は中国製の白磁青花で、内外面に円圏が回る。見込みは輪状に釉はぎが見られる。(2)は青磁の稜花皿。(3)は白磁の輪花皿。見込みは輪状に釉はぎで、高台内は無釉。釉は細かい貫入が多い。(4)は青磁の線描き連弁文碗。(5～12)は土師質皿。(5・6)は

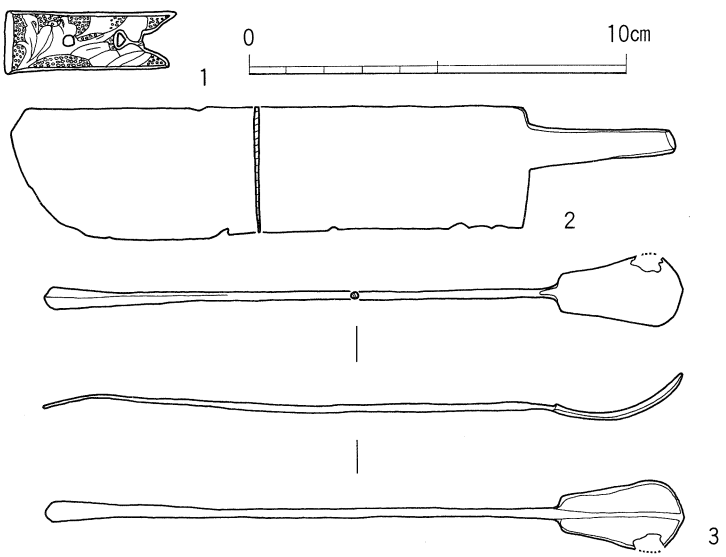


図53　第3遺構面出土金属製品実測図

表19　土壙（SK184）出土陶磁器等数量表

名称（器種）	破片数	名称（器種）	破片数	名称（器種）	破片数
青磁（碗）	5	南蛮系（壺）	5	備前（壷）	20
（皿）	2	（鉢）	2	（甕）	3
（鉢）		（その他）	1	（徳利）	1
（盤）		計	8	（擂鉢）	7
（香炉）				（その他）	10
（その他）	1	灰釉（皿）	14	計	41
計	8	（鉢）			
		（香炉）		唐津（碗）	23
白磁（碗）		（その他）	1	（皿）	90
（皿）	42	計	15	（鉢）	6
（坏）				（壺）	2
（その他）		鉄釉（碗）	4	（その他）	1
計	42	（壺）		計	146
		（皿）			
染付（碗）	11	（その他）	2	伊万里（碗）	
（皿）	25	計	6	（皿）	
（鉢）				（鉢）	
（坏）	5	土師質（皿）	74	（その他）	
（その他）		（土釜）	17	計	
計	41	（その他）	3		
		計	94	その他の陶磁器	12
				総計	413

口唇部をつまみ上げて、内側に条痕がわずかに認められる。(11) は口縁外面に平坦面をもち、きれいなナデで調整される肉厚のもの。(12)は糸切り離しによるやや肉厚のもの。（5～10）は燈明皿として使用された痕跡がある。(13・16)は瓦質の土鍋。(13)は口縁部に穴のあくもの。

埋設桶（SX030）の検出風景

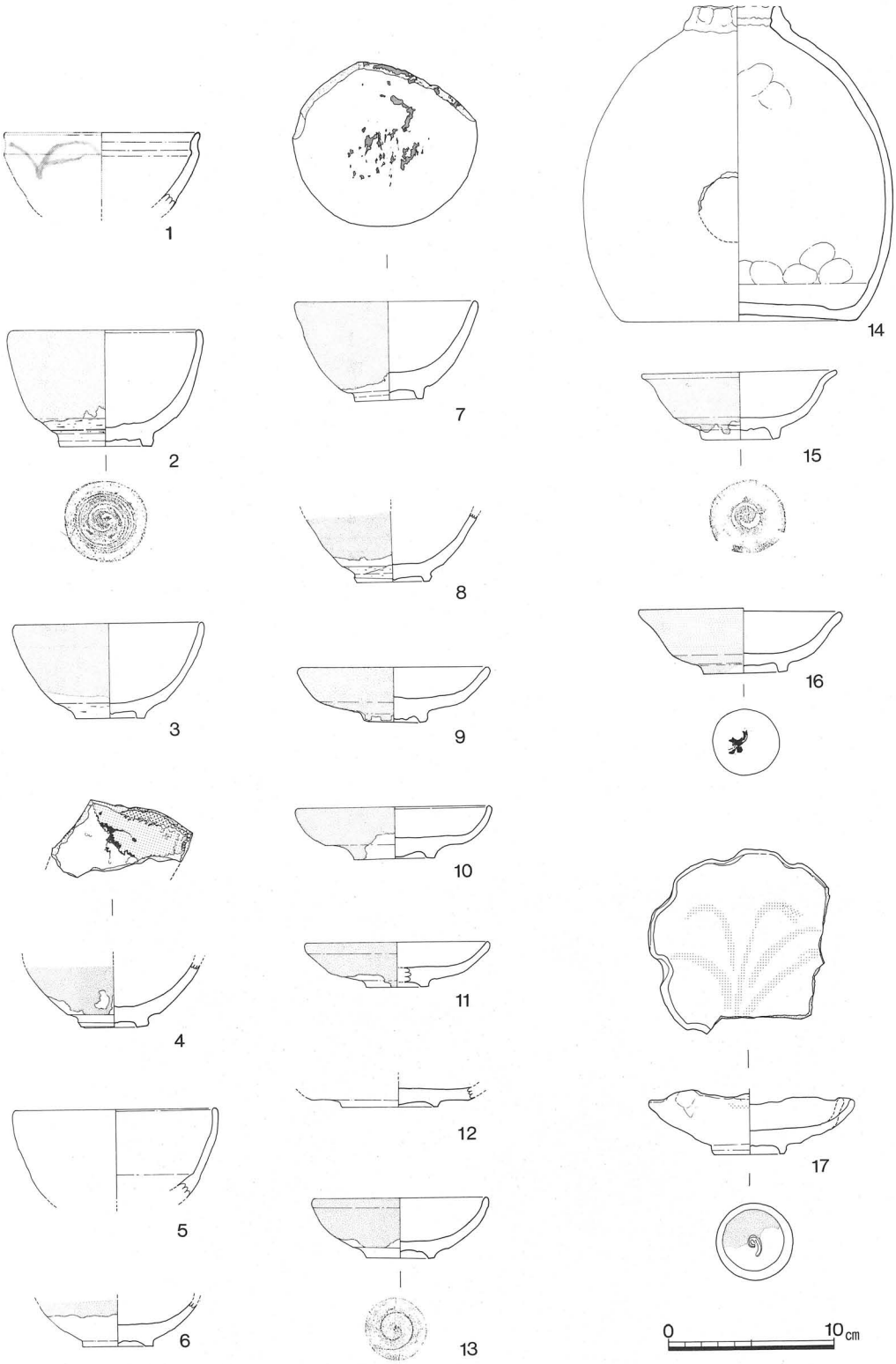


図54　土壙（SK184）出土陶磁器実測図（Ⅰ）

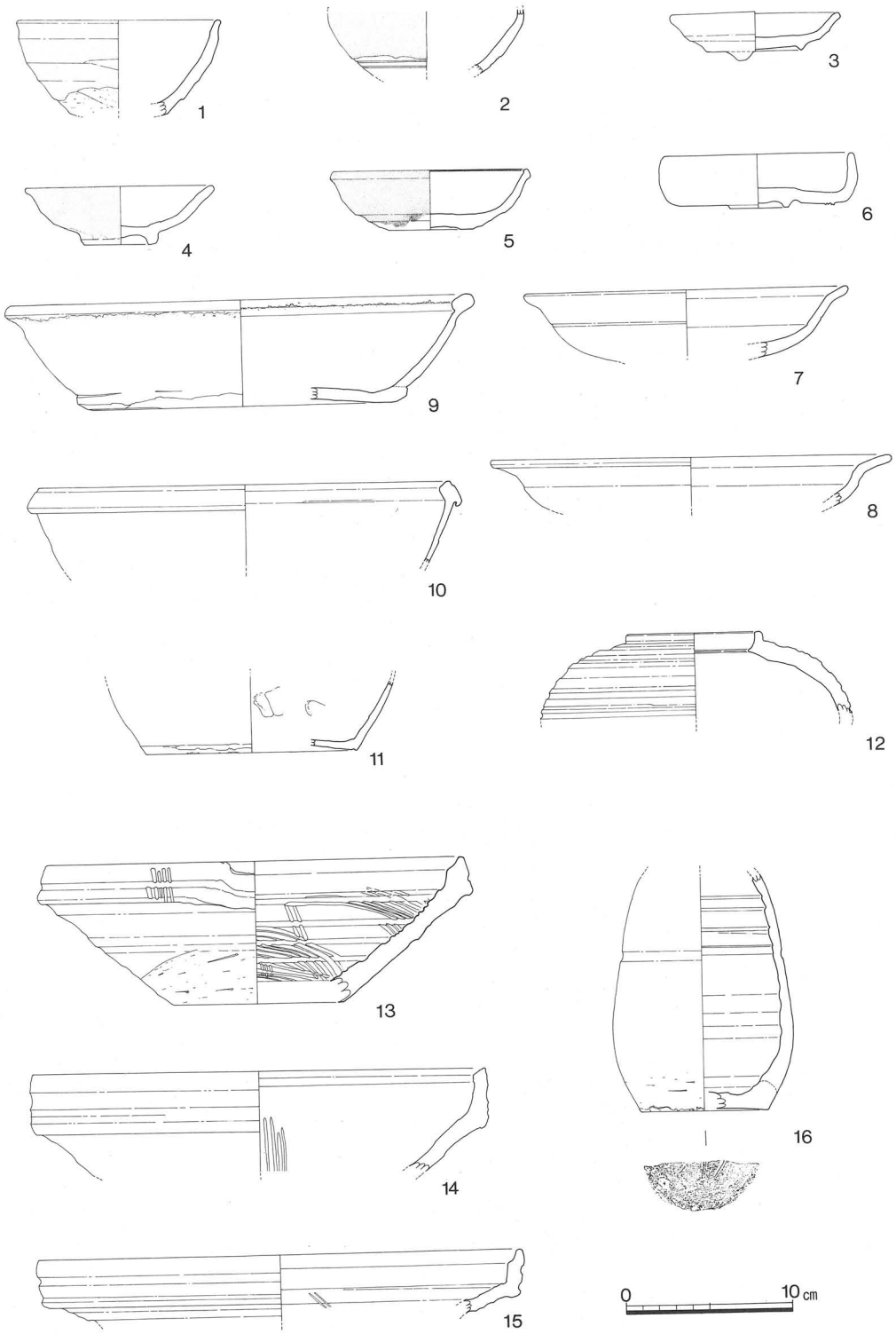


図　55　土壙（SK184）出土陶磁器実測図（Ⅱ）

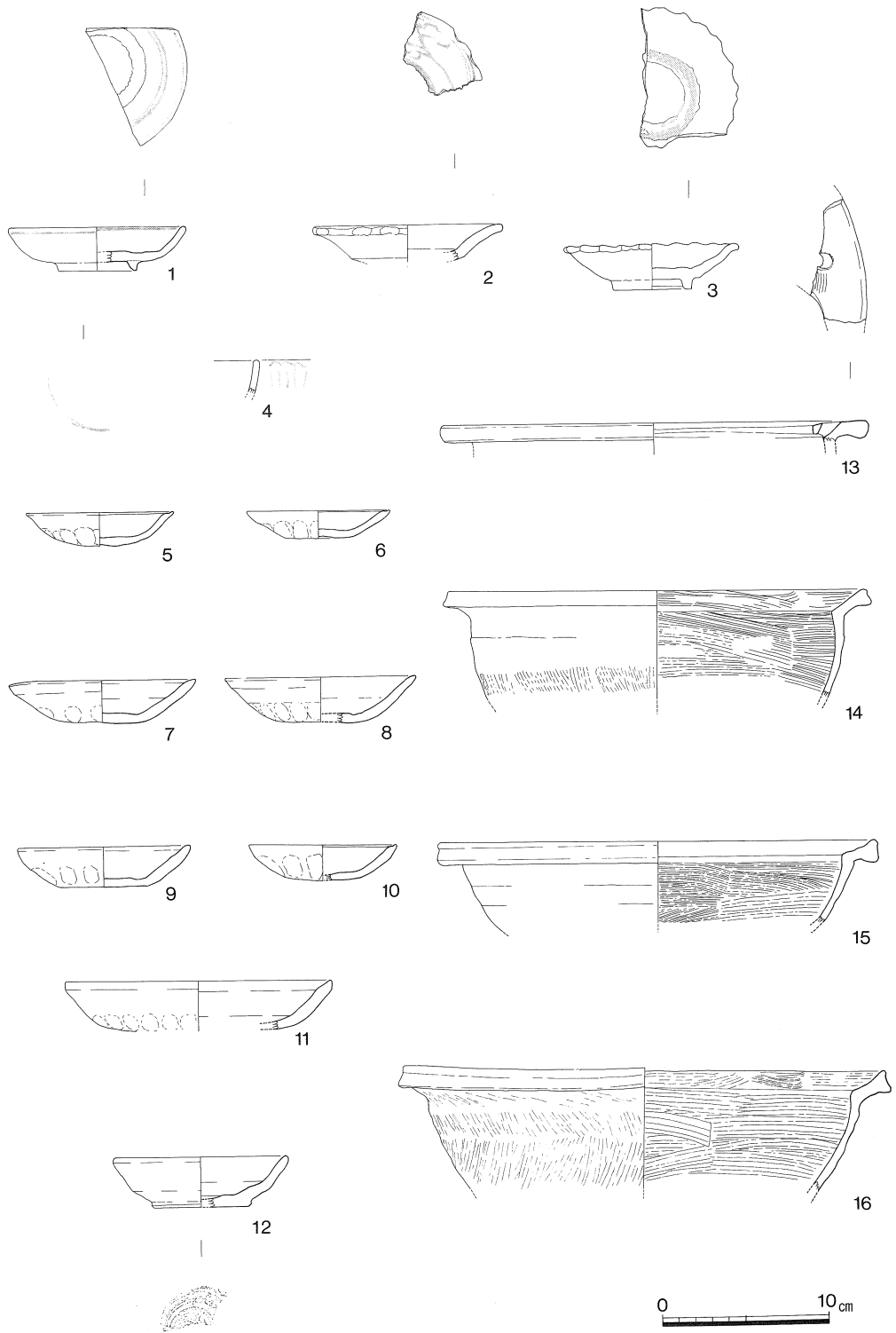


図56　土壙（SK184）出土陶磁器・土師質土器等実測図（Ⅲ）

4. 第４遺構面の概要

この面は調査区北側のＦＴ区を中心に、南北30mの範囲に存在する。遺構としては井戸跡、建物跡、石列各１とピット60および土壙69を検出した。なお、調査区の西側には第１遺構面と同様に砂層があり、遺構面は既に消失していた。

この面の標高は17.8mであり、第１遺構面より70cm程低い。

建物跡（ＳＢ035）

南北3.8m、東西５m以上の規模の掘立柱建物跡である。西側は流路のため消失している。床面は埋土が褐色土であるために柱穴痕を確認できなかったが、床面下20～30cmには人頭大の扁平な根石が置かれ、３間×４間以上の建物跡の存在が知られた。柱間の寸法は前者が1.1m、後者は1.35mを測る。この建物跡の北と東側の柱を結ぶ床面に黄褐色砂質土が30cmの幅で直線状に残っており、外側は土壁であったと推定される。

また、北西側の屋外には幅20cmの石組溝が建物に平行して長さ３mほど検出された。底部の高低差より、水は西に流れていたと考えられる。

建物跡の内側には埋甕が６、土壙と集石およびピットが各１ある。埋甕は南隅に位置し、径２～2.5m、深さ50cmのピットが２列で、３個ずつ計６個が並ぶ。この中の２個にはほぼ完形に復元ができる二（貳）石入りの備前の大甕が置かれていたがその他の４穴には同種の甕の底部のみが残っていた。なお、前述の甕の内部には一抱えもある玄武岩の野石があり、これは蓋の押さえとして置かれていたものが落ちたと思われる。集石は人頭

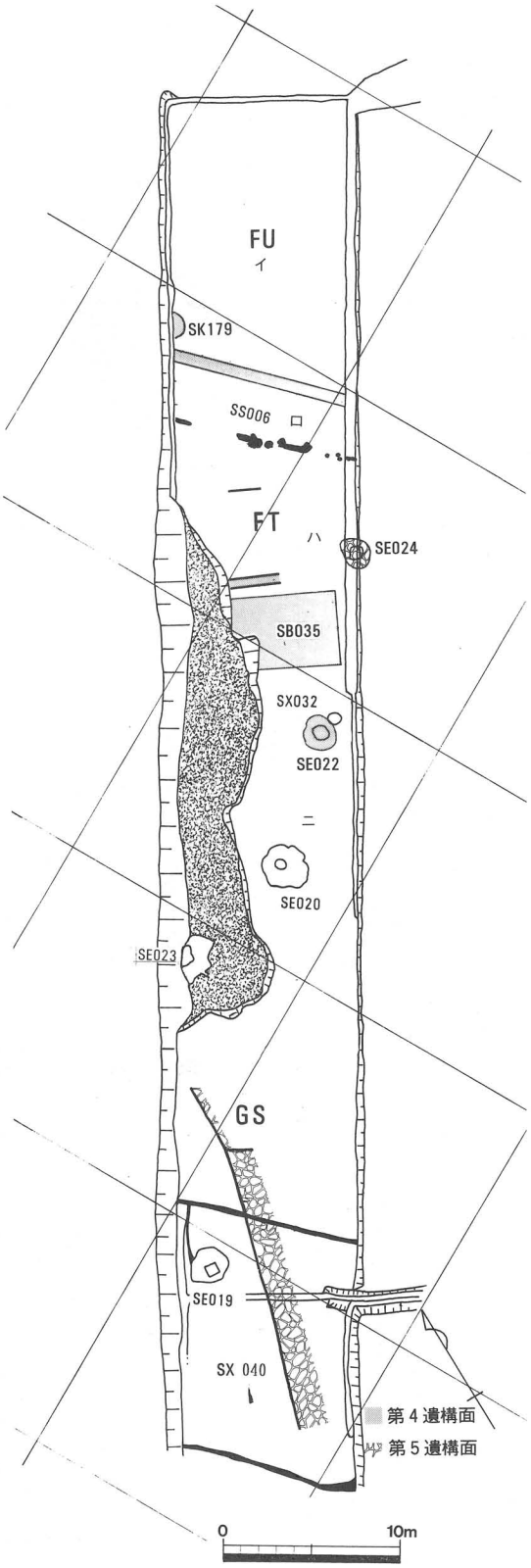


図57　第４・５遺構面ＧＳ・ＦＴ・ＦＵ区遺構図（Ⅱ）

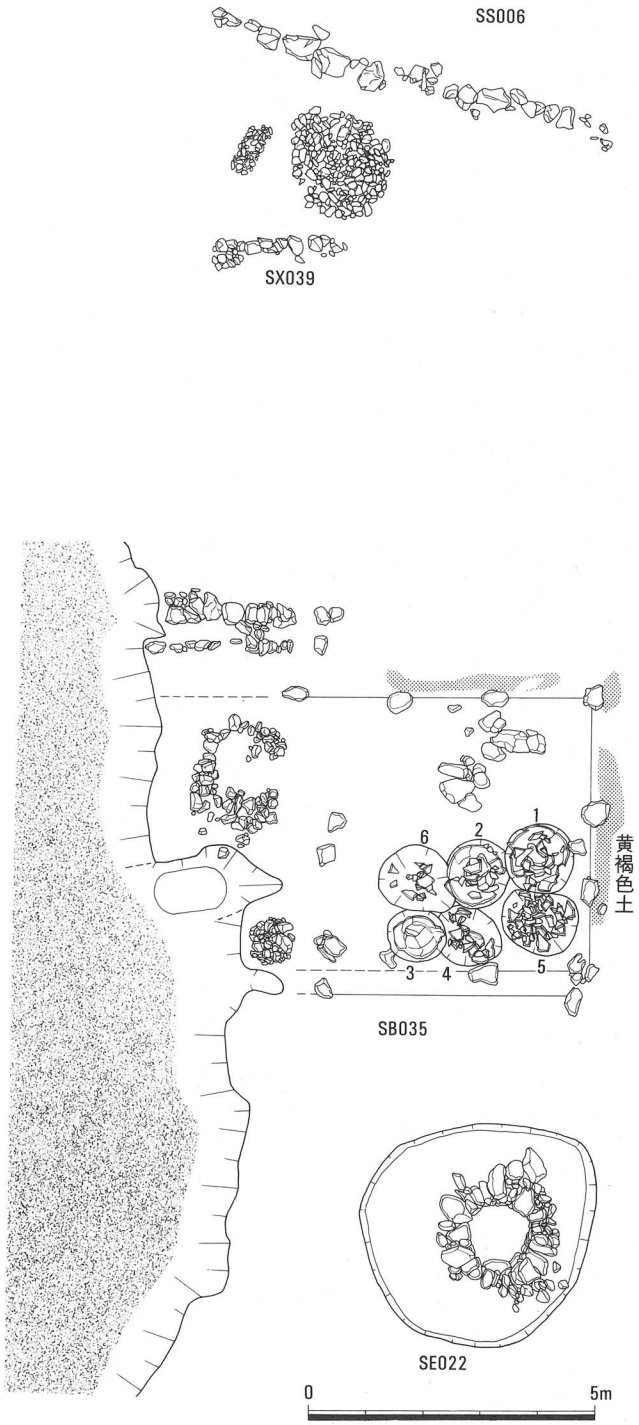


図58　第４遺構面ＦＴ区遺構実測図

大の河原石をΩ状に並べ、その規模は径1.0m、高さ20cmである。この内部には炭が多く認められ、周囲の石も火を受けており、炉跡と推定される。また、これに接して内部に炭が大量に詰まっている径２m以上、深さ約１m程の土壙も存在する。

出土品としては備前の甕（埋甕）６個体とその埋土中よりまとまって発見された陶磁器がある。図（59—１）は甕１の上部より出土した碁笥底をもつ青花（染付）の皿である。外面には呉須による波の連続文様と剣先文が、内面見込みには草文が描かれている。（２）はほぼ完形に復元できた備前の大甕である。口径58cm、底径40cm、器高88cm。口縁部の外面には三条の凹線があり、肩部には線刻で「貳石入」、「捻」の二文字が書かれている。

なお、他の甕の破片中にも「貳」と「吉」の文字が認められる。

次に、甕３が置かれた穴とその付近から出土した陶磁器は表20のとおりである。埋甕とそれを取り囲む根石・土壁が見られ、遺跡の性格が推定できる点も興味深いが、陶磁器113点の中に

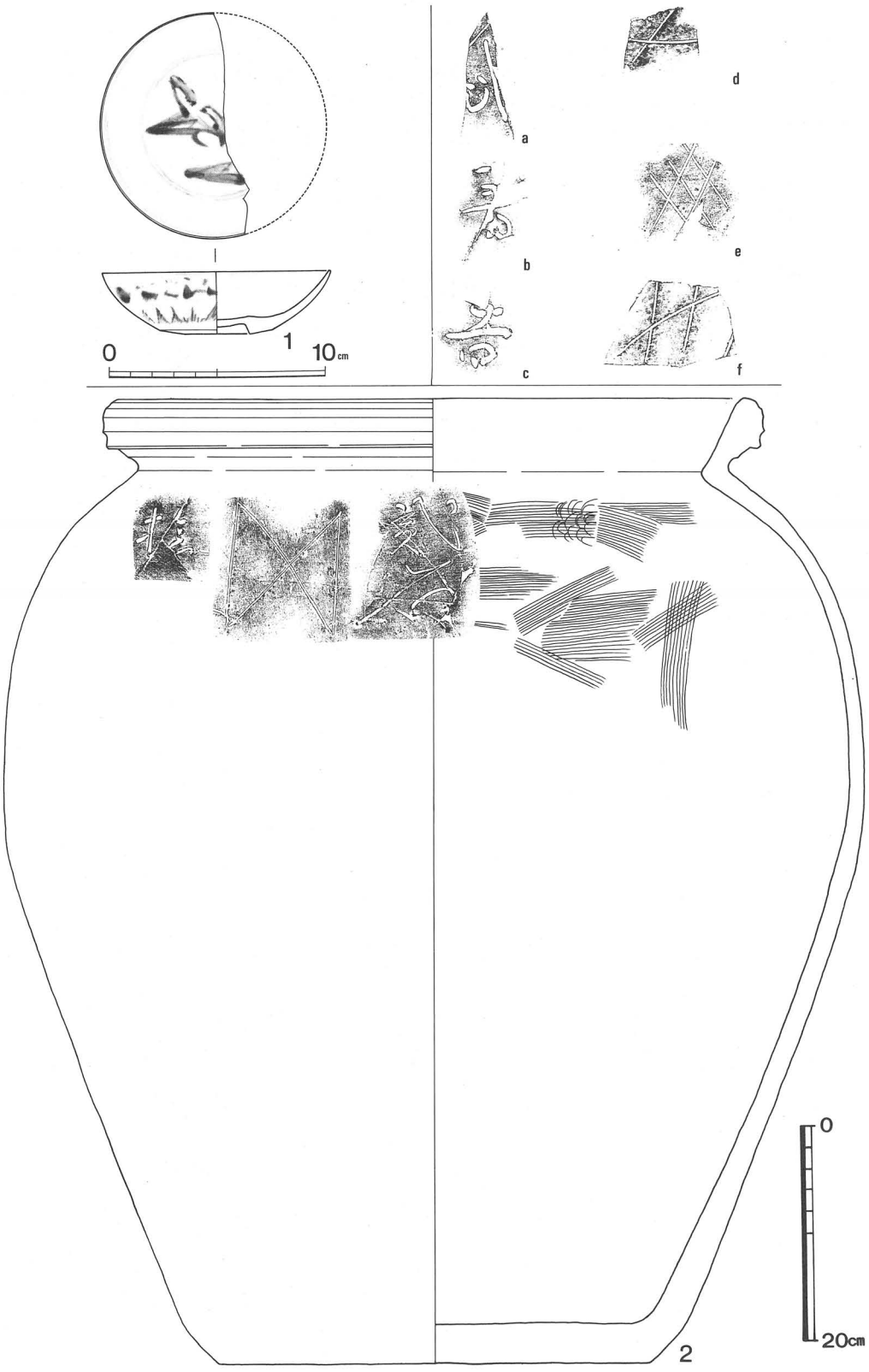


図59　建物跡（ＳＢ035）出土遺物実測図（２は埋甕２である）

表20　建物跡（ＳＢ035）埋甕３付近出土陶磁器等数量表

名称（器種）	破片数	名称（器種）	破片数	名称（器種）	破片数
青磁（碗）	1	南蛮系（碗）	1	備前（壺）	2
（皿）	5	（鉢）		（甕）	2
（鉢）		（その他）		（鉢）	
（盤）		計	1	（擂鉢）	19
（番炉）		灰釉（皿）	3	（その他）	
（蓋）	1	（鉢）		計	23
計	7	（香炉）		唐津（碗）	
白磁（碗）		（碗）	1	（皿）	
（皿）	24	計	4	（鉢）	
（坏）		鉄釉（碗）		（香炉）	
（その他）		（壺）		（その他）	
計	24	（皿）		計	
染付（碗）	3	（その他）		伊万里（碗）	
（皿）	3	計		（皿）	
（鉢）		土師質（皿）	43	（鉢）	
（坏）		（土釜）	5	（その他）	
（その他）		（その他）		計	
計	6	計	48	総計	113

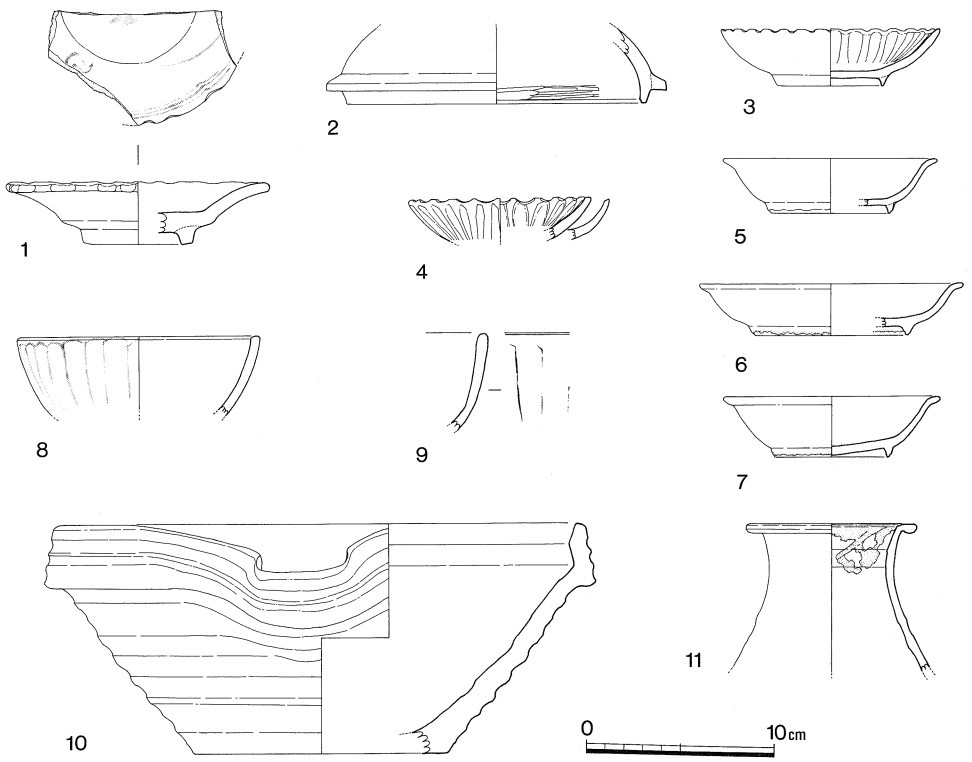


図60　建物跡（ＳＢ035）埋甕３付近出土遺物実測図

美濃の灰釉の若干の皿・碗を除き、唐津・伊万里など西日本の諸窯の製品が検出されない点も注意される。

図(60—1)は青磁稜花皿。(2)は青磁蓋物の蓋。櫛描き文様をもち釉調が大変薄い。(3)は青磁菊花皿。(4)は抉りによる菊花皿。(5～7)は白磁皿。(8)は青磁線描蓮弁文碗。(9)は美濃剣先型蓮弁文灰釉碗。(10)は備前擂鉢。(11)は瓶で、素地の表面には砂粒が見えるが、極めて堅致。器肉は薄づくりで、茶褐色の釉が薄くかかっている。

石列（SX039）

建物跡（SB035）の北側で、これと平行して石列を長さ2*m*程確認した。この石列と建物跡との幅は13.5*m*で、間口の3間にあたる。よって、この石列は屋敷割りを区画する

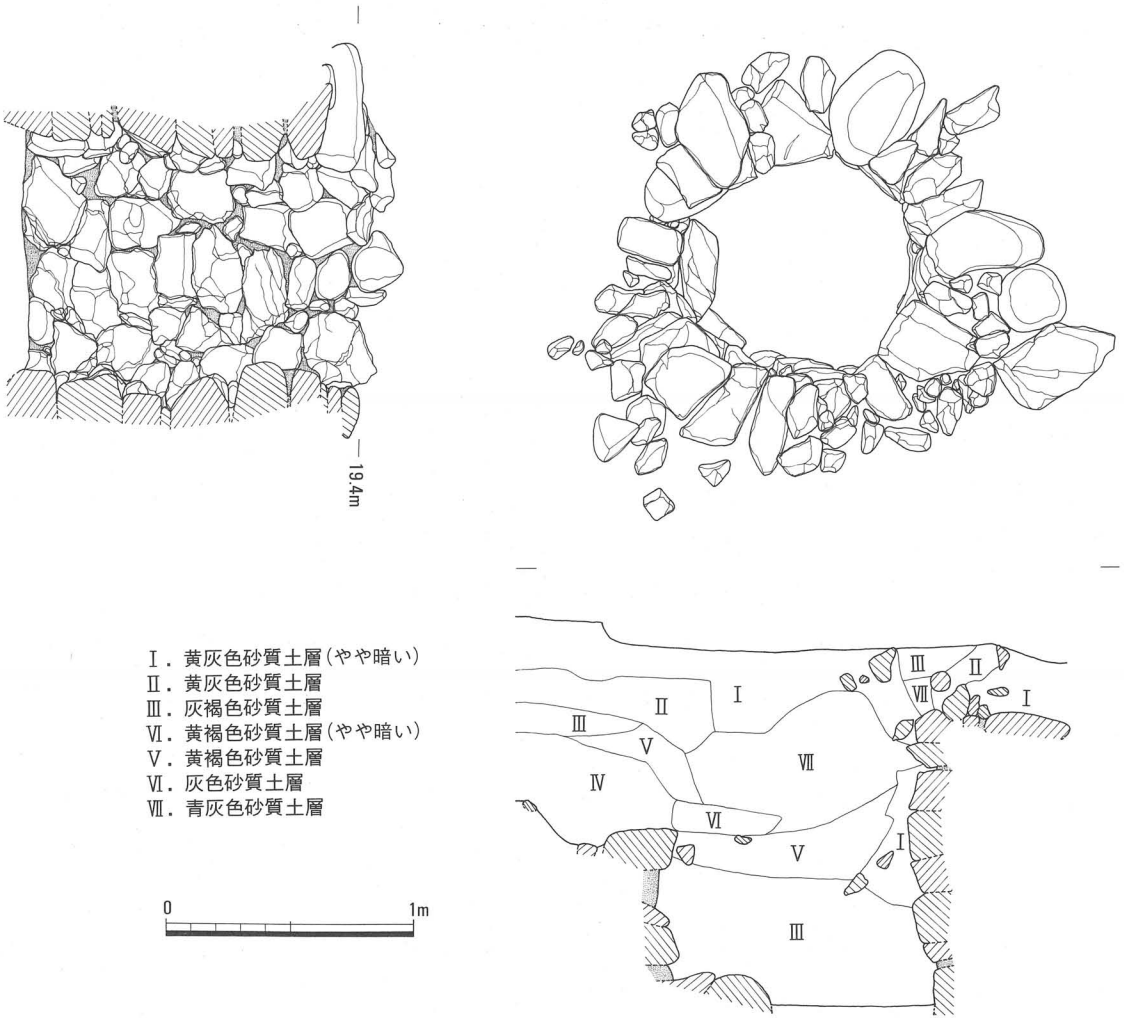


図61　石積井戸跡（SE022）実測図

ものだと考えられる。

なお、この空間においては、明確な柱列を検出することはできなかった。

井戸跡（ＳＥ022）

江戸時代初めに廃棄された石積み井戸跡である。掘り方は径８*m*を測り、その中央に河原石や野石による径１*m*の井戸を築いている。石敷きは破壊され、現存しない。深さについては崩壊の危険があり、確認できなかった。

土壙（ＳＫ190～258）

ＦＴ区の全域に分布する。平面プランは円形や楕円形を呈するものが多い。大きさもまちまちであるが、深さは浅く、高さが１*m*を越えるものはない。出土品は陶磁器等の焼物が大部分を占め、その他のものは僅かである。陶磁器も調査区の西端に位置するＳＫ194（一部のみ調査対象となった）を除いて各土壙とも量は少ない。これらの土壙が何のために掘られたかは明らかではない。出土品の中に、仏花瓶や石塔の一部が認められ、また、青磁・白磁・美濃・土師質土器の完成品がまとまって発見されたものもあるので、これらを出した穴は墓壙の可能性も考えられる。

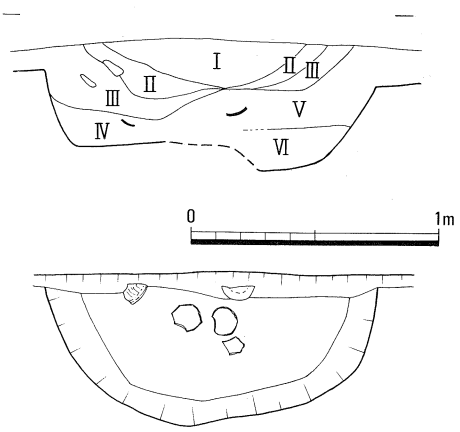


図62　土壙（ＳＫ194）実測図

ＳＫ194からは236点の陶磁器が採集されているが、中国製の皿・碗、壺・鉢の他、日本製としては、美濃の灰釉皿、備前の甕・壺・摺鉢以外は土師質の皿の類である。こうした組成の傾向は、当該地点では下層に行く程顕著な傾向となって現れている。

図64の（１～６）は中国製白磁皿。（１～５）は端反り、（６）は直線的に開き、釉は内外面とも上半部にしかかからない。（７）は茶褐磁。（８）は中国製青磁皿。外面は蓮弁文をもち、見込みに魚文が印花で配される。(11，12)は美濃の灰釉皿。(13)は黒釉の皿。素地は砂質であるが、堅致で暗褐色。全面に施釉、産地は判然としない。(14)は美濃の灰釉筒碗。内面に返りがある。(15)は中国製白磁青花（染付）碗。胎土は土質で、上下に巡る円圏文の中に梅花文が配され、見込みにも同じ文様が見られる。(16)は南蛮系の鉢。極めて堅致で、外面無釉、内面に薄い釉を塗布している。(17)は備前壺。(18)は備前摺鉢。(19)は備前壺の胴下半に篦記号のあるもの。(20)は備前壺。(21)は土質火鉢。肩に印花で形成化した松文を配している。

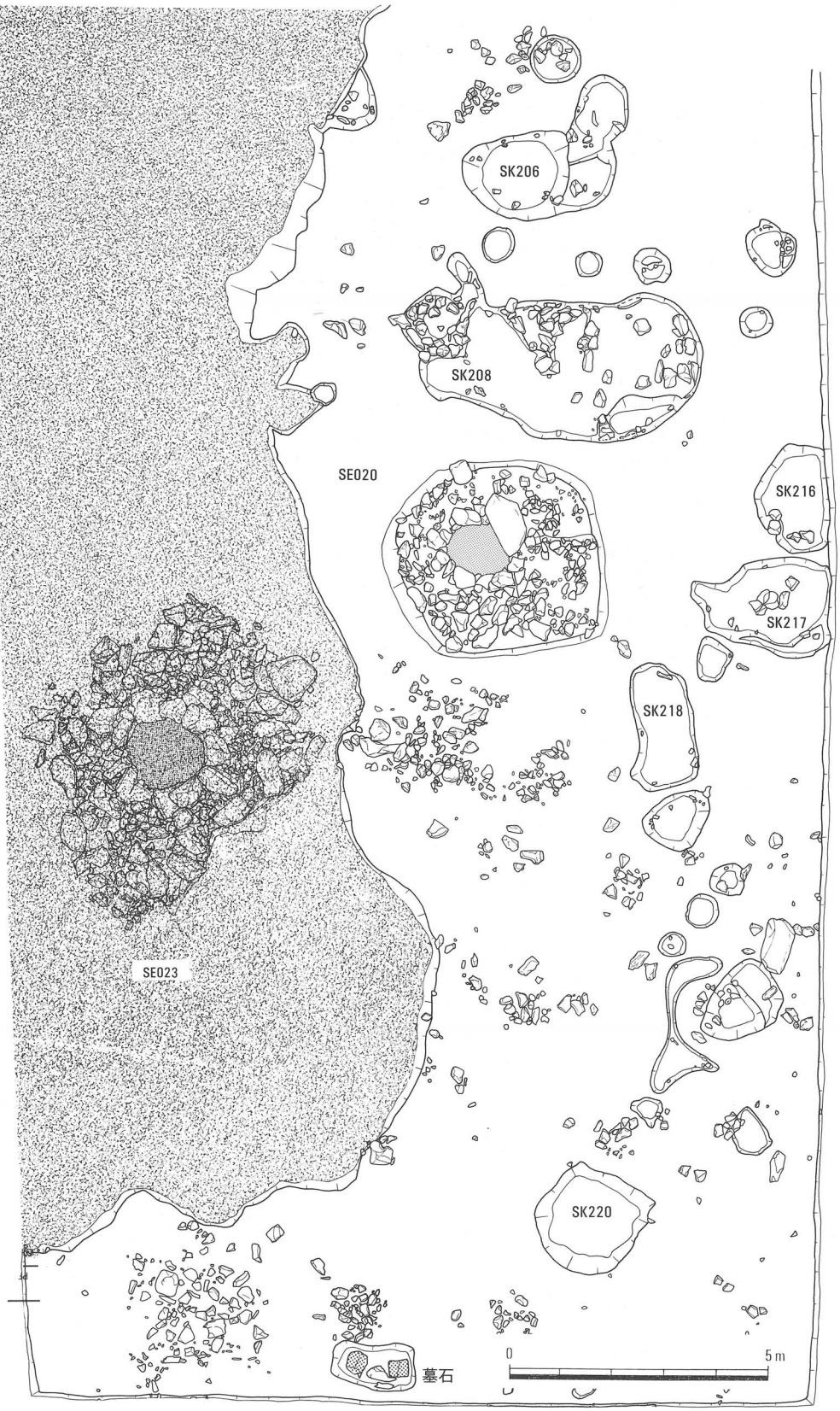


図63　第４遺構面ＦＴ区遺構実測図

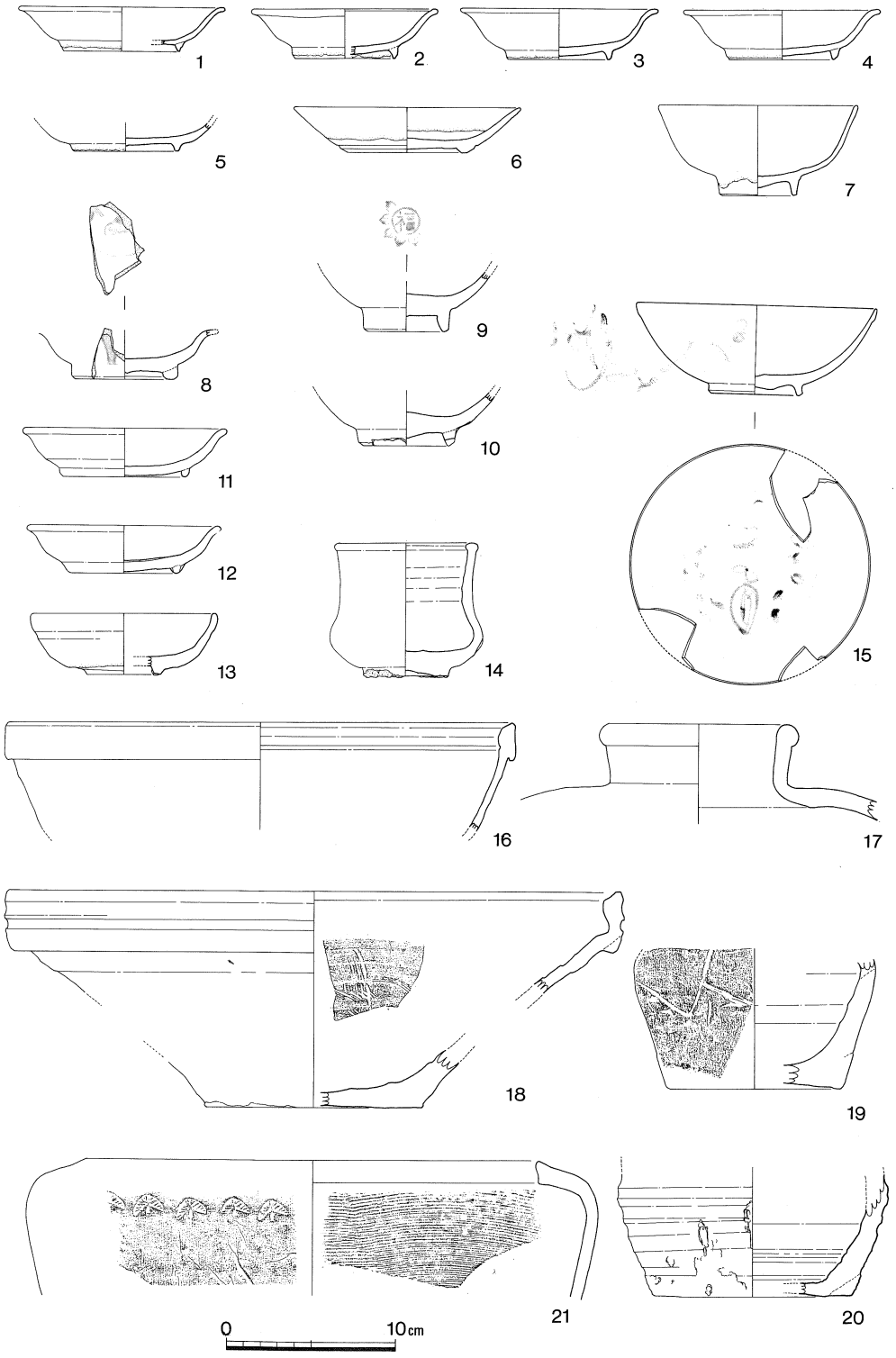


図64　土壙（SK194）出土陶磁器等実測図

表21　土壙（SK194）出土陶磁器等数量表

名称（器種）	破片数	名称（器種）	破片数	名称（器種）	破片数
青磁（碗）	2	南蛮系（碗）	5	備前（壷）	9
（皿）	1	（鉢）	3	（甕）	3
（鉢）		（その他）	1	（鉢）	
（盤）		計	9	（擂鉢）	12
（香炉）		灰釉（皿）	2	（その他）	3
（その他）		（鉢）		計	27
計	3	（香炉）	1	唐津（碗）	1
白磁（碗）		（その他）		（皿）	
（皿）	14	計	3	（鉢）	
（坏）		鉄釉（碗）	2	（香炉）	
（その他）		（壷）		（その他）	
計	14	（皿）		計	1
染付（碗）	8	（その他）		越前（擂鉢）	1
（皿）		計	2	褐釉磁（中国産）	3
（鉢）		土師質（皿）	153	褐釉磁（四耳壷）	2
（坏）		（土釜）	6	計	6
（その他）		（その他）	4	総計	236
計	8	計	163		

第4遺面構からも陶磁器以外の遺物も相当量発見されている。遺構に伴うものは表22に抽出しており、また、金属製品の主なものは図65に載せている。（1）は飾り金具の一部で、木の葉を表わしている。（2）はSK 208より出土した銅製の仏花瓶である。高さ9.1cm、最大径4.3cmを測るが、底板は欠損している。板金を打ち出したものと考えられる。（3）は大釉の縁金具。銅製品で、魚々子地に草の文様が刻まれている。

（4～6）は鎧金具である。（7）は小柄で、柄の長さは9.7cmを測る。文様はない。（8）は角状のもので、金具の一部と考えられる。（9）は銅製の毛抜きで、全長8.8cmである。

現在使用されているものと形は変わらない。(10)は薬篦の残欠である。平面形は楕

表22　第4遺構面の土壙における主要出土品

土壙（SK）	出土品（陶磁器を除く）
194	釘1、胄金具1、銭（紹聖元宝）1、硯1
198	釘1、金具1、銭（皇宋通宝）1、砥石1、木片
199	釘1、銭1、砥石1
201	釘2、輪状鉄具1、銭（洪武通宝）1
202	釘1、鉄片1、銭1
203	釘2、硯1
206	金具1、鎌1、銭（元豊通宝2）1
208	釘2、仏花瓶1
211	釘1
214	鉄片、漆（朱）杯1
220	鉄片
221	釘2、銭4（皇宋通宝2、大観通宝1、洪武通宝）1、貝類
240	鉄片1
241	釘1
244	銭（熙寧元宝）1
245	鉄片1
251	釘1
255	釘1
258	鉄片1
259	釘1、銭1

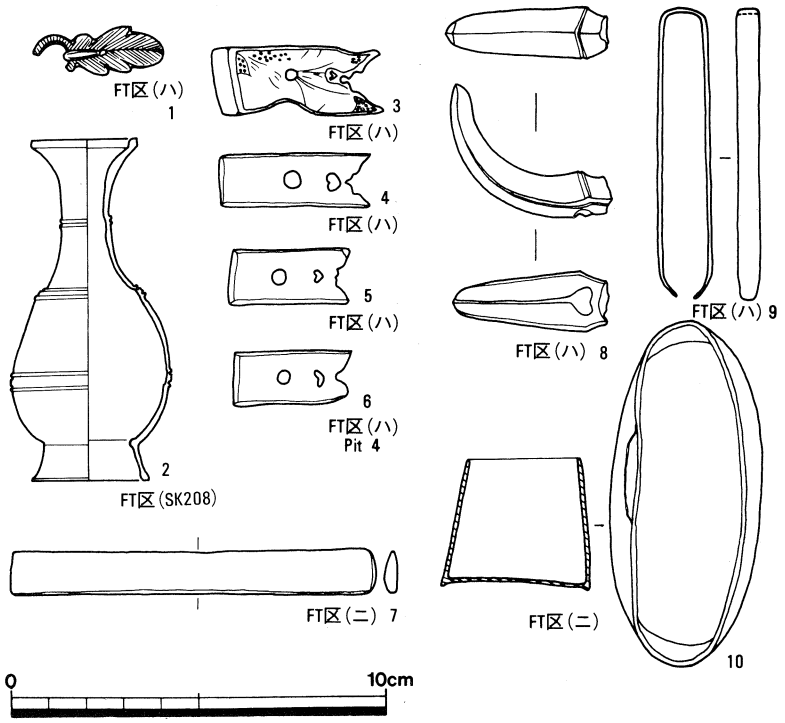


図65　第４遺構面出土金属製品実測図

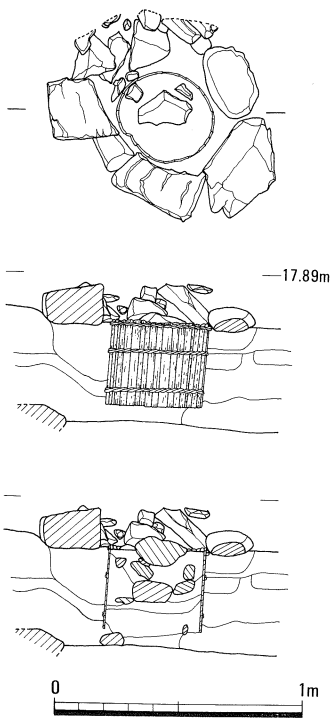


図66　井戸跡（ＳＥ025）実測図

円形で、長径9.2*cm*、短径 2.6*cm*、深さ 3.3*cm*を測る。胎は銅板製（俗称アカ）で、板金加工（ろうずけ）品である。表面には黒漆が塗られ、黒色を呈す。

井戸跡（ＳＥ025）

ＧＳ区の南側に存在する井戸跡である。石積の大部分を失い、下部構造のみが残る。石積の最下部は９個の割石と自然石で、径50*cm*程の空間をつくる。その下に、径40*cm*、深さ35*cm*で、底のない桶を置く。桶は23枚の側板で構成され、三条の竹のタガが認められる。

井戸の周囲は砂層で、遺物は発見されなかった。よって、時期は定かにできないが、周囲の状況より第２遺構面の時期から第４遺構面の間に造られたものと推定される。

5. 第5遺構面の概要

第5遺構面はＧＳ区からＦＴ区の砂層中に存在する。遺構はほぼ南北に走る石垣遺構と石積井戸跡各1を検出した。石垣遺構と第1遺構面の石列とは約30°の振れが認められ、上層と下層では異なった屋敷割が行われていたことが窺える。なお、標高は石垣遺構の基底部で、17.5mである。

遺構は総て川砂に覆われており、江戸時代に入る前後の一時期、飯梨川（富田川）の河床に位置していたことも知られた。

石垣遺構（ＳＸ040）

ＧＳ区の中央部で発見された遺構で、第1遺構面の空地（ＳＨ006）から建物跡（ＳＢ030）にかけての部分の砂層中に存在する。南側の20mは大きな野石を1m程の高さに野面積みにしている。一方、北側のものは人頭大の河原石を二段に積んでいる。なお、前者と後者は一直線ではなく、約10°振る。この遺構は本次調査の中では最大規模のものであるが、これに伴う建物などは検出されていなく、また、この遺構に伴う出土品も発見できなかった。埋没状況は後述の井戸跡と同一で砂の中にあり、その時期も同じと考えられる。

石垣遺構は富田城跡の御子守口（おこもりぐち）正面に位置し、石垣の規模からみて、城に付随する防御的施設の一部と思われる。

井戸跡（ＳＥ024）

径1mの石積井戸で、建物跡（ＳＢ035）の北東に接して存在する。掘り方は径2.5mで、その中央に人頭大の河原石を用いたものである。

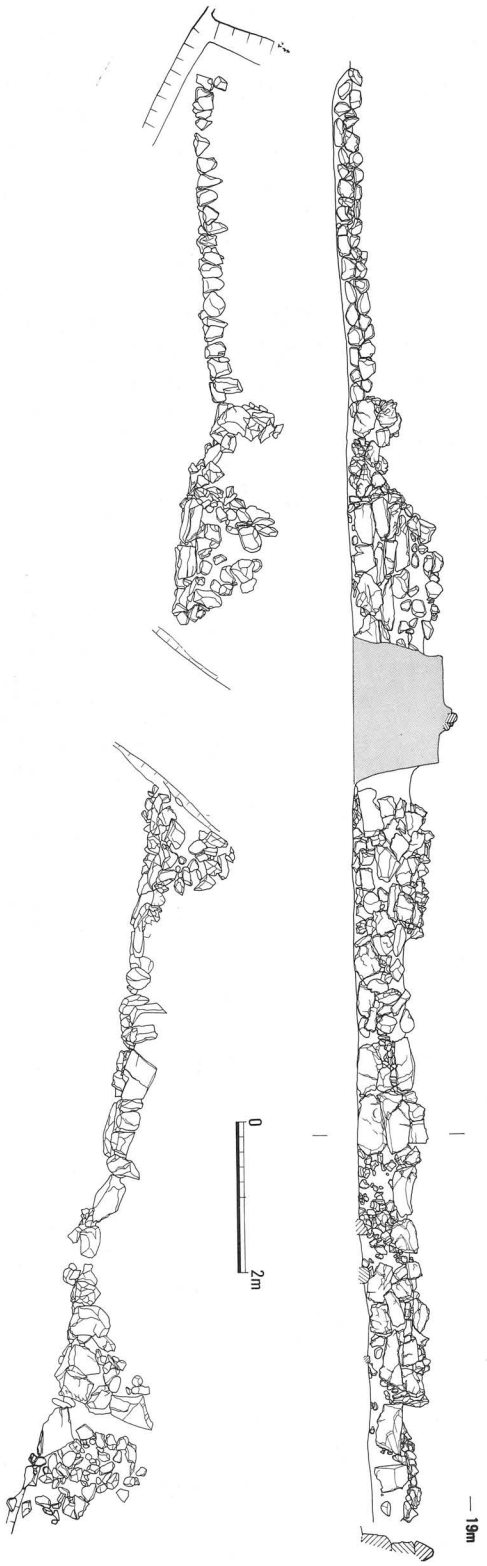


図67　石垣遺構（ＳＸ040）実測図

控え積みの石はない。他の井戸に比べると規模は大きく、石材や積み方も異なる。また、東側の部分は江戸時代の井戸跡（ＳＥ021）により破壊され、敷石も失われている。

図68　石積井戸（ＳＥ021・024）実測図

井戸の内部にも川砂が大量に堆積しており、この遺構も河床に埋没したものである。なお、井戸内部の上部に砂層に挟まれて暗灰色粘土層と黄褐色砂質土層がある。この井戸の廃棄時期は二つの層から出土した陶磁器より16世紀中葉と推定される。中国製の製品と備前と土師質土器の出土比率が高く、日本製の皿・碗はわずかに美濃の製品が見られるだけで唐津・伊万里などは全く出土していない点が注意される。

図69の(1)は中国製の白磁青花皿。高台部は露出、青黒くにじんだ呉須で文様が描かれる。見込み輪状に釉はぎがあり、墨書がめぐっている。(2～4)は線彫りを持つ青磁碗。釉は黄味を帯び、内面見込みに印花文を持つ。(5)は青磁盤。(6～13)は白磁皿。(11,12)は口縁周辺だけ施釉し、高台は削りだしで低い。(14)は美濃の天目碗。(15～20)は土師質皿。(21)は壺の口縁部。鉄錆を薄く塗布している。(22)は南蛮系の壺。胎土中に黒い斑点を含む。堅致な焼きで、外面鉄錆が塗布されている。(23)は備前の鉢。(24)は南蛮系とした鉢。胴上半部まで鉄錆状のものがかかっている。砂粒を含むが堅致。(25)は備前の擂鉢。(26)は備前の甕の口縁部。

表23　石積井戸跡（ＳＥ024）出土陶磁器等数量表

名称（器種）	破片数	名称（器種）	破片数	名称（器種）	破片数
青磁（碗）	5	南蛮系（壷）	4	備前（壷）	2
（皿）		（鉢）	1	（甕）	21
（鉢）		（その他）		（鉢）	5
（盤）	5	計	5	（擂鉢）	1
（香炉）		灰釉（皿）	1	（その他）	3
（その他）		（鉢）		計	32
計	10	（香炉）		唐津（碗）	
白磁（碗）		（その他）		（皿）	
（皿）	20	計	1	（鉢）	
（坏）	1	鉄釉（碗）	1	（香炉）	
（その他）		（壷）	1	（その他）	
計	21	（皿）		計	
染付（碗）	2	（その他）		伊万里（碗）	
（皿）	9	計	2	（皿）	
（鉢）		土師質（皿）	55	（鉢）	
（坏）		（土釜）	3	（その他）	
（その他）		（その他）		計	
計	11	計	58	その他の陶磁器	1
				総計	141

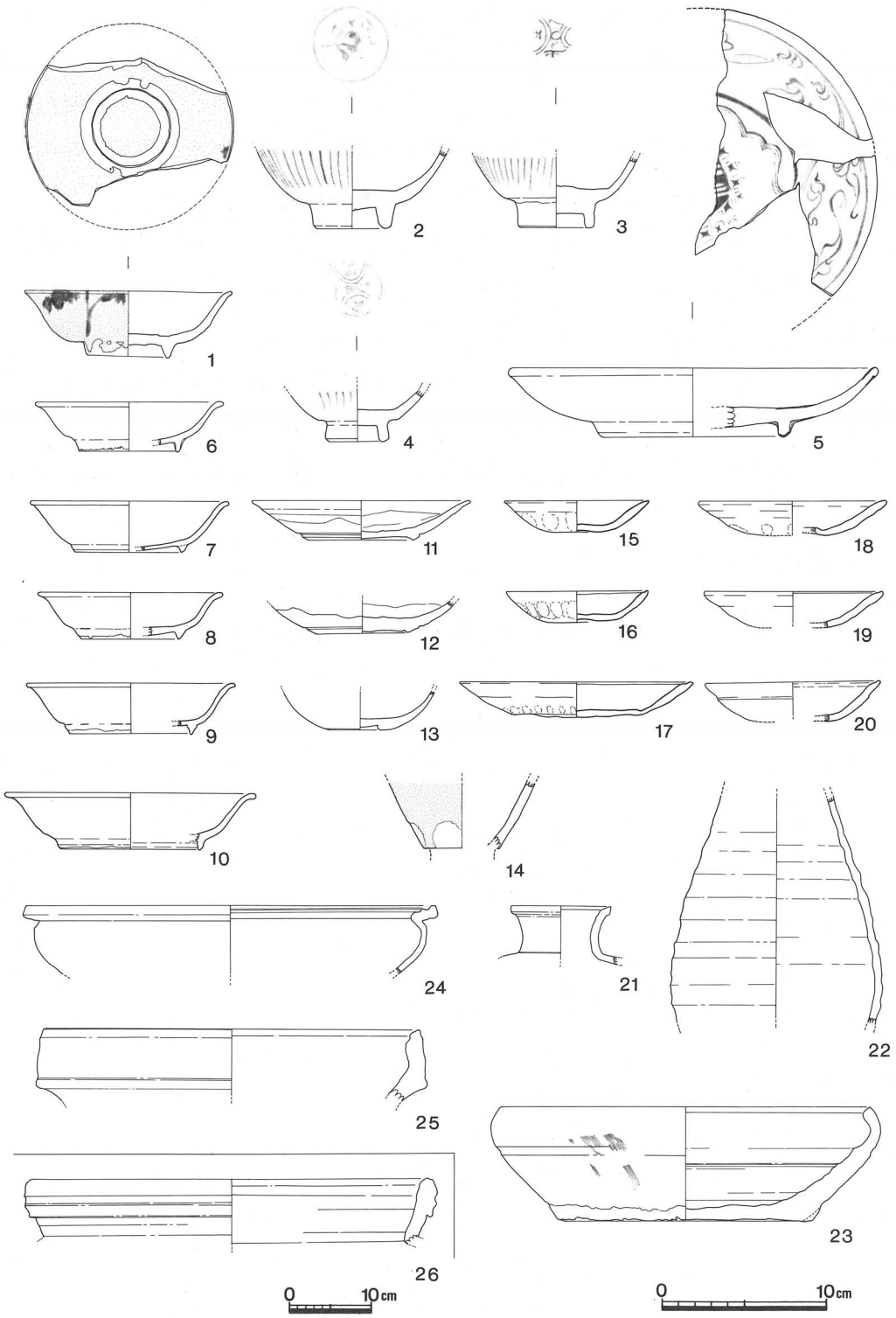


図69　石積井戸跡（ＳＥ024）出土陶磁器等実測図

V 小　　結

富田川河床遺跡の発掘調査は今回で7次を数え、この間徐々ではあるが、遺跡の実態が明らかになりつつある。とりわけ、本次の調査においては前述したように多くの成果を得た。この機会に以前のものも踏まえ、各分野の成果を調査に関わった方々に次章で執筆を願ったので、ここでは7次調査のあらましを記し、まとめとしたい。

【遺構】　今次の調査では第1遺構面から第5遺構面までの遺構を確認した。

第1遺構面では廃棄された最終の町並を調査区の全域で検出した。それは幹線道路沿いに並ぶ町屋とその背後にある空地および小路である。町並の埋没は以前より言われていたように飯梨川（旧名富田川）の氾濫が原因であり、その時期は出土品に照らしてみると古文書が伝える寛文6年（1666）とも矛盾しない。しかし、第2遺構面以下は次表のように部分的にしか認められていない。それは各遺構面の高低差のためであり、低い場所ほど整地盛土が繰り返され、遺構面が多く存在する。

これらの時期は出土品から推定すると下記のようになる。

表24　検出された遺構面と遺構

	FU	FT	GS	GR	HR	HQ	IQ	IP区
第1遺構面	―	―	―	―	―	―	―	―
第2遺構面								―
第3遺構面	―							
第4遺構面		―						
第5遺構面		―	―	―	―			

第1遺構面……17世紀中葉〔寛文6年（1666）の洪水で埋没〕

第2遺構面……17世紀前葉〔洪水で埋没。寛永21年（1644）銘木札出土〕

第3遺構面……16世紀後葉

第4遺構面……16世紀後葉

第5遺構面……16世紀中葉〔洪水で埋没〕

次に、町割についてみると、第1・2遺構面と第4・5遺構面とに伴う石列の角度の差が約20°ある。このことより16世紀後半から17世紀初めの時期に町割の変更が行われたことが知れる。この間には、慶長5年（1600）の関ケ原の戦いを境とする吉川氏から堀尾氏へと城主の交替や慶長16年(1611)の松江城移城があり、今後の調査によりその時期を解明する必要がある。また、第1遺構面の町割については、昭和51年(1976)に新宮橋下流で検

出した幹線道路（注１）とＩＰ区のそれとがほぼ平行しており、相当広い範囲にわたって整然と屋敷割されていたことが窺え、江戸時代後半に描かれた富田城絵図の表す城下町の様子に近いものである。

建物跡は14棟確認した。これらは総て掘立柱建物であり、17世紀中頃に至っても民家は礎石建物を用いていないことが知られる。さらに、第１遺構面に伴う建物は周囲を石組で区画され、大部分が間口３間に制約されているため細長いものが多い。同様な遺構は新宮橋下流においても確認されており、第１遺構面の建物群は幹線道路に面した町屋と判断される。なお、中には通りにはをもつ町屋や埋甕を並べた工房跡（第４遺構面）も認められた。

17世紀中頃の町屋の裏手には空地がある。そこには共同の井戸と厠が存在し、その周りには数本の立木も残っており、これらの資料から具体的資料に恵まれない田舎町の様子を垣間見ることができた。

【遺物】 焼物、鉄製品、石製品、漆器、木製品および自然遺物が出土している。特に多いのは陶磁器と木製器である。詳細は次章へ譲るが、焼物や鉄製品などの内容をみると第１、２遺構面と第３遺構面および第４遺構面ではかなりの相違がある。これは城下町と一般の町屋の違い以上に、室町時代から江戸時代へとの生活の変遷に呼応したためであろう。

第１遺構面と第２遺構面で鉄鍋や鉄釜および鋤などの農工具が多く発見されている。以前の調査地においても小鍛冶遺構（注２）が検出されており、さらに、古い広瀬の町にも鍛冶町や製鉄・鋳物にかかる職種の家号も認められ（注３）、富田も中国山地一帯で生産された鉄と深い関わりをもっていた町であったことが判る。

なお、遺跡が河床に位置するために木製品や自然遺物の残りが良好であり、当時の暮らしを知るうえでは貴重な資料といえる。しかし、立木や石垣に引っ掛った屋根材や下駄、および、泥に埋もれた状況で発見された漆器・茶椀さらに傾いた柱と折れた樹木などは、300年前の秋夜半に、突如襲った洪水の惨状を生々しく今に伝えるものでもある。

（西尾克己）

注1. 広瀬町教育委員会・富田川河床遺跡調査団『富田川河床遺跡発掘調査報告』(1977年３月）による。
2. 注１に同じ。
3. 本書の附論Ⅰ「富田川河床遺跡の町割について」を参照。

附　　論

Ⅰ　富田川河床遺跡の町割について …… 1

Ⅱ　富田川河床遺跡出土の漆器について …… 9

Ⅲ　富田川河床遺跡出土の金属製品について …… 11

Ⅳ　富田川河床遺跡出土の陶磁器について …… 15

Ⅴ　第７次調査で検出した柱痕の木材鑑定 …… 19

Ⅰ　富田川河床遺跡の町割について

1. はじめに

富田城下町の町割の実態については、発掘調査で明らかになった事実と文献資料の両面から、その構造を検討してみる必要がある。

このことについては、以前若干述べたところであるが(注1)、今年度の発掘調査で屋敷割の法量がわかる遺構が検出されているので、これも用いて若干の考察を加えてみたい。

2. 発掘された遺構について

祖父谷(おじだに)川と飯梨川の合流地点の中州状部分のＩＰ区において、現在の川筋に沿って南西～北東にはしる幅約６ｍの版築された本格的な道路跡に面して南東側に建物が並んでいたことが判明した(本文図５)。発掘調査区の範囲の関係で奥行は不明であるが、間口については屋敷割の法量のわかる３棟についてみると次のとおりである。すなわち、北東寄りの２棟については、両側に幅約30cmの雨落溝をもち、その中心間の距離を測ると、約5.7mと約12.3mである。また、前述の大きい方の棟の南西に隣接する他の１棟については溝はないが、柱穴を目安に測るとやはり約5.7mである。いま、１間＝６尺２寸５分＝1.894mとして検討すると、３間＝5.682m、６間３尺＝12.273mとなり、上記の３棟の実数に近い値が求められる。このようにみると、この区については３間と６間３尺の建物が並んでいたことになる。

祖父谷川を挟んでＩＰ区と対するＨＱ区では、道路跡は区域外になって検出されなかったが、間口の法量のわかる１棟分の建物跡が検出された。位置的には、ＩＰ区の場合と反対側で、幅６ｍの道路の北西側に並ぶ建物跡と判断される。これも両側に雨落溝があり、同じように溝の中心間の距離を測ると約12.3mあり、よって、この遺構面では１間＝６尺２寸５分としては近似値が求められない。しかし、１間＝７尺＝2.121mとすると、６間１尺５寸＝13.182mとなり、実数に近い値が得られる。このＩＰ区とＨＱ区の遺構は第１遺構面であり、寛文６年（1666年）当時の屋敷割を示していると考えられる。

また、下流方向のＧＳ区、ＧＲ区にもＩＱ区の建物跡の屋敷割の石列とほぼ平行にはしる石列があり、井戸跡も検出されたが、平坦面毎に低い段がみられ屋敷の地割とは異なるように考えられる。性格は不明だが、何か公共的な用途に供された区域と想像される。

使用された尺について述べると、屋敷割には6尺2寸5分1間の竿が一般的に用いられていたことが知られるが、道路跡については幅が必ずしも明瞭ではなく、ほぼ5.7～6.0mすなわち2間幅のものといえる。

また、昭和51年度の発掘調査（注2）で、同じ幅6mの幹線道路の両側に建物跡が並んでいる遺構が検出されたが、このうちで屋敷割のわかる3棟分について溝の中心間の距離で間口を測ると、約6.2mと約5.7mの2種があり、6尺2寸5分を1間とすると3間1尺5寸と3間にほぼ適合する。これは上層の遺構面で寛文6年当時の屋敷割を示している。

次に、建物遺構の柱間寸法についてみると、ＩＰ区の3棟はいずれも礎石をもつものであり、礎石そのものは失われていて底に根石が一部残っているだけで寸法を正確に測ることはできないが、ほぼ1.7m～3.4mの間に分散している。このうち1.9mのものが約半数を占め、2.1m～2.2mのものがこれに次いでいる。これは6尺5寸5分と7尺の値に近い。

一乗谷の使用尺については、建物跡で1間＝6尺2寸～6尺2寸5分（1.88m～1.89m）（越前間）とする例がほとんどであり、1間＝7尺の古法が少し認められる。屋敷割には1間＝6尺5寸（1.97m）（京間）がより適合するという（注3）。一方、富田城下町では1間＝6尺2寸5分が屋敷割、建物共通に一般的に用いられ、1間＝7尺の寸法も少しみられるようである。

3. 文献資料について

町割の実態を検討するときに参考になる文献資料は極めて少ない。よって、ここでは主に以前用いた資料（注4）を再度取り上げ分析した内容を要約してみたい。

(1) 富田城下町の絵図について

富田城及びその城下町を描いた絵図は20面以上流布しているようである。その一つの例として明治44年松陽新報社版『雲陽軍実記』添付の「月山城図」をあげてみる。これに記されている町、寺院、道路等を列記すると次のとおりである。

ひきぎ町、萱町、板屋町、馬喰町、上本町、下本町、中町、給人町、小池殿組、鉄炮町、五丁目、六丁目、いう町、との町、新町、小谷小路、半四郎小路、おやかた小路、十五堂小路、金尾洞光寺路、本城寺、寿仙寺、誓願寺、円照寺、勝願寺、信楽寺。

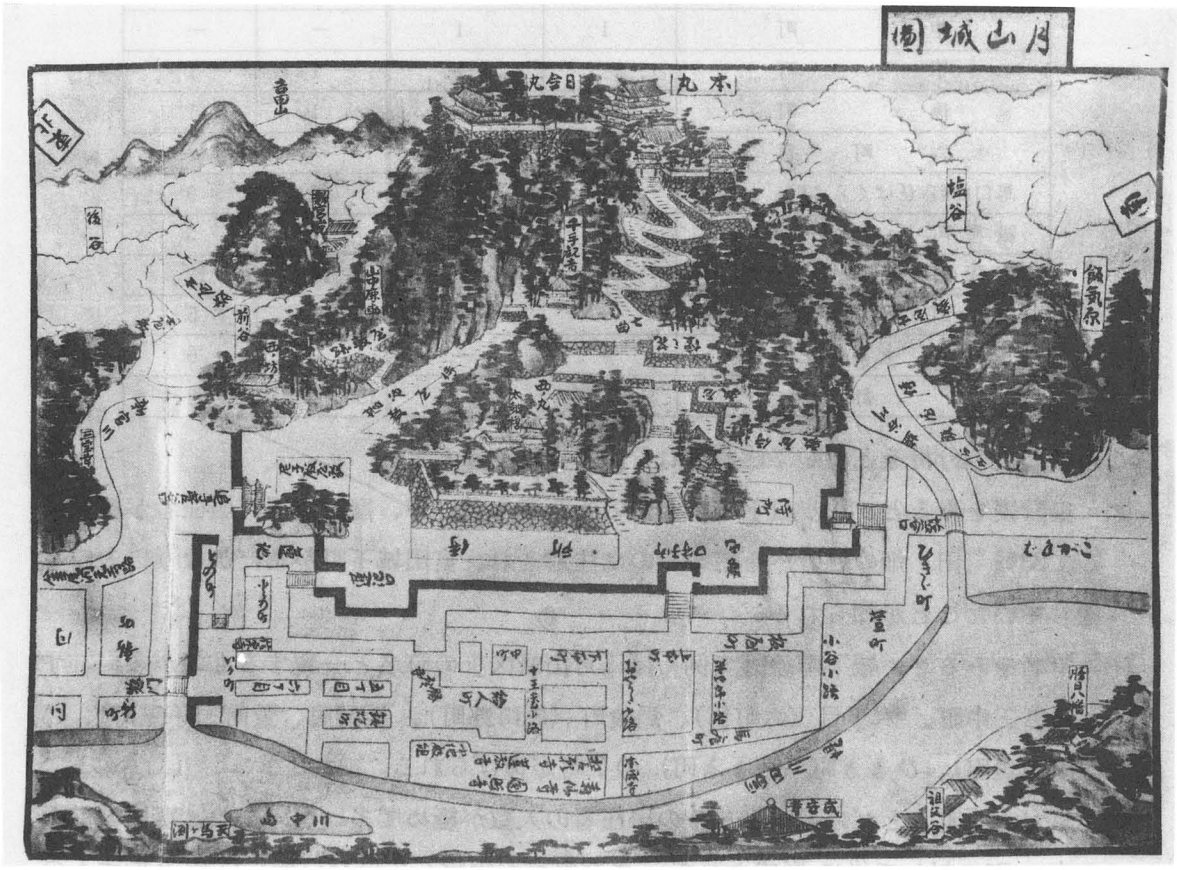
しかし、絵図によって描かれている範囲が飯梨川下流の現在の安来市荒島町近くまで描きこんだものや富田城周辺だけのものなどがあり、また細部にわたる町、道路の位置や名称などにも相異がみられる。しかも、製作年代が江戸時代中期以降と推定される（注5）ものなので、町や大小路の位置などについてはそのまま信じるわけにはいかないが、全体

的に次のようなことがいえると思う。

(ア) 富田城の西面には堀がめぐらされ、その外側に城下町があった。

(イ) 商工業の職種名を冠する町や寺院などが町割されて存在した。

(ウ) 主要な大路が現在の川筋に沿う形でほぼ南北にはしり、その間を小路が連絡していた。



月 山 城 図

(2) 「寛永三年富田庄之内広瀬村御検地帳」(田方及び畑方) (注6) について

寛永3年 (1626年) といえば、松江移城より15年を経過した時期である。広瀬村は現在の大字広瀬にほぼ該当すると考えられ、富田城下町とはかつての富田川を挟んで対峙する近い位置にある。検地帳には土地所有者の住所・職業・屋号・身分などが記入されており、土地の所有者は広瀬村内の者がもちろん多いが、富田城下町の住人と推定される者もかなりおり、それを町別に集計したものが表1である。

表1　寛永3年富田庄之内広瀬村御検地帳記載富田城下町居住者集計表

（『富田川河床遺跡発掘調査報告』より）

町名	田方（243筆）		畑方（476筆）	
	筆	人	筆	人
町	21	14	53	36
本町	3	3	18	15
上町	2	1	—	—
中町	1	1	—	—
下町	—	—	1	1
後町	—	—	1	1
六町目	1	1	—	—
馬口郎町（「はくらふ町」とも）	1	1	12	9
板屋町（「いたや町」とも）	2	2	9	5
茅屋町（「かや、町」とも）	—	—	16	12
魚町（「う於町」とも）	—	—	11	5
ひき、町	—	—	9	6
計	31（13%）	23	130（28%）	90

この検地帳の分析をとおして注意される点をあげてみると、

(ア)　集計表をみると、10歩以下の小面積の所有者も多いが、富田城下町居住者が筆数にして23%（田、畑の総計）を占めるのは注意され、富田城下町がまだかなりの人口を擁していたことが知られる。

(イ)　町名をみると、城下町絵図で例えば「月山城図」の町名と一致するものが多い。すなわち、中町、六丁目（六町目）、馬喰町（馬口郎町）、板屋町、萱町（茅屋町）、いう町（魚町）、ひきぎ町（ひきき町）の7町があげられる。

(ウ)　ただ、「町」とだけ記すところの居住者の人数が極めて多いが、これは富田城前面の古い町に対して後に形成されて、まだ町名が固定していない新しい町を指すものと思われる。これは絵図にある「新町」に当るものと考えられ、何町分かを一括して「町」といっていたのだろう。するとこれらの町を、新宮谷入口付近及びその北方に位置したと考えられ、現在の町帳の区域に当ると推定される。

以上のように、富田城下町は松江移城後10数年を経た寛永年間の1620年代には少なくともかなりの人口があり、まだ城下町の概形を存していたことがわかる。また、検地帳の町名と一致するものが前記した中町以下7町あることなどから、絵図の構成の基本的なものについては信用してもよいと考えられ、町割に関係する前記（1）の(ア)〜(ウ)の項目のようなことがいえる。

(3) 「寛文八年広瀬町屋敷帳」について（注7）

寛文8年（1668年）といえば、寛文6年の洪水で富田城下町が潰滅した後、第一代藩主松平近栄が新しい町づくりに着手した頃である。

この新しい町については、近栄が寛文7年に幕府に提出した願書の中で、去午（寛文6年）の秋の洪水で流れ残つた「町五町程」を広瀬に移したいという旨を述べているので、屋敷帳に記載されている6町は富田城下町の一部がもとになっていると考えられる。すなわち、新広瀬城下町の基礎は富田城下町の移転によるものであり、例えば町名はかっての名称がそのまま用いられ、町人も多くが元の町の住人であったと考えてよいと思われる。また、屋敷割についてもかっての屋敷割の実態（寸法など）が強く反映されていると考えられる。

屋敷帳の内容は、板屋町、本町、下町、鍛冶町、魚町、清水町の6町257軒について面及び入（屋敷地の間口及び奥行）と屋号あるいは身分を付した家主名を記載している。6町のうち板屋町、本町、下町、魚町の4町が前記の「寛永3年広瀬村検地帳」に記載された町名と一致することは注意される。また、鍛冶町が「町」の一部であったとすると、絵図から考えればそれは新宮谷入口付辺に存在したことになる。あるいは絵図にある「鉄炮町」が鍛冶町と改称された可能性も考えられる。

屋敷地の寸法についてみると、入口12間が2、15間が1のほかはすべて16間である。面は3間から特別長いもので12間1尺5寸まで種々あり、非常にばらつきがあるところをみると、かっての屋敷地の寸法がそのまま生かされているのではないかと考えられる。

各戸の屋号には家主の職業あるいは出身地名を冠したものが多く、他に身分を記したものが若干あり、これを町別に集計したものが表2である。

この屋敷帳から注意される点をあげてみると

(ア) 鍛冶町では「鍛冶や」が47戸中18戸と集住の形を比較的保っているが、板屋町、魚町についてはその町名の職種に関連する業者の集住が少ないことが注意される。このような同種業者の集住の低さは近世的な城下町の町割規制が強く行われていないことを示すものと考えられる。これは広瀬城下町が富田城下町の旧態を保持したままで移転したことの表われであろうか。

(イ) 「らうそくや」、「紺や」が比較的多いことは、周辺の農山村の原料生産を城下町における加工業という社会的分業が成立していたことが考えられる。また、「米や」などの町居住者を主な顧客とするものもあるが、「魚や」、「塩や」、「薬や」、「はんどや」、

表2　寛文8年広瀬町屋敷帳記載屋号等集計表

（『富田川河床遺跡発掘調査報告』より）

町 / 職種等	板屋町	本町	下町	鍛冶町	魚町	清水町
刀剣・鍛冶関係	とぎや、灰吹や	灰吹や	鍛冶大工	鍛冶や(18)		さやし
家具等製造・建設関係	鍬ふろや、大工、下鞍屋、うすへりや、井筒屋、井積	井積	木や、たうすや	桶や(2)	木挽、鍬ふろや、桶や	たたみや(2)、大工
日用品・その他製造・販売関係	らうそくや(2)薬や(2)、はんどや(2)、桶や、花や、こまや、かみや	薬や、絵書	笠ぬきや、笠や、らうそくや(2)、こまやなべや、かわごや、かミや(2)	らうそくや(3)すゞや、笠や	へにや、櫛やはりや	紙や(6)
食料品販売関係	米や(4)、魚や	米や、油や、麹や、熊や(2)たうふや(2)	米や	油や	魚や	塩や
衣料品加工関係	紺屋	ゑもんや、紺屋(5)	紺や(2)	紺や(2)		
牛馬関係			博労	博労、馬持(2)		
住居関係	ながや(「長や」をふくむ)(4)		家作(3)、なかや	家作(5)		家作(8)
サービス業関係		志らかや	ごせ、手子、釘立（針立か）		かミゆい	
金融・宗教・役人関係		目代、くらもとや	蔵元や、山伏	神主		庄や、神主、寺山伏、たかや
出身地その他関係	丹波や、宍道や、こにご(2)面高や(2)、杵築や、惣田や屋ぶや、今だや、あべや、嶋や、田中や(「田中」をふくむ)(3)、田原や(4)、福田や中村、水野、にへで(2)、松や、兵庫や、今村、水、中村	大文字や、大和や、田中や(4)、長谷川(2)井河、いせや、ゑどや、あべや(2)、石原屋横田や(2)、柳や、竹下や、成田や	岩や、阿部や黒坂や、杵築や、田中や、ちどりや、横田や、実松やかどや(2)、こからや、田原や、すかまやいせや、黒や	坂田や、さなだや、福や、田中や(3)、石原や、森山や比田や	植田や、安井や、薮や、長谷川、坂田やあ志やらや、なからや、こきや、田遍、原田や、田中や、いぐや、いなばや、高浜や	松江や、こにご、松原、高橋や、新宮や
虫損不明		4	8		3	1
記入なし		1		1	1	1
計	57	44	52	47	26	31

註　(1)家号等のあとの数字は戸数を示す。数字記入なしは1戸。
　　(2)かミやと紙や、紺屋と紺やは同種と思われるが記載のとおりにした。ながや（長や）となかやも同種と思われる。

「紙や」などは町人と周辺農山村とにわたる広い範囲を対象にした商工業である。このように、寛文6年に近い時点で周辺の農山村と密接な関係をもちながら経済的に活動していたことが推測されるのである。

次、面（間口）の寸法について集計してみると表3のとおりである。町別についてみると、板屋町、本町、下町は3間3尺ないし6間3尺の家が多く、鍛冶町、魚町、清水町は3間ないし6間の家が多い。これによって板屋町、本町、下町に比較的大きな家が多かったことが知られる。また、職種別にみると鍛冶や、家作（借家人）などについては3間が多く、6間がこれにつぐ。前述した昭和51年度の調査で検出された幹線道路に面して並んでいた3棟の建物跡のうち2棟は内部にスラッグ塊があり、また堅く焼きしまった焼土の部分があったことから鍛冶工房跡と推定されたが、これはいずれも間口3間であった。

表3　寛文8年広瀬町屋敷帳面の長さ別戸数集計表

（『富田川河床遺跡発掘調査報告』より）

面(間口) / 町屋号等	3	3.15	3.3	4	5	5.15	6	6.15	6.3	8	9	9.15	9.3	10	12.15	計
板屋町		5	18					3	28				1		2	57
本町			4			1		1	32	2		2	2			44
下町	8	5	18		4			4	11					2		52
鍛冶町	24						21				2					47
魚町	10				1		15									26
清水町	9			2			19				1					31
鍛冶や	9		1				7				2					19
家作	11				1		4									16
らうそくや	2		3				2	2	1					1		11
米や	1		1						4							6
紺や			3				2	1	4							10
紙や	2		2				5									9

4. おわりに

以上、発掘調査の成果と限られた文献的資料を用いて富田城下町の町割の実態を推測したわけであるが、十分な発掘資料が得られなかったため、文献的資料と結びついた緻密な究明ができなかった。このような中で今回の調査の成果を中心にまとめてみると、富田城下町は狭い谷合の地形で、富田城の発展に応じて拡大したと考えられる。また、富田城前面とかっての富田川との間の区域は、絵図に示されているとおり道路網が整備され、全体的に町割されていたことが確認された。多くの建物は幹線道路に沿って屋敷割された敷

地に連続して建てられており、その中には公共的な用地もあったことがわかった。使用尺については、1間＝6尺2寸5分の竿が屋敷割、道路、建物ともに一般的に用いられていたことが推定され、一部7尺の竿が使用されたようである。

以上のことは第一遺構面の発掘調査を中心にみたわけであるが、下層の城下町の実態については更に確実な資料を集積した上で検討しなければならない。なお、新宮谷遺跡の発掘調査（注8）の結果から、谷幅が狭く平坦地に乏しいこともあってか、遺跡が分散的であることがわかった。このことから、武家屋敷がこの谷に集中して存在したとは考えられず、それらは多く月山の北西麓あるいは城下町の城寄りの区域（絵図でいう殿町と示された部分）にあったと推定される。（蓮岡　法暲）

注 1. 広瀬町教育委員会・富田川河床遺跡調査団『富田川河床遺跡発掘調査報告』（1977年3月）
2. 注1に同じ
3. 小野正敏「越前一乗谷の町割と若干の問題」（『日本海地域史研究』第3輯　1981年10月）
4. 注1の報告書で取り上げた資料
5. 桑原英二『まぼろしの戦国城下町』（1974年12月）
6. 広島大学附属図書館所蔵
7. 注6に同じ
8. 広瀬町教育委員会『新宮谷遺跡発掘調査報告書』（1982年3月）

Ⅱ　富田川河床遺跡出土の漆器について

富田川河床遺跡は、町並が当時のままの姿で埋れていたため、陶磁器類や金属製品とともに多量の木製品を残すことになった。この木製品や金属製品の中に若干ではあるが、漆器製品がみられるのも本遺跡の特徴である。以下、本遺跡出土の漆塗製品について概観してみることにする。

1．漆塗椀類

漆塗製品の大半は椀類であり、次のような特徴を有する。

器胎成形

原材は不明であるが、木質は軟質、稠密である。板目どりのロクロ成形で、総じて分厚い作りであることは、材質・工具の精度によるものと思われる。

形状は、飯椀、汁椀、平皿（あるいは椀のふた）に分けられ、近世（江戸末期）のものとさして変わらない。飯椀の外底高台内にロクロ装着のツメ跡が見られるものが1つあるので、ロクロの構造・性能は近代（大正期）のたてびき式と大差のないものと想像できる。

漆　塗

漆塗の下地は薄く目止め程度と推定され、出土品の常として随所に断文がある。上塗はすべて内赤、外黒の方式で、古来「赤色は邪気を払うもの」という食器の伝承がここにも生きているように思われる。

文様、漆絵

文様は大和絵風の草花文、流水に花形、桜花、丸に稲穂、細輪三つ引、梅鉢、扇、丸に橘、丸に巴など、家紋の表現が見られ、第1次～第3次の調査時の出土椀類に比べて、一層種類が多いのも特徴的である（注1）。

色は赤、黄、古代緑の三色が使われ、天然朱（硫化水銀）や金属粉を使用している例はない。したがって、昭和52年調査の松江市タテチョウ遺跡（注2）出土の赤絵桜花文平椀（紅柄一色の絵）より時代は下り、江戸時代中期以降との中間に位置して、漆絵の流れの重要な資料と考えられる。

顔料はすべて天然産金属顔料で、赤は紅柄（四三酸化鉄）、黄は生黄（きおう）（硫化砒素）の二種である。あめ色の透明漆に顔料を練り込むのが通例である。ここに、古代緑というのは生黄に炭粉（炭素黒）の微粉を少量混ぜるか、あるいは生黄を黒漆に練り込んで緑色を発色させる方法で、筆者の造語である。これは明治以降の近代の緑漆と鑑別のきめ手となる。

描画の筆を推察するに、草花の葉の末端の様子から、現代の柔かな兎(う)の毛と同様のものが使用されていることがわかる。また、椀高台に描かれた「仲」字をみると、やや剛毛のものが使用されていることが知られる。さらに、飯椀の一つに、丸に橘紋があるが、これは果実の緑の略画としての掻きとり技法である。これは現今と通じる技法の祖形であろう。

2. ヨネハカリ（米量）

ヨネハカリは米、麦、粟、稗を炊く際に櫃から釜に移すための量を計る日常雑器、いわゆる民具の一つである。名称は、近世中期からの茶人達が唐津焼の小碗をヨネハカリと称して野外の野点箱に納め愛用したからその名を借用したのであるが、近代収集の民具に木製の柄のある杓子を使うものなどを散見する。

ここにとりあげたのは、外径9.8cm、高さ4cm以上、内容量約140cm^{3}以上のもので、手首かけるための紐の孔があり、内外とも黒漆塗である。高台、紐孔の製作状態から大家族生活のための特製のものと見られる。これは、筆者所見の最古例である。

3. 銅製品

墨書用水滴と薬篭（印篭か）残欠がある。いずれも胎は銅板製（俗称アカガネ）で、板金加工（ろうづけ）品である。ろう付の技法は手慣れたものである。

4. 甲冑残欠「漆皮片」

甲冑の一部分の錣(しころ)又は、のど輪の一部とみられる。横に細長い鉄板に、本札(ほんざね)に似せて漆を盛りあげ、本式の小札威(こざねおどし)のまがい物を作ったものの、漆部分が本体からはげ落ちた漆皮片である。

地は黒漆塗で、威の紐が本朱(ほんしゅ)で描出してある。本朱は今回はじめての出土であるが、これは硫化水銀であって、当地ではいまだ食器には使用をみない貴重品である。

武器の貴重扱いがうかがわれることにも注意したい。（小島清兵衛）

注 1. 広瀬町教育委員会・富田川河床遺跡調査団『富田川河床遺跡発掘調査報告』（1977年3月）
2. 島根県教育委員会『朝酌川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書』Ⅰ（1979年3月）

Ⅲ　富田川河床遺跡出土の金属製品について

今回の調査で出土した金属製品の量は膨大なもので、コンテナ25箱に及ぶ。破損の激しいもの錆化の著しいものが多く、出土品全てを明らかにすることはできなかったが、主な内訳は表４、表５のとおりである。なお、第２遺構面以下の調査は部分的に行ったため、この表に掲げた数字をそのまま統計的に処理することはできないが、おおよその傾向をつかむことができる。金属製品の整理にあたって、便宜上、日常生活用品、建築用材、家具調度品、信仰関係、生産用具、武具、古銭、その他に分類した。こうした分類に従って出土層別に列挙したのが前述の表である。以下、各分類に従って金属製品の出土傾向を概観してみよう。

1.　日常生活用品

品名の判明したものは15種ある。そのうちほとんどが第１・２遺構面（第１～３遺構面は江戸時代、第４遺構面は江戸時代以前の層）から出土したものでもある。一概には言えないが、鉄鍋・茶釜・煙管等の出土は金属製品の普及または新しい文化・風習の普及といった面からみると興味深い。鉄鍋は第１・２遺構面からのみ出土していることから、土鍋→鉄鍋という変化の時期を示唆するものと考えられる。茶釜は第２遺構面から１点出土したのみであるが、茶臼その他茶道具は第１・２遺構面出土のものが圧倒的である。煙管は銅製あるいは黄銅製の火皿が大きく、長い雁首を有するもので、第１・２遺構面からのみ出土し、比較的その量が多い。茶釜・茶道具・煙管の出土状況から、江戸時代初期（寛永年間前後～寛文年間）に急速に茶の湯・喫煙の風習がこの地方にまで普及したと考えられる。錘は前述のとおり、厘（りん）秤に用いられたと考えられ、「慶長卯年」（1603）の年号が刻まれ、「雲搖」と読める刻印が打たれている。この錘は寛文６年（1666）大洪水直前と考えられる遺構を残す第１遺構面からら出土している。寛文６年の頃は既に秤座（西国は神（じん）家、東国は守随（しゅずい）家が総括）が設けられ、両家で製作した秤か両家の刻印を有する秤のみ使用が認められていた時代である（注１）。この錘には神家の刻印が認められないことから、中央から僻遠の地であるため未公認のまま使用していたのか、あるいは伝世されたものと考えられる。今回の調査以前にも棹秤の皿（注２）・錘や、まゆ形の分銅が採集されているようである（注３）。当時の流通機構を考えるうえにも貴重な資料といえる。

2.　建 築 用 材

鉄釘が多く出土している。角釘で、大小さまざまあり、第１・３遺構面を中心に出土している。

3. 家具調度品

品名の判明したものは2種ある。他の不明品中にも家具調度品に用いられたものが存在するかもしれないが、詳細については不明である。

4. 信　仰

仏具と考えられる銅製の瓶が1点出土しているのみである。

5. 生産用具

品名の判明したものは8種ある。そのうちほとんどは第1・第2遺構面から出土し、農林業関係のものが主体となっている。スキ先と一括遺物である板状鋳造製品はスキ付属品（ヘラ）と考えられる。那賀郡金城町民俗資料収蔵庫に類品がある。鉈・マサカリの類は、保存状態良好なものが多く、研磨すれば現在でも使えそうなものがある。

6. 武　器

品名の判明したものは10種ある。第1～4遺構面の各遺構面から出土しているが、他の金属製品と異なり、第4遺構面出土のものが比較的多い。内容は刀の部品あるいは付属品が主体となっている。小柄のうちには一見して火を受けたことが明瞭なものが数点ある。

7. 武　具

品名の判明したものは2種ある。第4遺構面を中心に出土していることが特徴的である。また、金属製品としての本体は朽ちて遺存しないが、鎧の錣あるいはのど輪の一部とみられる「漆皮片」が出土している。

8. 古　銭

不明・破片を含む235枚の古銭が出土している。出土古銭の内訳は唐銭・北宋銭・南宋銭・明銭・朝鮮銭・琉球銭・日本銭となっており、北宋銭が最も多い。遺構面別にみると、第4遺構面が最も多いが、時代別にみると江戸時代に入ってからのものが多い。寛永通宝は第1遺構面のみから出土しており、寛永通宝が当地方で流通し始めてから間もないうちに大洪水に遭遇したものと考えられる。

以上、分類毎に金属製品の出土状況を略述したが、出土した金属製品全体をみると、第1・2遺構面（寛永年間前後～寛文年間）からの出土品が多く、特に生活の匂い濃厚なものが第1・2遺構面から出土して点が特徴的である。こうした事象は、武器・武具の類が第4遺構面（江戸時代以前）出土のものが比較的多い点と比べて対照的である。富田城の城下にあり、絶えず臨戦状態にあった世情と松江城移城後の一寒村と化した町の世情を反映したものであろうか。（石井　悠）

注 1. 林　英夫『秤座』(吉川弘文館、1973年2月)
小泉袈裟勝『秤』(法政大学出版局、1982年11月)
2. 広瀬町教育委員会・富田川河床遺跡調査団『富田川河床遺跡発掘調査報告』(1977年3月)
3. 桑原英二『まぼろしの戦国城下町』(1975年12月)
4. 本文中（P.27）の匡秤用の体積、重量、密度、成分については松井整司氏（島根県立教育センター）による。

表4　昭和56年度富田川河床遺跡出土金属製品一覧

分類	日常生活用品																		築材建用	家具調度品			仰係信関	生産用具									
品名	鉄鍋	鉄鍋片	包丁	匙	茶釜	火ばし	和鏡	耳かき	毛抜き	煙管（吸い口）	煙管（雁首）	薬篭	覆輪	水滴	錘（匡秤用）	錠前	掛け金		鉄釘	かすがい	引き手	座金	飾り金具？	瓶（仏具）	鉈	マサカリ	鎌	スキ先	スキ付属品（ヘラ）	鍬先	熊手	ハサミ？	紡錘車
面1遺構	1		1	1		3	1	1		15	19		1	1	1		1		多量	若干	1	若干			2	1	1	1	3		1		
面2遺構	5	8	1		1			1	2	7	8			1		1	1		多量			多量			2	1	3					2
面3遺構			1	1				1											多量								1					
面4遺構			1	1		1						1							若干			1		1							1	
その他							3																					1				
計	6	8	4	3	1	4	4	3	2	22	27	1	1	2	1	1	2		多量	若干	1	多量	1	1	4	2	5	1	3	1	1	1	2

分類	武器										武具		古銭										その他							
品名	刀破片	縁頭	切鍔	羽	笄	小柄	小柄身	小柄鏃	刀子	熊手	冑覆輪	鎧飾り金具	唐銭	北宋銭	南宋銭	明銭	朝鮮銭	琉球銭	日本銭	不明銭・破片	鈴	石突状	円板	リング状製品	かぎ状製品	パイプ状製品	鉄滓	不明品				
面1遺構	1	1	1		1	1	2	9	1	3			1	31		4		1	11	27	2	1	1			1	若干	多量				
面2遺構							3	8	1	1	1		2	15		3				26	3						若干	多量				
面3遺構							2	1	2			1	2	14	1	1				7							若干	多量				
面4遺構	4			1			1	3	2		3	5	8	46	2	11				21	1			1	2		若干	多量				
その他																	1															
計	5	1	1	1	1	1	8	21	6	4	1	3	6	13	106	3	19	1	1	11	81	6	1	1	1	1	1	若干	多量				

表5　昭和56年度富田川河床遺跡出土古銭一覧

	古銭名	初鋳年	第1遺構面	第2遺構面	第3遺構面	第4遺構面	その他	計
唐銭	開元通宝	621	1	2	2	8		13
北宋銭	大平通宝	976	1					1
	至道元宝	995	2					2
	咸平元宝	998		1		1		2
	景徳元報	1004	1					1
	祥符元宝	1008				2		2
	祥符通宝	1008		6		4		10
	天禧通宝	1017	1		1			2
	天聖元宝	1023	1			1		2
	景祐元宝	1034	2	1		2		5
	皇宋通宝	1037	1		1	10		12
	至和元宝	1054				1		1
	嘉祐元宝	1056	1					1
	嘉祐通宝	1056			1			1
	治平元宝	1064				4		4
	熙寧元宝	1068	6	2	1	2		11
	元豊通宝	1078	4	1	1	9		15
	元祐通宝	1086	5	3	5	4		17
	紹聖元宝	1094	4	1		3		8
	元符通宝	1098			1			1
	聖宋元宝	1101			3	1		4
	大観通宝	1107				1		1
	政和通宝	1111	1			1		2
	宣和通宝	1119	1					1
	計		31	15	14	46		106
南宋銭	淳熙元宝	1174				1		1
	淳祐元宝	1241				1		1
	皇宋元宝	1253			1			1
	計				1	2		3
明銭	洪武通宝	1368	3	3	1	7		14
	永楽通宝	1408				4		4
	宣徳通宝	1433	1					1
	計		4	3	1	11		19
朝鮮銭	朝鮮通宝	1423					1	1
琉球銭	大世通宝	1454	1					1
日本銭	寛永通宝	1636 (寛永13)	11					11
小計			48	20	18	67	1	154
	不明銭		13	13	6	11		43
	破片		14	13	1	10		38
合計			75	46	25	88	1	235

Ⅳ　富田川河床遺跡の陶磁器について

今回の調査区全体からほぼまんべんなく陶磁器が出土したが、各遺構面によって組成の在り方やそれぞれの占める割合に相違がある。ここでは出土陶磁群の特徴について述べ、基礎となる資料の抽出をしてみたい。

最も古いと考えられた第5遺構面の遺構である井戸跡（ＳＥ024）から出土した141点の内訳は、中国製磁器（青磁碗・盤、白磁皿・盃、染付碗・皿、南蛮系焼締の壺・鉢）が47点で33パーセント、日本製陶器（美濃灰釉皿・鉄釉碗・壺、備前焼甕・鉢・壺・擂鉢・他）が35点で22パーセント、土師質土器が58点41パーセントを占めている。類品の稀なものではこの面からタイ製四耳壺が出土している。

次に、第4遺構面の一つであるＦＴ区ＳＢ035内の埋甕3付近から出土した113点の内訳は、中国製磁器（青磁碗・皿、白磁皿、染付碗・皿、南蛮系焼締壺）が38点で33パーセント、日本製陶器（美濃灰釉皿・碗、備前焼擂鉢・壺・甕）が27点で24パーセント、土師質土器が48点で43パーセントを占めている。類例の稀なものでは図60の2の青磁蓋はつまみが分銅形や円盤形になるもので、図60の9は中国製の青磁線描蓮弁文碗を美濃で模倣したもので、端正な蓮弁が施される。

また、ＦＴ区の土壙ＳＫ194から出土した236点を見ると中国製磁器（青磁碗・皿、白磁皿、染付碗、褐釉壺・四耳壺、南蛮系焼締壺・鉢・他）が39点で17パーセント、日本製陶器（美濃灰釉皿・筒碗、美濃鉄釉碗、備前擂鉢・壺・甕・他、唐津碗、越前焼擂鉢）が34点で14パーセント、土師質土器が163点で69パーセントになる。

美濃の灰釉の筒茶碗や越前焼擂鉢、土師質火鉢や中国製茶褐磁碗等が含まれているが、いずれにし

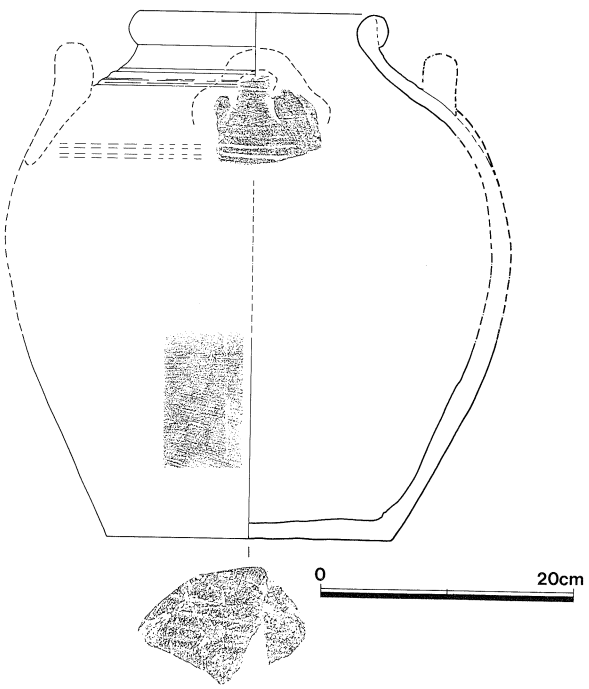
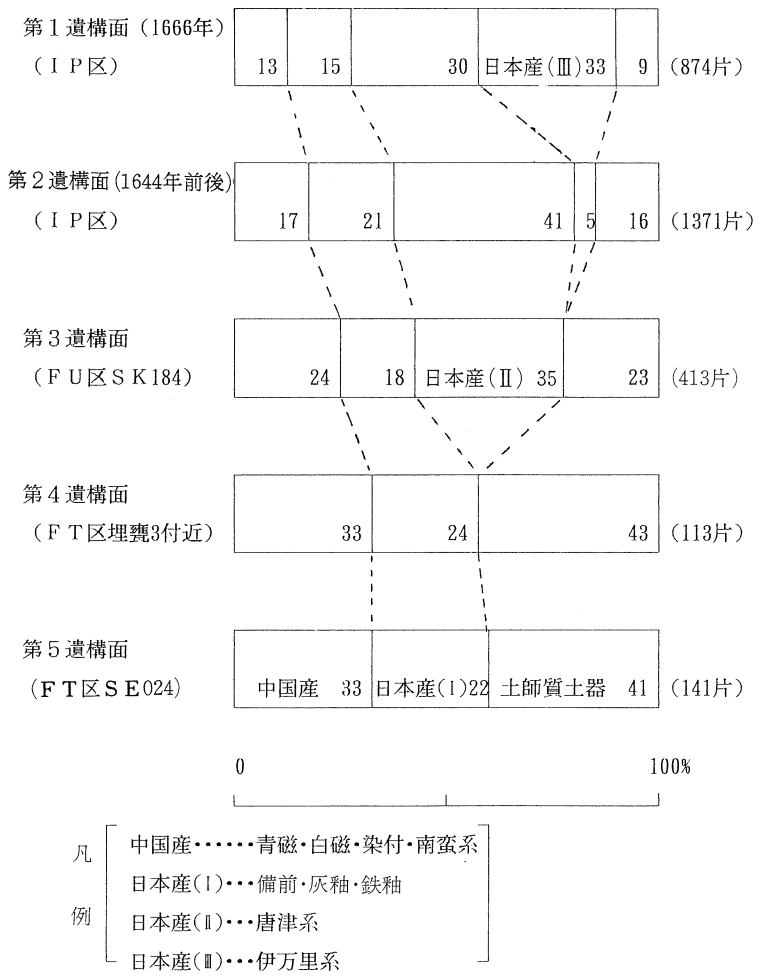


図1　タイ製四耳壺（ＦＵ・ＦＴ区出土）

ても土師質土器皿が、見かけの数量としては圧倒的に多く、同様の組合せの中で白磁皿や備前焼擂鉢が優位である点も、この遺構面の遺物群には共通している。なお、ＦＴ区からは華南三彩水鳥水注の破片も採集された。

第３遺構面ではＦＵ区の土壙ＳＫ184から出土した413点についてみると、中国製磁器（青磁碗・皿・他、白磁皿、染付碗・皿・坏、南蛮系焼締壺・鉢・他）が99点で24パーセント、日本製陶器（美濃灰釉皿・他、鉄釉碗・他、備前焼壺・甕・徳利・擂鉢・他、唐津焼碗・皿・鉢・壺・他）が210点53パーセント、土師質土器は94点で23パーセントを占める。日本製陶器の中では唐津焼の皿・碗が146点35パーセントと優位にあって、これまでの組成では見られなかった新しい傾向を示している。なお、これによって、中国製磁器と土師質土器の占める割合が低下しているということは、これら二者の持つ機能を唐津焼が

表１　　富田川河床遺跡第７次調査における陶磁器等の出土割合の推移



替ってつとめるようになったことを暗示している。

例えば、土師質土器皿がしばしば見られた燈明皿としての使用の痕跡が図54の17の唐津焼皿にも見られる例などが、そのことをより積極的に裏付けている。なお、図54の17は唐津焼皿の中では占める割合の小さな、いわゆる絵唐津の皿で輪花形をしているものであるが、こうしたものまで燈明皿として使用している点には注意される。

なお、ＦＵ区の第３遺構面のＳＫ188からもタイ製四耳壺が出土し、ＳＫ203からは美濃の倣青磁蓮弁文碗が出土している。

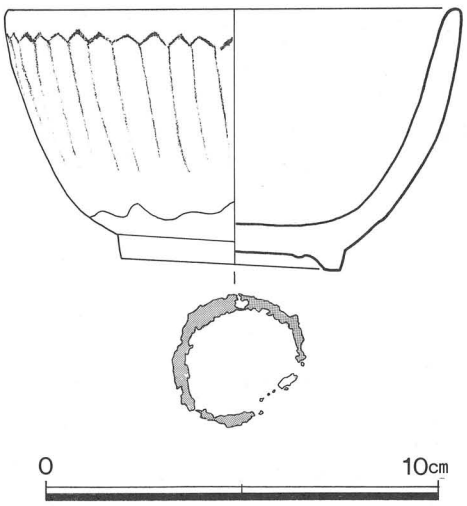


図２　美濃倣青磁蓮弁文碗（ＳＫ203出土）

第２遺構面の陶磁器の様相はＩＰ区の下層の建物跡４軒によって確認される。建物跡ＳＢ031を部分的にしろ覆っていた砂層中から「寛永21年」（1644）銘木札が発見された点から共伴する陶磁器は小なくとも1644年を遠く隔たることのない時点以前の遺物群と考えて差しつかえないものである。ＩＰ区下層の出土陶磁1,371点を見ると、中国製磁器（青磁碗・皿・香炉・他、白磁碗・皿・坏・他、染付碗・皿・他、南蛮系焼締陶壺・鉢・他）が17パーセント、日本製陶磁器（美濃灰釉皿・他、美濃鉄釉碗・壺・他、備前壺・甕・鉢・擂鉢・他、唐津碗・皿・鉢・他、伊万里碗・皿・他、その他の陶磁）が67パーセント、土師質土器皿が16パーセントであり、日本製の中では唐津焼が実に41パーセントを占めており、伊万里焼が５パーセントではあるがこの段階から確実に消費・廃棄されていることを窺わせる。なお、土師質土器は16パーセントをいぜん占めている。

ここで注意されるのは、これらの遺物が小鍛冶を中心とする鍛冶屋の建物群から採集されたものであるという点である。したがって、生活用具としてこうした陶磁器を使用していたのが、城の松江移城によって山陰の一都邑と化した富田の住人達、特にこの場合は鍛冶職人を中心とした人々であったことが明確であり、伊万里焼が『隔蓂記』などの記述から知られるように、1630年代の後半から京都市内等へ流通を始めることであるならば、地方へ運ばれた肥前磁器の消費遺跡における実体の早い時期の事例といえる。

なお、ＩＰ区下層の個々の遺構からの出土状況は調査の概要で既に記述されている。

第１遺構面は調査区全体に遺構も良く遺っており、個々の出土状況については調査の概要の方に記述がある。中国製陶磁器（青磁器・皿・香炉・盤、白磁皿・坏・他、染付碗・皿・鉢・坏・他、南蛮系焼締陶壺・鉢・他）はＩＰ区の上層で13パーセントまで微減して

きており、中でも青磁や南蛮系焼締陶の率が低下してきている。日本製陶磁器の中では伊万里焼が33パーセントを占めるのが特徴的となり、30パーセントを堅持する唐津焼や備前や美濃を合計すると78パーセントに達し、土師質土器は9パーセントに大きく後退してきている。

すなわち寛文6年（1666）の段階になると、当該地域の日常用品としての碗・皿は圧倒的に肥前陶磁としての唐津・伊万里の製品が浸透していることが表から良く窺える。

なお、ＩＰ区上層の遺物と第2遺構面に属する下層の遺物群を子細に比べると、唐津焼と伊万里焼の関係が大きく変化していることがわかる。他の要素に比べ、特にこの関係の変化が明瞭であるのは、唐津焼が占めていた機能の相当部分を伊万里焼が担うようになったことを意味している。このように、機能の量を相対的に指す破片の数量の中にも、かなりな勢いで消費遺跡に普及していく伊万里焼の実態をかいま見ることが出来るのは興味深い。

以上、第5遺構面から第1遺構面までの陶磁器組成と占める割合の軽重をグラフにすると表1のようになる。最も早い段階では備前の甕・壺・擂鉢と土師質土器皿に中国製の青磁・白磁・染付（白磁青花）の組合せに若干の美濃の製品と中国南部の製品ではないかと現段階では推察される南蛮系焼締陶が加わっている。第3遺構面の時期になると、唐津焼の皿・碗が突然出現し、しかも相当の市場性を確保する形で登場してくるのである。しかし、これが何時の時期かということは、まだ解決を見ない問題であって、今回の調査でも、明確な時期を押える資料には恵まれなかった。

但し、第7次調査において陶磁組成の枠組みの大要が窺えた成果は大きいものがある。第2遺構面では江戸時代を通じて世界に飛躍する肥前磁器としての伊万里焼初期の様相を把握できる資料が出土し、それは紀年銘をもった木簡と共伴関係にある資料との比較により、重要な歴史性を有することになった。また、肥前磁器が、この山陰地方の都邑にどのようにその後受け入れられたかという点は、富田川河床遺跡の最終の状態を見れば明らかであり、これ程明確に国産磁器の流通と受容に関して答えてくれた遺跡はまだ例を見ない。

（村　上　　勇）

V　第7次調査で検出した柱痕の木材鑑定

供 試 料　　富田川河床遺跡の柱材（1981年11月検出）　　8点

樹 種 別　　クリ Castanea crenata Sieb. et Zucc.（ブナ科）

道管の分布は環孔状配列を示す。孔圏道管の直径は大きく、配列数も多い（多列）。孔圏外（晩材部）の道管は直径が小さく、放射状、火炎状あるいはそれに近い配列をしている。放射組織は単列同性型を示す。短接線柔組織が認められる。周囲には仮道管が存在している。道管放射組織間壁孔はやや小型ないし、やや大型の不規則な形を示し、対列状、交互状などの配列をしている。

組織がクリに類似するものとしてスタジイがあるが、スタジイは孔圏の道管配列は1～数列で断続的であり、全体的に年輪内で放射方向に配列する傾向がある。また、道管放射組織間壁孔は大型で柵状の形態を示す。観察した試料においてはいずれもスタジイに見られるこのような組織的特徴は認められなかった。

以上の理由から供試料8点の樹種名をすべてクリであると鑑定する。

（島根大学農学部助教授
吉 野　　毅）

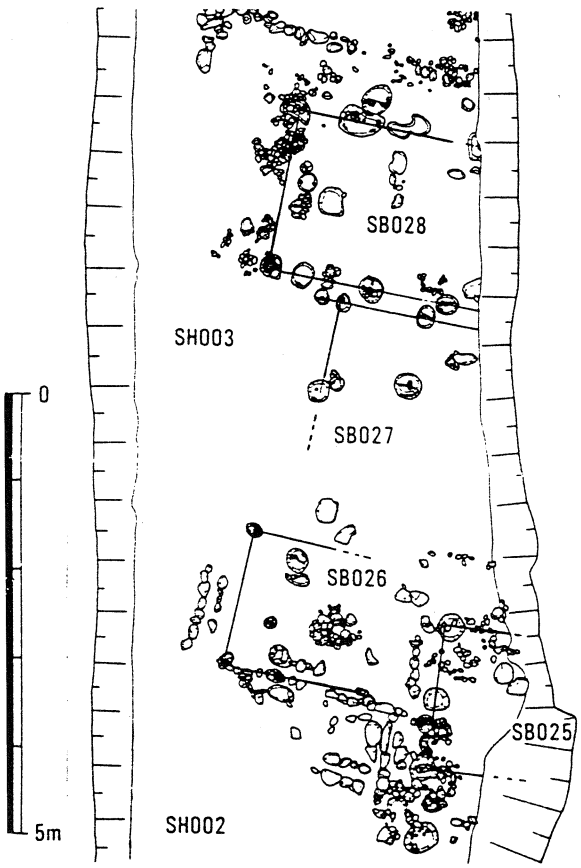
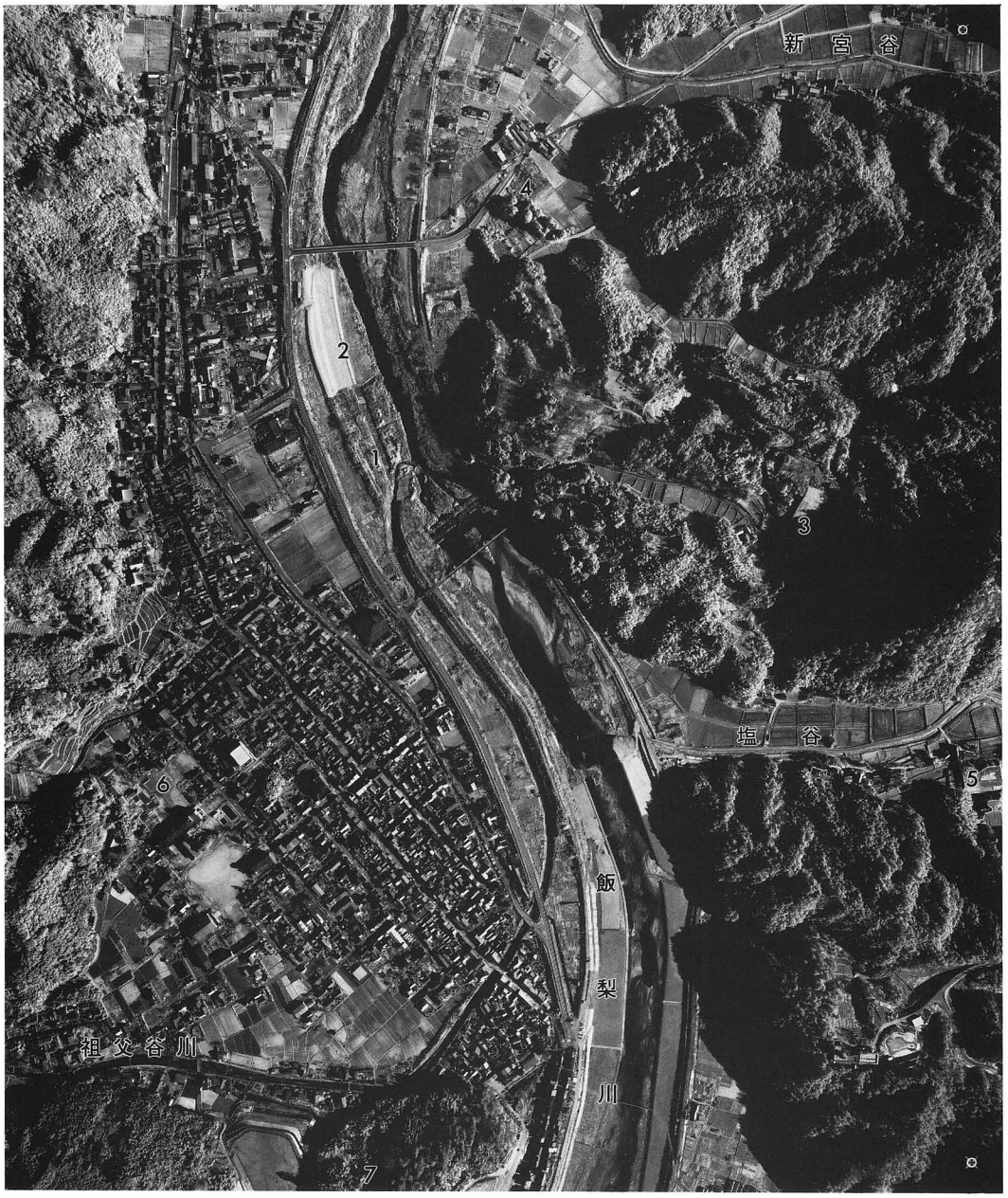


図 建物跡と柱穴（・は柱痕）

表 柱痕の樹種一覧

区	建物跡	柱穴番号	樹種名
HR	SB 025	P 1	クリ
〃	026	7	〃
〃	〃	8	〃
〃	〃	10	〃
〃	〃	14	〃
GR	027	10	〃
〃	〃	14	〃
〃	028	1	〃

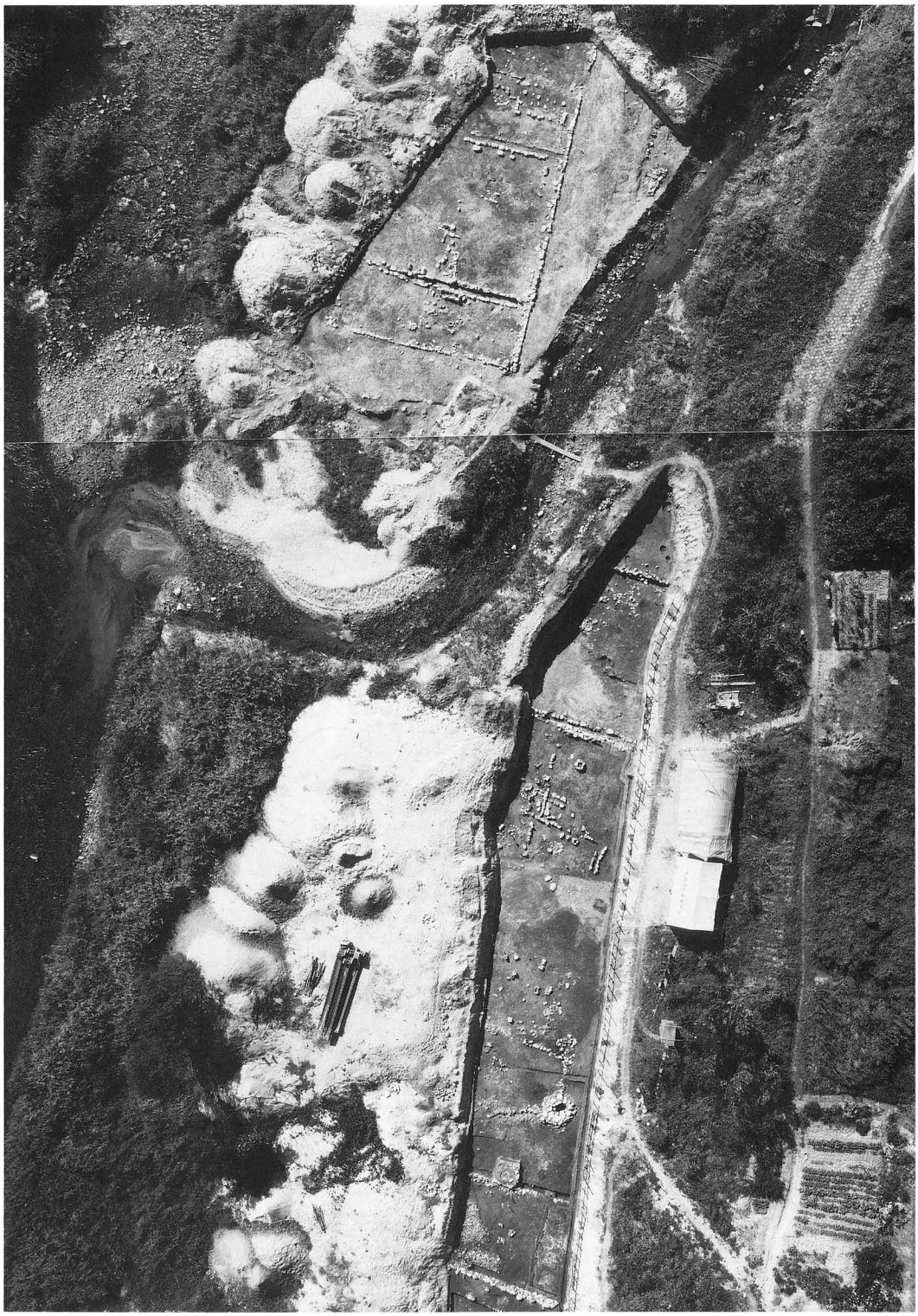
写　真
昭和56年10月撮影



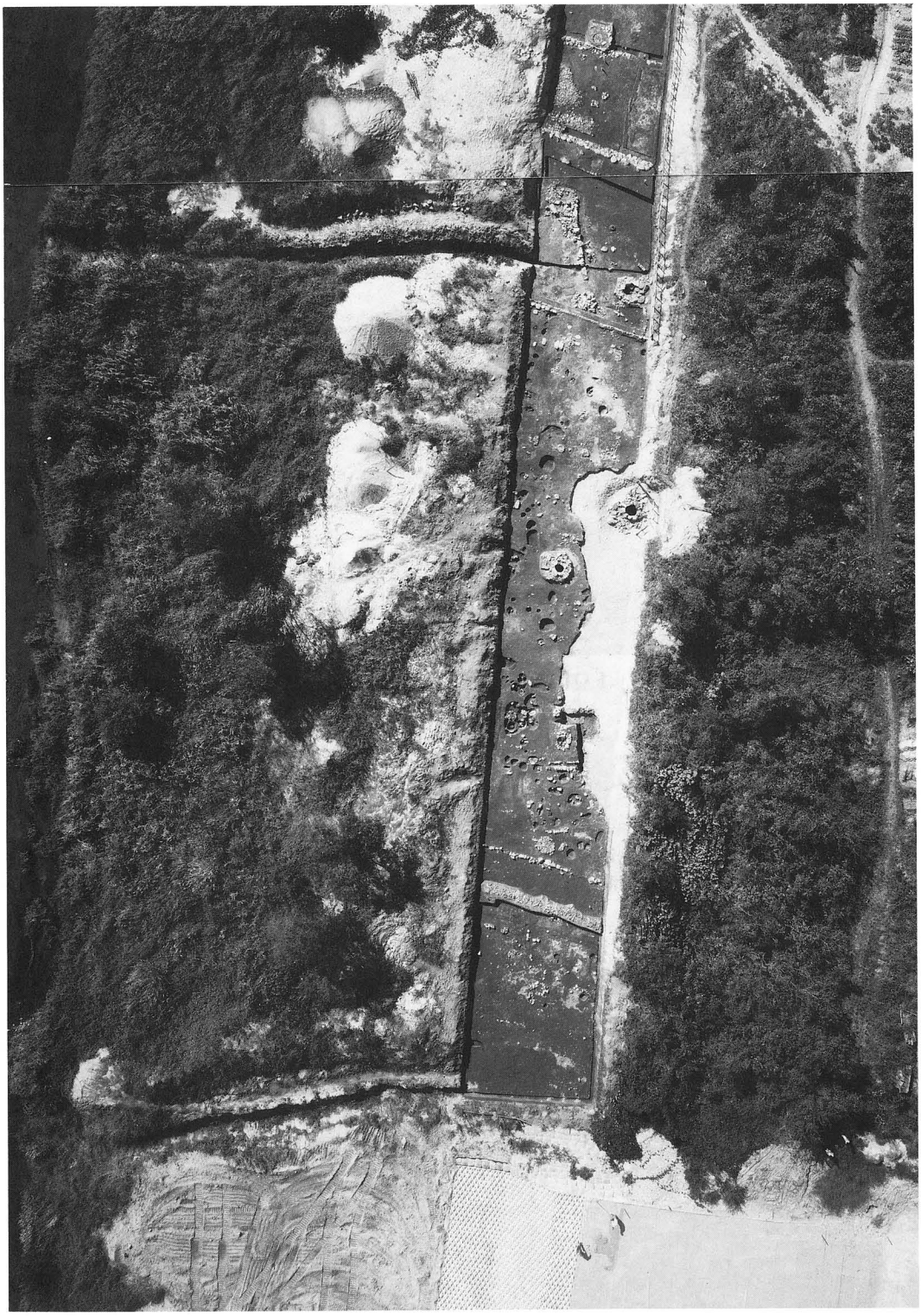
富田川河床遺跡周辺の航空写真

（1．昭和56年度調査区　2．昭和55年度調査区　3．山中御殿跡
4．里御殿跡　5．明星寺跡　6．広瀬藩邸跡　7．富田八幡宮）

図版２



富田川河床遺跡の航空写真 —昭和56年10月撮影—
（ＩＰ・ＩＱ・ＨＱ・ＨＲ・ＧＲ区）

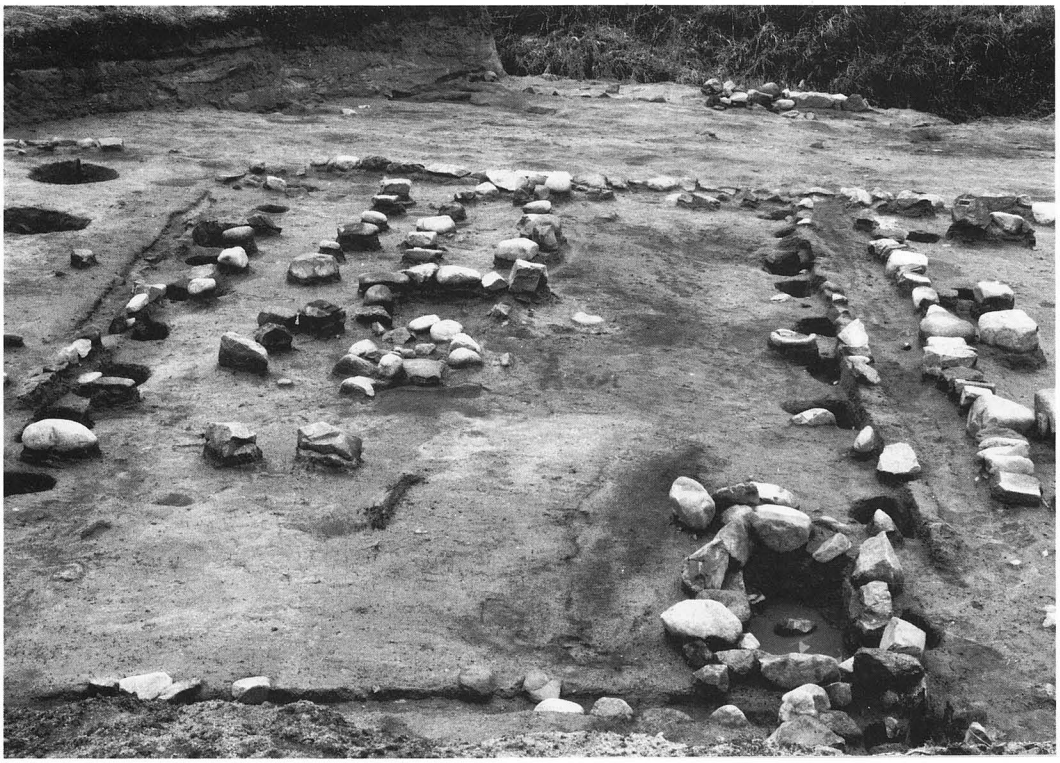


富田川河床遺跡の航空写真 —昭和56年10月撮影— （ＧＳ・ＦＴ・ＦＵ区）

図版4

第１遺構面（ＩＰ・ＩＱ区の遺構―道路に沿って並ぶ屋敷群、西から―）

ＩＰ・ＩＱ区の遺構（南から）



ＩＰ・ＩＱ区建物跡（ＳＢ019）の内部（東から）

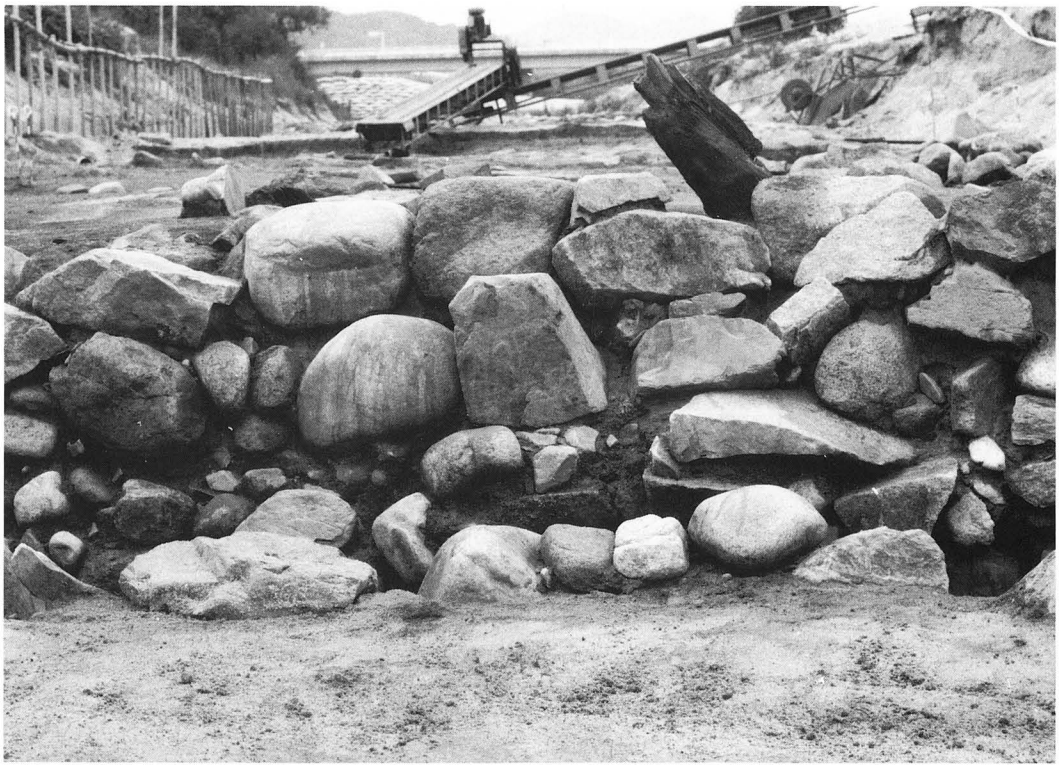
ＩＰ・ＩＱ区建物跡（ＳＢ021）の内部（東から）

図版 6

ＨＱ区の建物跡（ＳＢ023、ＳＢ024、西から）

埋　設　桶（ＳＸ028、北から）

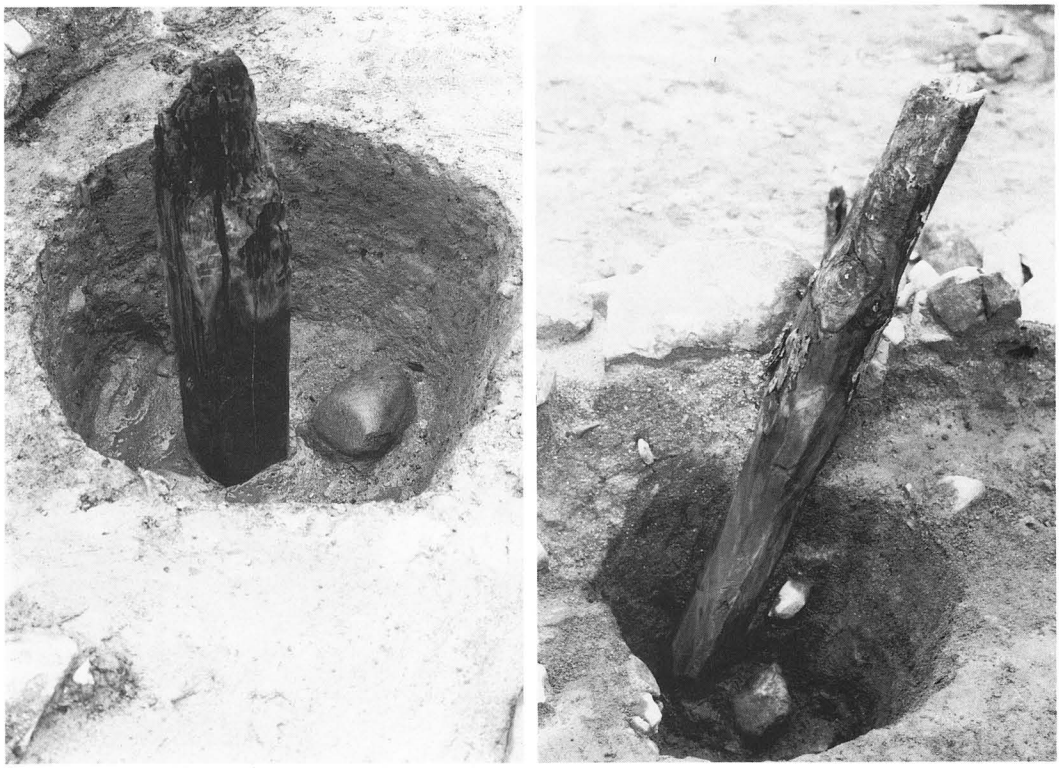
ＧＲ区の遺構（石積溝、建物跡他、南から）



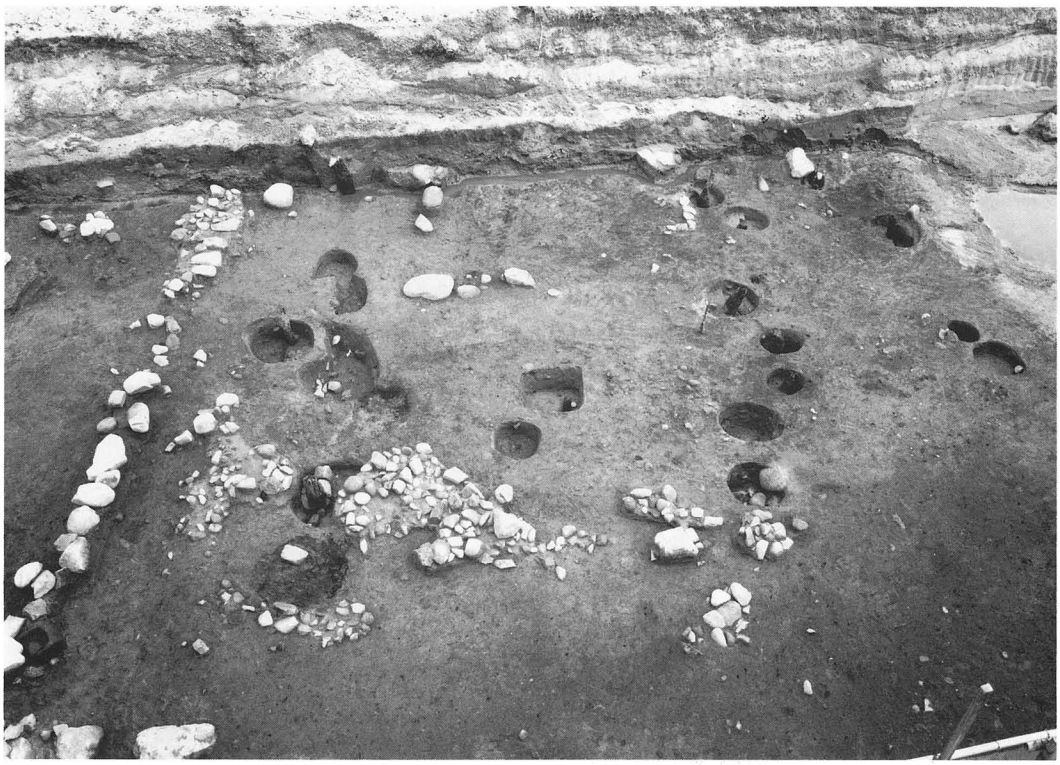
石　積　溝（ＳＤ033、南から）

図版 8

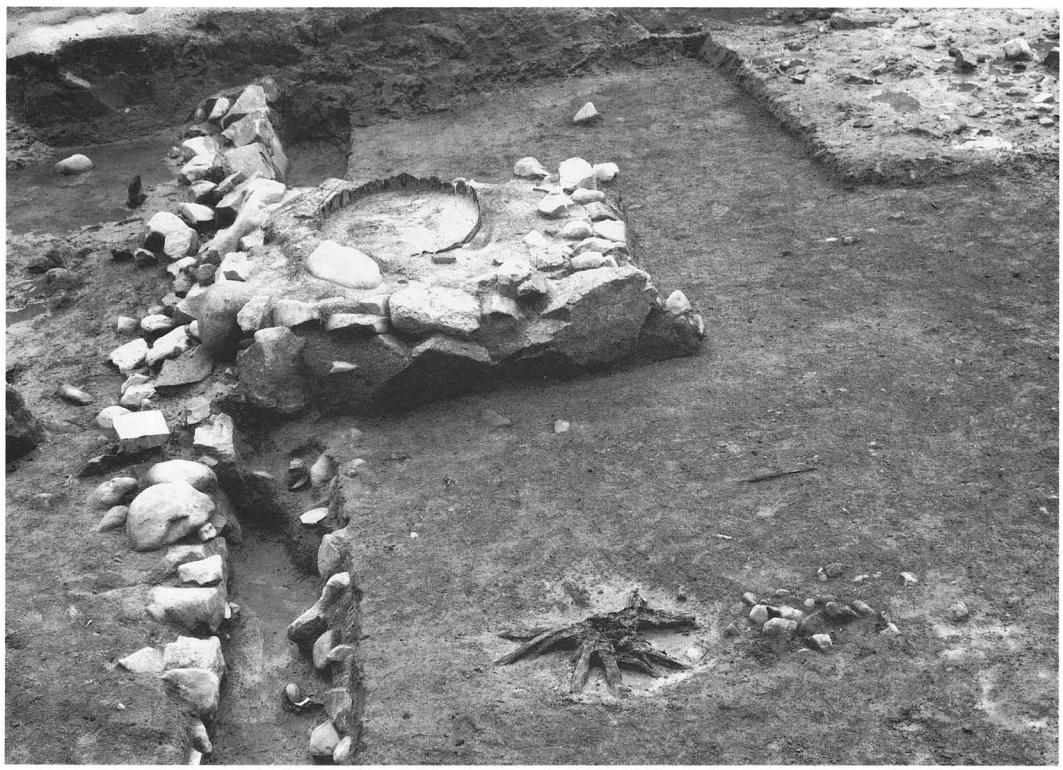
石　組　溝（ＳＤ034）と土壙（ＳＫ173）



柱穴と柱材（左Ｐ１、右Ｐ17）



ＧＲ区の遺構（ＳＢ025、ＳＢ026、西から）



ＧＲ区の遺構（ＳＸ030、ＳＤ035）と立木痕

図版10

埋　設　桶（ＳＸ030、西から）

溝（ＳＤ035、東から）